資料

（昭和四十七年十月）

第十七回「合宿教室」（阿蘇）感想文集

―日本人としての自覚をもとめて―

社団法人　国民文化研究会

―“合宿教室”17年の歩み―

回数	年　度	開催地	参加人員	主　要　講　師
1	昭和31年	霧島	92	広田洋二・日下藤吾・夜久正雄
2	〃 32年	福岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒樹
5	〃 35年	雲仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲仙	208	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿蘇	215	福田恒存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大分	215	岡潔・花見達二・木内信胤
11	〃 41年	雲仙	240	福田恒存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄
15	〃 45年	雲仙	491	小林秀雄・木内信胤
16	〃 46年	霧島	302	村松剛・木内信胤
17	〃 47年	阿蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
累計参加人員　4,220 名				

第十七回〝合宿教室（阿蘇）〟全参加者の感想文と短歌詠草

とき　昭和四十七年八月五日から九日まで

ところ　熊本県阿蘇郡阿蘇町黒川字松の木「阿蘇の司」

参加総数　四〇二名

阿蘇・中岳の噴火口

目　次

〝はしがき〟に代えて……理事長・小田村　寅二郎…2

大学別参加者数・その他の人数の内訳……5

「合宿教室」の日程（四泊五日間）……6

今回の〝合宿教室〟のあらまし……7

感　想　文と第二回目の短歌詠草……**参加者全員**…25

短　歌　詠　草……合宿中第一回目の創作作品……**参加者全員**…138

あとがき……関　正臣…165

カメラ・レポート　1～54（27ページから133ページまで左ページに連載）

〝はしがき〟に代へて

小田村寅二郎
（本会理事長・亜大教授）

第十七年目の〝合宿教室〟は、参加者総数四〇二名によって、この八月上旬、四泊五日間、九州の阿蘇山麓において開催いたしました。

今年は、時あたかも、わが国と中共政府とのあひだに、新たな国交を開設する議が急遽抬頭してまゐり、この〝合宿教室〟においても、この問題が講義ならびに討議のポイントになりました。幸ひなことに、今回の講師としてお招きしてをりました方々は、いづれも日中問題にご縁の深い方々でありましただけに、時宜に適した合宿展開を見ることができました。すなはち、今年で十三年間の連続御登場となられた世界経済調査会理事長の**木内信胤氏**は、日華協力委員・日韓協力委員をあはせ兼ねてをられますし、また中国の学者で戦後わが国に逗留されてをられる**胡蘭成氏**はもとより中国通であられるわけですし、さらにこの合宿教室二度目のご出講に当られる経済学博士の**山本勝市氏**は、元代議士として、また自民党の「日中国交正常化協議会」の重要なメンバーとして、現に大活躍してをられる最中であられたからであります。かうした三人の方々から、わがマスコミの中共礼賛一辺倒の論調とは別に、マスコミに報道されない「真実」についての解明が重ねられましたことは、参加者一同に執って、何物にも代へ難い喜びであったのであります。

この稿を私が記してをりますいま（十月四日）は、すでに田中首相の訪中が完了し、日中両国共同声明が出された一週間後でありますが、今後のわが国外交の在り方をはじめ、中共と親密な関係が結ばれたあとのわが思想界・教育界が、どうゆさぶられてゆくのか、それをどう〝正常化〟へ移行させ得るのか、その方針は樹てられてゐるのか等々、気にかかることが、

次から次へと脳裏に去来いたします。外国との国交が正常化されるその事自体は、好ましい事に相違ありませんが、その国交正常化なるものが、わが国の思想界を、逆に〝不正常化〟に追ひ込むためのスタートの役目をするようなことであっては、断じてならないのでありまして、これについて、われわれ国民は、いまだに田中内閣筋から、一向に配慮の心くばりを聞かされてをりません。この点が何よりも心痛の種であります。

かかる趨勢がすでに十分に予見せられた今夏の〝合宿教室〟でありましただけに、日中問題についての討議に熱が籠められただけでなく、この〝合宿教室〟本来の課題であります所の〝一人の真正なる日本人いでよ！〟の念願、ならびにそれに集中しての全員の努力は、例年にも増して真剣さを帯びたものでありました。具体的には、

一　「国」とか「国家」を考へる場合に、ともすれば、政治権力と一体のものと考へたり、政治体制を優先して考へようとしたりする現代の学園内における一般的風潮から、各人各様に勇気を出して、われとわが心を救出すること。

二　「天皇」についても、ピラミッドの頂点といふ風な見方だけで見てしまったり、政治的位置、体制的判断だけで天皇を忌避してしまふやうな現代風潮から別離し、歴代天皇の大御心を、残された無数の御製を具体的に、正確に、味はひつつ大御心の真実をお偲び申す所から再出発すべきこと。

三　「人間」そのものについて考へる場合にも、その人の「心」を焦点にしぼって見る力を養ふこと。殊に自他の関係における考へ方に重点を置き、献身的・没我的要素を常時的に鍛へてゐる人間の方が、自我・功利的立場で人格の修養を試みてゐる人々よりも、はるかに幅広い深さのある人間に成長し得ることや、その人々の方が、生来その心身に秘めて

ある潜在的な個性を、より一層鮮明に、発揮できるやうになりうること。

四　人間に取って大切な「読書」についても、字義や文意の解明を以て終れりとする態度だけでは、「読書」とは言へないこと。その文を書いた人の心のうちを偲び尽すやうな努力を伴なってこそ、読書といふべきものになること。従って、良き古典を選ぶことがどれだけ重要なことか、また、心に味はひ読む所にこそ、学問の第一歩があること、などをよく認識して読書に取組むこと。

等々が全参加者によって、あるひは講義後に、あるひは班別討論の場において、お互ひ同士の間で疲れ果てるまで討論されました。これが、この〝合宿教室〟の第二の概要でありました。

さて、ここに編したこの「感想文集」は、全参加者が解散間ぎはに走り書きしてくださったものであります。全文を載せ得なかったのは、紙面の都合でやむを得ぬことで、ご容赦いただきたいと存じますが、この編集を独りで引き受けて下さった関正臣さん（国学院出身、宮司、五十歳）は、国民文化研究会グループでの戦前からの同人ですし、今回の合宿では、第三十六班の助言者を務められましたので、各人の文それぞれに、各人の言はれんとする個所の摘出については、十分な配慮がなされたことと存じてをります。

どうか書かれた方々、お読みいただく方々、すべての方々に、全頁を通じてご判読を賜はりたいと念願するものであります。

「第17回合宿教室」記念撮影（参加者402名）於「阿蘇の司」

参加者

（学生班　五十五大学）（洋数字は参加学生数）

東大2　九大21　岡山大1　神戸大1　山口大1　島根大1　富山大1　佐賀大2　大分大1　長崎大12　熊本大31　鹿児島大26　東京工業大5　東京外語大3　早大19　慶大6　立大2　法大4　明大6　亜大31　上智大2　拓大2　明星大2　専大5　中大4　駒大5　国学院大2　立正大2　東京学芸大1　東京電機大2　東京理科大1　日経短大6　女子美術大1　桜美林大1　玉川大3　玉川女子短大2　成蹊大1　中央鉄道学園大1　成城大1　岡山商大3　阪大1　関西学院大1　香川大1　下関市立大1　延岡短大1　西南学院大3　福岡教育大3　福岡大10　福岡女子大2　中村学園大2　国際経済大1　熊本商大6　熊本工業大1　熊本短大1　鹿児島経済大4　高校卒1

計　二六二名（うち女子四五名）

（社会人・教員班）会社員　熊本県小・教諭　福岡県小・中・高教諭　実業　団体職員　計　五八名

（招聘講師）三名　（来賓参加）二名　（大学教官有志協議会）四名　（国民文化研究会）五三名　（会友）二名

（見学参加者）五名　（写真班・記録班・事務局）一三名

総合計　四〇二名

熊本県－阿蘇国立公園－「ホテル　阿蘇の司」にて

＝第17回"合宿教室"日程表－昭和47年8月｛5日（土）／9日（水）｝4泊5日＝

主催｛大学教官有志協議会／社団法人国民文化研究会

	8月5日（土）（第1日）	8月6日（日）（第2日）	8月7日（月）（第3日）	8月8日（火）（第4日）	8月9日（水）（第5日）	
7:00		（起　床） （洗面・清掃） 朝の集い （国旗掲揚・体操） 朝　食	（起　床） （洗面・清掃） 朝の集い （国旗掲揚・体操） 朝　食	（起　床） （洗面・清掃） 朝の集い （国旗掲揚・体操） 朝　食	（起　床） （洗面・清掃） 朝の集い （国旗掲揚・体操） 朝　食	7:00
8:30	↓ 会場入口受付で、所属班を確認して下さい。 参加者は、一班一〇名前後の班編成とします。	（8:30）	（8:30）	（8:30）	（8:30） 合宿運営委員 アッピール	8:30
9:00		（講　義） 世界経済調査会理事長 木内信胤先生	（講　義） 経済学博士 山本勝市先生	（講　義） 評論家 胡　蘭成先生	（9:00） （全体意見発表）	9:00
10:30		（10:30）	（10:30）	（10:30）	（10:30）	10:30
10:40		（10:40） （質疑応答） 木内信胤先生	（10:40） （質疑応答） 山本勝市先生	（10:40） （質疑応答） 胡　蘭成先生	（合宿をかえりみて） 小田村寅二郎先生 （11:00）	11:00
11:20		（11:20）	（11:20） （11:30） （講義）和歌創作導入 亜細亜大学教養部長 夜久正雄先生	（11:20） （11:35） 諸先生のお話 （大学教官有志）	感想文執筆と 第2回和歌創作	
12:00		中　食			（12:00） 閉会式（この後中食）	12:00
12:20		（12:20）	（12:30） 記念撮影 （1:00）	（12:30）		
1:00		（班別討論）		中　食	（解　散）	1:00
1:30		（1:30）		（1:30）	1:30	
2:00	（2:00） 開　会　式	（講　義） 鹿児島大学教授 川井修治先生		（講　義） 国文研理事長 小田村寅二郎先生		
2:30	（2:30） 合宿趣旨説明と 合宿諸注意伝達 （その他）	（3:00）	阿蘇登山 （中食携帯）	（3:00）	3:00	
3:30	（3:30） （班別自己紹介） （班別討論）	（班別討論）	和歌創作	（班別輪読）または （班別討論）		
4:30				（4:30）	4:30	
5:00	（5:00） 夕　食 入　浴 散　歩	（5:00） 夕　食 入　浴 散　歩	（5:00） 夕　食 入　浴 散　歩 （和歌提出）	地区別・大学別連絡会 （5:15） 夕　食 入　浴 散　歩	5:15	
7:00	（7:00） （講　義） 福岡教育大学助教授 山田輝彦先生	（7:00） （輪読導入講義） 福岡県立修猷館高校教諭 小柳勇太郎先生	（7:00） （青年研究発表） 今林賢郎・奥富修一 （8:00） （8:20）	（7:00） （和歌全体批評） 夜久正雄先生 （8:00）	7:00 8:00	
8:30	（8:30） （班別討論）	（8:30） 聖徳太子の資料について （班別輪読）	慰霊祭執行 （9:00） 中間感想文執筆 （9:20） （班別懇談）	和歌相互批評 （班別） （9:30）	9:30	
10:00	（10:00） 就　床	（10:00） 就　床	（10:00） 就　床	（最後の夜の集い） 就　床		
10:30	（消　灯）	（消　灯）	（消　灯）	（消　灯）	10:30	

1. 同じ班の人々のあいだに限らず、全参加者一体となって、心の交流をはかっていただきたい。
2. 上記の日程は、合宿中途において一部変更されることもある。
3. 集合は、敏速に行うこと。
4. 講義の時間には、会場に講義開始5分前までに、必ず入場すること。
5. 講義のはじめと終りは正座し、司会者の指示に従って講師にれをすること。
6. 講義中は服装、姿勢に留意し、度を過したような不作法は慎むこと。
7. 講義会場、自室をとわず、部屋にはいるときに、スリッパをぬぐときは、必ず向こうむきに、そろえて脱ぐこと。
8. 質問は、司会者の指示をうけて行い、質問者は、質問のはじめに、
   ①班名　②学校名と学年（社会人は就職先）　③氏名を、明瞭な言葉で告げること。
9. 講義会場における席次は、常に移動するが、必ず班別に、指定の場所にまとまって、着席すること。

第17回〝合宿教室〟のあらまし

第一日

（八月五日・土曜日）

昭和四十七年八月五日、全国各地から〝合宿教室〟開催地、阿蘇の高原に、はるばる四〇二名が参集した。その沿道には、「友よと呼べば友は来りぬ」の横幕が、大きな白地の布に黒々と墨書されて、参加者を迎えていた。

開会式

第十七回目の合宿教室は、九州大学の学生・堀田真澄君の力強い開会宣言によって開始された。続いて《戦時平時を問わず祖国日本の為に尊い生命をささげられたすべての祖先の御霊》に対し一分間の黙禱をした後、国歌を二回斉唱し、続いて、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が、

「この合宿では、年齢の差や大学の違いなどは問題ではありません。講師の先生方や班員の一人一人の言葉に耳を傾けて聞いて下さい」

と話された。さらに大学教官有志協議会を代表して、夜久正雄先生は、

「私は学生時代に、自分が日本という大きな流れの中のひとしずくだということを知り、非常な感銘を受けました。その気持が今日までの自分を支えてきました」

とのべられた。その後オリエンテーションに移り、学生代表として立った鹿児島大学の学生・徳丸雅信君は、大学でのサークル活動の経験を述べ、志を同じくする友とさえ、心を通い合わせることが如何に難しいか、を感じていることを述べ、最後に、明治天皇御製

若きよにおもひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり

の二首を心をこめて拝誦し「この合宿でまごころを大切にして共に学んでいきたい」と語った。又、チベット人留学生ペマ・ギャルポ君が、隣国中共から侵攻を受けて以来今日まで経験してきた数々のチベットの受難を語り、最後に、我々日本の学生・青年に対して、中共の動きに対してきびしい注意を喚起した。（カメラ・レポート1～9参照）

開会式とそれに続く一連の行事を終えたあと、全参加者は各々の班室に帰り、自己紹介と各人の合宿参加への動機などについて、思うところを述べあった。（カメラ・レポート10・11参照）

講義　「われらにとって国家とは何か」

福岡教育大学・助教授　山田輝彦先生

山田先生は、まず「現代の日本人、特に若い世代が、国家イコール国家権力、そしてイコール悪と簡単に片付ける風潮がある」と指摘され、続けて「国家には権力機構や組織、制度など客観化することのできる、いわば外なる国家と、さらに私たちの心の中の価値であり命であるところの内なる国家と言えるものとがあります。そしてその内なる国家は、私たち自身が自分の心で味わい、感ずる以外にはわかりません」

と言われ、国を心で感ずることの少ない現代青年に対し、国家の本質を見失わないよう強く訴えられた。又、テルアビブの空港事件など、左翼学生による一連の事件を例にとられ、犯人たちの心の中には、どうしようもない〝空虚感〟があると指摘され、それに関連して

「戦後の教育で徹底的に排除されてしまったのは国家ですが、日本の中で生活している以上、国のことを忘れて生きてゆくと、本当の人生の充実感がなくなって空虚感だけが残ってしまいます」

と述べられ、戦後教育の根本的欠陥と、そのために生じた混乱と過ちとを、鋭く指摘されたのである。そして、「この合宿中に諸君は、『国』という問題を徹底的に洗い直してほしい」と結ばれた。先生の御講義は、「われらにとって国家とは何

か」という重大かつ忘れられ勝ちな問題を、私達一人一人があらためて考え直すことを鋭く迫ったものであった。（カメラ・レポート12参照）

第二日

（八月六日・日曜日）（カメラ・レポート13・14参照）

講義　「世界の動きとその解釈」

世界経済調査会・理事長　木内信胤先生

今年で十三年間の連続御出講という木内先生は例によって、前年度の御講義の延長というお立場を踏えられて、今年も鋭いご見解を披瀝された。

「戦後共産主義から自由世界の国を守る為に大きな役割を果たしてきた米国は、今日、もはや自由世界をリードする力を失いつつある。ソ連においても中共や東欧諸国がソ連から離反している様相にもみられるごとく、共産諸国をリードする力を失いつつある。現在、確固とした自信を持って進んでいる国はなく、全世界が暗中模索している状態である。この様な国際情勢の中から、はっきりと自国の方針を打ち出してくる可能性のあるのは、長い伝統の中で東西両思想を受け入れ、育（はぐく）んできた日本である」

と述べられた。先生は、昨年以来の世界の主な事件をあげられながら、世界の動きとその底にある意味について解釈を加えられ、

「世界の動きを間違いなく捉え、その理解のうえに今後の日本の姿を構想することから、われわれの生き甲斐も生まれてくる」

と自信に満ちて話を進められた。（カメラ・レポート15～19参照）

講義　「マルクス主義の超克」

鹿児島大学・教授　川井修治先生

国民文化研究会の副理事長でもあられる川井先生は、

「現在の日本にとって、世上で騒がれている物価問題や公害問題等もそれなりに重大であるが、まず『共産革命の防止』に目覚めることこそが急務である。日本に共産革命が実現すれば、私達の先達が営々と築きあげ受け継いで来た歴史や伝統を破壊してしまい、二度とやり直しは出来ないのです」

と語気強く語られた。マルキシズムの理論的欠陥に対して、周到な反駁を加えながら話される先生の御言葉に、私達は、日々の生活では気づかない共産革命の致命的な危険性を痛感させられたのである。

さらに、それを超克する道は、「共産主義理論では、ついに把握し得ず、その理論が今まで無視して来ざるを得なかった人間の精神性を回復することこそ急務である」と述べられ、

「精神性の回復とはいっても、それは単なる言葉や概念思弁によって達成せられるものではない。家庭生活の中で、友人づき合いの中で、人とつながっていこうとする努力を怠らず、そして人の喜び悲しみを感じとる努力を、現在只今から始めなければならない。こうして瑞々しい情意をたたえて日々を生きていくことこそ、共産主義の超克の途が生まれてくる」

と訴えられた。（カメラ・レポート20・21参照）

御講義の後、先生の提起された共産主義及びその超克ということについて、先生の御言葉にそって、各自がどう受け留めたか、を語り合うことから、**班別討論**は始まった。最初のうちは、理論に対する理論のやりとりに終始しがちであったが、各自の体験を通して、お互いの心に迫ろうとする努力が開始され、この努力こそが、お互い一人びとりの精神性の回復につながる、ということを感じつつ、

班別に分れての各班の討論が続けられたのである。

講義　「輪読を班別で行なうについての導入講義」

福岡県立修猷館高校・教諭　小　柳　陽太郎　先　生

毎年の合宿教室で、わが国の古典を取り上げて、そこに籠る〝いのち〟を、手にとるように解説してくださる小柳先生は、今年は昭和の初期に若くして亡くなられた黒上正一郎先生の遺著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』を取り上げて、これに如何に取り組むか、について、懇々と話された。その中で、先生は

「読んでいくうちに、心にしみた言葉があれば、その言葉を自分勝手な解釈で操作してしまうのではなく、自分の体験とつき合わせて味識し、それによって作者の心に迫り、作者の心を憶念する、ということが大切です。そこに学問する喜びが生まれ、出発点があるのです」

と懇篤に述べられた。

そのあと、全員は各班室に戻って、先生の御話をかみしめながら、太子の御本の輪読に取り組んだ。班員たちは、こうした「本の読み方」をはじめて教えられた人々も多く、皆が一つ一つの言葉を大切にして、作者の気持に迫ろうと努力するうちに、いつしかお互いの気持が結ばれていくようであった。「学問をする」ということを、「友との交わりの中で実現する」体験が、かそかながらも体感され出したようであった。（カメラ・レポート22～24参照）

第三日

（八月七日・月曜日）

講義　「日中国交正常化の問題点」

経済学博士　山　本　勝　市　先　生

山本勝市先生は、本会の小田村理事長はじめ多くの人々が戦前から師事された方のお一人であり、今も変らず、憂国の至

誠で生き通して来られた方である。先生はまた、戦後の数期にわたって衆議院議員であられたが、田中内閣成立後の日中国交開設の動きを深く心憂されて、寧日なく東奔西走しておられる中を、この合宿に老軀を鞭うって馳せ参じて下さった。この合宿教室には二回目の御出講である。

冒頭に先生は、

「私は七十六歳で余命幾ばくもない。今から遺言のつもりで話をするから、どうか耳を傾けて聴いて欲しい」

と言われ、先生は参加者一同に対して、心許す後輩たち、との思いで語られたのである。

まず先生は、最近のマスコミが中共と国交を結ぶに際し、中共に都合の悪い事は、意識的に報道していないことを、数々の実例をあげて示された。

「本当の事を知らされず、正しく認識されずに出来上がった世論は、本物ではない。日本が今のようなムードの中で軽率に進路を決定するならば、将来に大きな禍を残すだろう」

と憂慮され、私達も今日本が重大な時期にあることを改めて強く感じた。

「日本が敗戦した直後、中国の蔣介石総統が、『怨(うら)みに対して徳を以てす』の精神で、中国大陸に残った二百五十万の日本兵を無事日本に帰還させ、かつての交戦国であった我が国に厚い情で対してくれたこと、また、そのお礼に赴いた石井光次郎氏に対し『自分は頭山満翁をはじめ日本の人達から習った東洋の道義を実践しただけです』と語られたこと」

等を話され、

「中華民国に対して我が国が一方的に国交を破棄するようなことは、やってはならない。日本は今後の動静如何によって、国としての信義を世界に問われる。中共政府と国交を開くのは世界の趨勢からしてうなずけるとしても、それは、中共の言いなりになって、中華民国と手を切ることとは、全く別である。現実として中国に二つの国が存在する以上、日本はそ

のことを尊重すべきである」

と強く訴えられた。（カメラ・レポート25～28参照）

講義　「全員がここで和歌を創作することについての導入講義」　亜細亜大学・教授・教養部長　夜　久　正　雄　先　生

今年は久しぶりに、この合宿教室における「短歌創作についての導入講義」の創始者ともいうべき夜久正雄先生が、この「導入講義」に御登場なさった。先生は、

「和歌をつくる際に最も大切なことは、現実に見たり感じたことを、見たまま感じたままに、すなわちありのままに表現する、ということで、自分の気持と言葉とを、その点に統一させなければならない。〈まこと〉とは、このことを言うのである」

と言われた。さらに正岡子規の歌論を中心にお話をされたが、ごく平易なことをご指摘されながら、それがたいへん難しいことも判ってきて、〝いざ創作〟の時間が迫るにつれ、悲喜こもごもの表情が、全員の中に往き来した。（カメラ・レポート29参照）

夜久正雄先生の御講義の後、**阿蘇登山**。広大な草千里や噴煙上る山頂では、宿題の短歌創作に取り組んだり、またお互いに写真を撮り合ってたいへんに楽しい午後の五時間を過ごした。（その情景はカメラ・レポート30～34参照）

青年研究発表

今回の合宿教室では、この「青年研究発表」がこの事業の相承伝承の可能性を問う一コマとして注目を浴びていた。第三日、すなわち、四泊五日間にギッシリつめこまれた日程の、ほぼ半ばを過ぎたこの段階で、国文研の若い会員の中から推薦を受けて、二人の発表がなされることになったのである。

最初に国文研会員・新日本製鉄・労働部厚生課勤務の今林賢郁氏（二十八歳）が、〝国について〟語られた。

「自分は学生時代、学問に取り組もうとしたとき、国という問題にぶつからざるを得なかった。そのためには一つの体系化された国家論を持たなくてはならないと考え、本などでそれを求めた。しかし知識がいくらふえても、具体的な国のイメージは心に浮かんでこなかった」

と話され、続けて、

「合宿教室に参加して、出陣学徒の歌に触れた時、国の運命と切り離して考えることのできない人生の生き方を知り、国と云うものを実感として感じとることができました。そして自分の生き方から離れたところでなされる国家論が、いかに空しいか、ということを知ったのです」

と言われた。会社で働きつつも常に自分の生き方を、国のあり方と切り離さずに見つめての真剣な態度は、聴講者、とくに学生たちの心を強く打ったようであった。（カメラ・レポート35参照）

次に国文研会員・東急建設勤務の建築部技師の奥富修一氏（二十六歳）が登壇された。氏は〝合宿教室の中から見つけた私の生き方〟について

「私は、不幸にして学生時代にはこの合宿教室を知らなかった。卒業して入社早々の第一年目の夏、上司に無理に頼みこんで休暇をもらい、そしてこの合宿に一班員として馳せ参じた。その時から私の人生が生き甲斐ということに結びついていったのである。自分はこの合宿で古典を読むことを知った。古典に対していると、直接にあいまみえることのなかった、時空をへだてて生きた先人の言葉が、僕の胸によみがえって来る。そのことを、はじめて知ったのである」と、古典を通じての先人との心の触れ合いの喜びを、思い出すかのように、まっすぐに参加者たちの方を見据えて一言一言の言葉をかみしめながら語られた。更に

「今自分は仕事にやりがいを見出した。これは自分一人の力でやれたのではなく、聖徳太子や吉田松陰や小林秀雄といった人の教えや導きがあったからです」

と語られ、古典が具体的に一人の人間が生きてゆく上において、大きな力になることを身をもって知った経緯を語った。

続いて夜のしじまの中で、**慰霊祭**が行なわれた。赤々と燃えあがるかがり火を前に、夜のやみを通して祖先の人々の御霊が私達の心の中に蘇って来て、不思議な力で結びつけられるのを覚えさせられたのである。（カメラ・レポート36参照）

第四日

（八月八日・火曜日）

講義　「大自然の法則と文明」　　評論家　胡　蘭　成　先生

胡蘭成先生は、一九〇六年に中国の浙江省に生まれられ、家庭環境に恵まれて大学で政治学を専攻され、日本と中国との交戦中には汪兆銘政権のもとで、法制局長官の要職にあられた方である。戦後の共産革命に遭遇され、毛主席から北京学院の副学長に招かれたのに対して、毛主席に①階級闘争はやめるべきである。②ソビエート一辺倒ではいけない。③中国の歴史学をはっきり確立すべきである。④中国に重工業を興せ。との質問を提案。これに明確な回答が得られぬため、身の危険を知り、上海から香港経由、日本に亡命されたものである。それから、二十年有余を経過した今日迄、祖国の間違った姿を正すべく、また中国のあるべき姿を念じつつ、活動なさって来られた。

先生は先ず

「日本は現在、大変繁栄しているかに見えるが、実際はゆきづまっている。この状態を打開するには、明治維新ぐらいの大きな変革が必要です。その変革を起すには思想運動が必要です。思想運動とは、現在の世の中で何が問題で何が原因なの

か、を明らかにし、どのように改めるかがはっきり分ることです。それは君達日本の青年がやらねば誰もやってはくれません」

とたどたどしい日本語ながらも、心をこめて話し始められた。やむを得ざる事情があったにせよ、御自分の祖国を離れねばならなかった先生の御心中は、いかばかりかと思われるが、先生の話される一つ一つの御言葉に、その御心痛が偲ばれて、おろそかには聞けないという気持が、場内を緊張させていった。お話は、演題である「大自然の法則」へと進んでいったが、その中で、現在の世の中が物質万能の考えであり、科学が、その猛威をふるっていることに及んで、

「科学を使って世の中を運用することは、人間が社会生活を営む上で大変役に立つ。けれども科学には限界があることを忘れてはならない。今は科学の時代だというが、それは十九世紀の人がいうべきことであって、科学は限度をこえればだめになる。ギリシャからアインシュタインにいたる物質観には生命がない。それでは物の本質はわからない」

と喝破され、自然の風物などのお話を通して、自然がもつ法則について、説き進められながら、人間の生き方について参加者一同に厳しく迫られた。（カメラ・レポート37～39参照）

（梶村昇先生）

（宗口宗之先生）

次に、この合宿教室の共催者の立場にある大学教官有志協議会の方々、亜細亜大学教授（宗教学）の**梶村昇**先生は、つい最近訪問されたインドネシアについてのヒンズー教などのお話を、九州大学助教授（国史学）の**山口宗之**先生は、幕末に日本に来たアメリカ人のペリーが、吉田松陰とその門弟・金子重輔の二人の渡米の志に深く感動したこと、などをお話しくださった。また、広島商科大学教授（哲学・倫理学）の**岡昌宏**先生は、現代日本の大学における、研究と教育との関連性について鋭く論及され、ビーバーのいう大学倫理をご紹介下され、鹿児島大学教授（育種学）でかつ学生部長であられる**宮司佑三**先生は、テルアビブ事件の犯人学生

が、同大学の学生であったことを中心に、過激派の学生がこちらの言うことに耳をかさない実情を心から歎いておられた。四先生のこれらのお話は、それぞれ十五分前後の短い時間ではあったが、御専攻の学問を通して含蓄に富むお話であり、それは短いお話の中に、印象に残る御教示を含むものであったのである。（カメラ・レポート40参照）

（岡　昌宏先生）

（宮司佑三先生編）

講義　「人間本来の心を取り戻そう」

国民文化研究会理事長、亜細亜大学教授　小田村　寅二郎　先　生

この合宿教室での、さいごの御講義を担当されたのが、国文研理事長の小田村先生である。先生は例年にもまして鋭い視角から、この四日目までの間に、この合宿日程で提出された沢山の問題の中から問題相互の関連を、一つ一つ解きほぐして話を進められた。まず、青年研究発表にふれられて

「昨日の今林・奥富両氏によってなされた研究発表は、普通に行なわれている研究発表とはおよそ違っていることに気付かれたでしょう。ここでは、提起された色々の問題の内容とか、方法論とかを論ずることよりも、発表者の片言隻句の間から滲みでる情熱をこそ、汲み取っていただきたい」

と述べられた。そして

「私達は日本人でしょう。日本人が日本人であることを忘れて、抽象的に『国』とか『国家論』とかを論じてもつまらないではありませんか。どうか、日本を語る前に自分が日本人であることを自覚していただきたい。日本を知っていただきたい」

と強い語気で語られた時、〝君ら青年がしっかりしなければ、日本はどうなるんだ〟と案じられる先生の悲痛なお気持が、ひしひしと全員の心の底ひに泌み通っていったようである。（カメラ・レポート41・42参照）

このあと、各班にわかれて先生のお話を中心にして、活発な、そして深みのある討論がくりひろげられた。続いて**地域別、大学別の連絡会**がもたれた。合宿で学んだことは、各人の日常生活の中で逞しく生かされることによって、本物となる。このような見地から、地域の、あるいは大学の事情に即しながら、今後の運動をいかに展開するかについて、具体的な打ち合わせが活発におこなわれた。（その情景はカメラ・レポート43参照）

和歌全体批評

（前出）夜久正雄先生

全参加者が前日に創作し提出した短歌の総数は、実に二千首近いものであった。一首の人もあれば十首連作の人もあるからである。この全部をプリントすることは全く不可能である。

従って、先ずはじめに助言者の先生がたと国文研の若手会員によって選別の作業がなされ、各人一首を原則にして選別検討が夜おそくまでなされた。

そのあと事務局員その他の方々が夜を徹しての作業によって、三十数枚を一冊に綴じた歌稿が出来上った。歌稿の中に自分の歌を見る参加者達は、いかにも照れ臭そうだった。この部厚いプリントが全員に手渡されたあと、それを手にされた夜久正雄先生が、壇上に立って「総合的批評」をなされたのである。

先生の批評はユーモアに溢れ、度々爆笑の渦が巻き起こった。しかし、同時に先生は、一字一句に対しても厳しい指摘、添削をされ、自分の気持や感動を正確に表現することの難しさを、全参加者は、はじめて切実に、そして目覚めるような思いの中で、具体的に知ることが出来たのである。

続いて各班にわかれての**班別和歌相互批評**がなされた。この場においては、十人前後の班員の作品を、一つ一つ話題にのせていくの

であるから、もはや逃れるすべとてない。いやな気持ちで自分のがマナイタにのるのをこらえながら、そのうちに、自分の作品を通じて、自分の心の中が、班員の仲間によって、指摘されたり、誤解されたり、理解されたりしていくうちに、この「相互批評」が、大変に重みのある「学問」の一つであることが感じられていった。

お互いに努力した経緯を辿ってみると、先ず、相手の感動に飛び込む努力がなされ、その上で、より深く言葉や表現について検討が交された。そこでお互いは、安易に形だけをまとめあげるのではなく、具体的な体験を通して感動を詠むことの大切さを、改めてしみじみと学ばせられたのである。初めて和歌を創った人が大部分であったためであろうか、表現などの拙さは見られたものの、飾ったところのない素直な歌が多かったことは、夜久先生にも、ほめられたことであった。みんなもうれしかった。

最後の夜の集い

厳しい日程を共に過ごして来た友達と飲む一缶のビールの味は、格別であった。多くの友が各大学の自慢の歌を、所狭しとスクラムを組んで、腹の底から張り上げるに及んで、雰囲気も大いに盛り上った。夜の集いの後も、班に戻って語り尽くせぬ思いを深夜まで語り合った人々が多かった。(その情景はカメラ・レポート44～46参照)

第五日

(八月九日・水曜日)

四泊五日の合宿も、いよいよ最後の日程を迎えた。アサヒビール(株)社員であられ、この合宿教室で全体運営の委員長をつとめられた坂東一男氏(三十五歳)は、第四回の合宿教室に、当時、長崎大学学生として初参加した方であるが、爾来十四年間、国文研相承の志に生き続けられた一人であった。

この第五日最終日の朝、この坂東運営委員長は、挨拶ということで壇上に立たれ、「この合宿での体験が、皆さんのこれからの現実の生活に於て強い力となることを信じます。この経験を生かし、持続させようとする気持があれば、一人でも出来ると思います。しかもその上に皆さんには、四泊五日間を共にした四百人の友がいるではないか!」

と力強く語りかけられた。続いて九時から十時半に及ぶ一時間半にわたる**全体意見発表**の時間が来た。この合宿で初めて体験した短歌

創作について「自分では良い歌だと思っていたが、班友から素直な気持を詠んでいないと指摘され、自分の気持を素直に正確に表現することの難しさを痛感した」と語る学生や、「祖先の御霊を祭る慰霊祭を初めて経験して祖先への感謝の念を忘れていることに気付いた」と語る人もいた。また、「ペマ・ギャルポ君の話を聞いて、国を守るということが、どんなに重大であるかを他国の人に教えられた」と語る学生もいた。この様にして参加者たちは、次々と登壇し、それぞれに胸中の思いを率直に述べ合った。中には、合宿中に心を痛めたことを率直に訴える者、それに対応しての所感を述べるために壇上に馳け上る者も出た。（この情景はカメラ・レポート47～50参照）

この**全体意見発表**のあと、**小田村**先生がこれらの参加者の所感をもとに、**〝合宿生活をかへりみて〟**と題して壇上に上られ、

「合宿の始まった四日前を思い出そうとすると、何か遠い昔のことのように思われるのではないでしょうか。それは参加者の一人一人が緊張して合宿生活を送り多くの感動を経験し凝縮した毎日であった為に記憶がなくなっているのです」

と述べられて、第一日第二日のことを思い出そうとしても、遠く霞んでしか思い出せないでいる全員の記憶力の情況を、鋭く正確に指摘された。全員ひとしく同じ思いであったから、このお話は、全員に共感共鳴を以て迎えられもした。ついで先生は、

「天皇の問題は、体制としてとらえるのではなく、各人が心をはたらかせて考えなければ決してわからない。天皇が日本歴史に於て永く存在されたのは、決して権力を保ち続けたからではなく、天皇の大御心を感じ、仰ぐ人々がいたからです。このような、昔から連綿として受け継がれて来た日本人の、素朴でおおらかな心を、私達もまた受け継いで行かねばなりません。そのことは、右翼とか保守主義とかいう、意味のない言葉で規制されるものであるはずがありません。〝国〟〝日本〟は、お互い日本人の胸の中にこそ息づいてきたものであり、いまもわれわれの心の中に息づいて実在しているものなのです。それゆえ今からでも、『私は日本人だ』という自覚を持ち直し、私達はそのことを踏えてお互いに研鑽しあう努力を、今後ともたゆまず積み重ねていこうではありませんか！」と語られ、さらに、「これだけは、ほんとうに判っていただきたいことなのです」

と肺腑をつくような語韻と、涙するような悲痛な表情とをもって話された。全員は一瞬シュンとした静寂と緊張に包まれ、しばし会場には、えもいわれぬ真剣さが充ち溢れていったようであった。

感想文執筆

残り少なくなったあわただしい時間の中で、全員が感想文をしたためた。心を整理し言葉をまとめる間もないほどであったが、うちつけの文章と、それに書き添えられた第二回目の短歌創作の作品は、また、読む人の心を打つ真実のものを語ってくれていた。それを編したのが、この「感想文集」である。

閉会式

全参加者すべてが、その心身の能う限りの能力を傾倒してつづけられたこの合宿教室も、ついに閉会する時点を迎えた。全員で斉唱する国歌「君が代」二回の唱和が、なんと一声に和して高らかに唱われたことか。そのあと、学生を代表して熊本大学の高岡正人君は

「このような立派な合宿が出来たのは、私達参加者一人一人が真剣に合宿生活に取り組んだからです。それぞれの職場や大学に帰ってからも、この合宿で得たことを、身のまわりの人々に訴えてゆき、いっしょに勉強してゆくならば、この合宿と同じことが全国で四百できるはずです。お互いにしっかり頑張りましょう！」

と力強く訴えたのである。

また主催者側からは、国文研副理事長の浜田収二郎先生（元・共同通信社局次長）が、全員の心労と協力を心からねぎらって下さる閉会のご挨拶があった。（カメラ・レポート51・52参照）

いよいよお互いに心をくだきあったこの合宿教室とのお別れの時が来た。玄関前では記念写真を撮る友、互いに肩をたたき合う友、堅く握手を交し再会を約し、いつまでも名残を惜しむ友等で賑わった。そうして次々と阿蘇の地を去って行ったのである。（カメラ・レポート53・54・完）

助言者の紹介

（前掲）亜細亜大学・教授　梶村　昇
（同）九州大学・助教授　山口宗之
長崎大学・文部事務官　植木九州男
熊本県・砥用町立砥用東中学校・教頭　北島道治
熊本県林業研究指導所・研究部長　瀬上安正
熊本県・八代市助役　加藤敏治
島根県・玉造温泉こんや旅館主　青砥宏一
神奈川県・舞岡八幡宮宮司　関　正臣
東京・富士学院・学務部長　加部隆三
県立・岡山東商業高校・教頭　名越二荒之助
福岡県立・宇美商業高校・教諭　小林国男
熊本市・企画広報部長　徳永正巳
安信不動産㈱常務取締役　松吉基順
県立・佐賀工業高校・教諭　末次祐司
大阪地検・事務官　岸原重二
北九州市・八幡西高校・教諭　村田英雄
熊本市立・京陵中学校・教諭　松浦良雄
東京・㈱千代田コンサルタント・営業部次長　上村和男
鹿児島・㈱新川組・社員　湯通堂義弘
佐世保市交通局・企画主任　朝永清之
アサヒビール九州支店・業務課主任　坂東一男
神奈川県立・横浜翠嵐高校・教諭　国武忠彦
神奈川県立・横浜平沼高校・教諭　福田忠之
拓殖大学大学院・学生　村山寿彦
新技術開発事業団管理部・職員　野間口行正
県立・宮崎病院神経内科・副医長　田村　潔
長崎県経済農協連・職員　内田英賢
小松電子金属㈱神奈川工場技術課・技師　小幡道男
亜細亜大学・広報室係長　山本忠士
久留米大学・附設高校・教諭　合原俊光
㈱講談社広告局・社員　磯貝保博
新日鉄八幡製鉄所労働部厚生課・社員　今林賢郁
熊本市立・藤園中学校・教諭　北島照明
熊本県立・南関高校・教諭　片岡　健
兵庫県立・武庫高校・教諭　寺川真知夫
新潟大学医学部・脳研究所・医師　古賀　誠
富山県立・高岡ろう学校・教諭　岸本　弘
神奈川県立・新城高校・教諭　山内健生
㈱竹中工務店・大阪電算センター部・技師　稲津利比古

鹿児島高校・教諭　徳田浩士
宇部興産㈱企画部・社員　内田厳彦
東急建設㈱東京支店建築部・技師　奥富修一
福岡県立・嘉穂高校・教諭　小野吉宣
東京工大大学院・理工学研究科・学生　大岡弘
大阪大学・文学部研究生　東中野修
神奈川県・愛川東中学校・教諭　原川猛雄
大成建設㈱福岡支店管理部・社員　山口秀範
戸田建設㈱技師　青山直幸
安田火災海上㈱福岡支店業務課・社員　開克史
山梨県・㈲化光製作所・専務取締役　丹沢文夫
小田原郵便局郵便課・職員　松本洋治
亜細亜大学学生部・職員　山田健一
大阪・清風高校・教諭　白江恒夫

合宿運営委員（助言者欄に前出）坂東一男　上村和男　今林賢郁
北島照明（事務局担当兼務）磯貝保博

指揮班（助言者欄に前出）片岡健　湯通堂義弘　山本忠士　松本洋治　村山寿彦　丹沢文夫

写真班　鶴信彦（福岡大学・医学部一年）

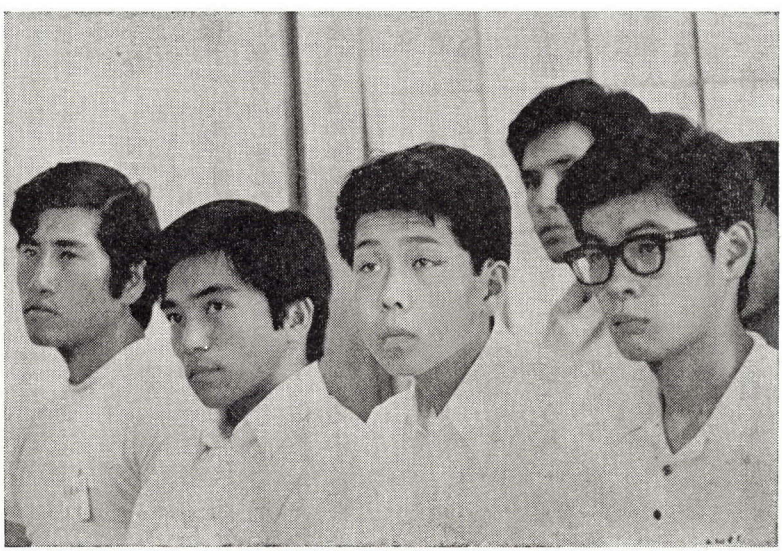
記録班　西川伍朔（最高裁判所秘書課・技術員）

合宿事務局　永沢弘子（本会職員）、松尾新子（共立女子大学文芸学部三年）、池上洋二（県立南関高校三年）、福田忠光（県立岡山工業高校三年）、小柳志乃夫（県立修猷館高校二年）、栗山洋（県立南関高校二年）、江藤恵子（県立南関高校二年）、江藤章子（県立南関高校一年）、三沢沢三（都立白鷗高校一年）、山口尚志（県立久留米高校一年）、山口道生（久留米市立城南中学三年）

走り書きの〝感想文〟集（各班別に集録）

閉会間ぎわの三十分間で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらいました。

（なお、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられている短歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。この文集の末尾にまとめて掲載したものは第一回の創作です。対比して御覧いただくと大変に進歩している跡がお分りいただけることと思います）



真剣そのものの眼・眼・眼・眼・眼……

第一班 —男子学生—

真剣に考えたかったから

（上智大学　法　四年　山口良男）

自分の思いを素直に率直にぶちまけました。しかし本当にわかってもらえただろうか。そういう不安で胸一杯だ。議論が高ぶるにしたがい、激昂してしまって、友の心を傷つけた事がもしあったなら許してもらいたい。只僕は「国」の事を真剣に考えたかったからだ。

僕達は日本人以外の何者でもない。お互いに励まし合いながら頑張って行こう。

全体意見発表の折、東中野兄の話を聞きて
しばらくは声出でずして立ちつくす兄の思ひの胸に迫り来
友だちの有難さをば別るるとき初めて知りぬと兄は語れり

太子の求道に感動した

（熊本大学　工　二年　折田豊生）

聖徳太子が、自らの解脱のみを求められたのでなく、国民と共に歩むべき道を求めて苦脳されたことを知った時、深い感動がこみ上げて来るのを感じました。かかる感動を大切にしながら、国につながる自分の命というものをもっとつきつめて行きたいと思っています。

国民の上を思ひて諸共に踏むべき道を求めさせ給ひき
身を忘れ国民の上を思ひ給ふ太子の心のただありがたき

国家すなわち日本

（早稲田大学　商　一年　谷　良二）

ペマ・ギャルポ君の祖国を思う気持に強くうたれ、自分が恥ずかしい気持がしました。そして講義を聞き、友と語り合う事によって、今まではるか遠くにあった〝国家〟すなわち〝日本〟というものが身近なものに感じられるようになりました。

最後の夜のつどひにて
楽しげにチベット民謡踊れどもさぞや祖国の恋しかるらん
一日も早く祖国の戻る事心の底より祈りをるなり

一心で話し掛けられるようになってうれしい

（鹿児島大学　工　一年　田中　済）

合宿に参加して
討論を始めてみればわたしにも言ひ得ることのあるが嬉しき
祖国にも危機の迫るを感じては時を忘れて話し入りけり
夜なべして言葉を交すこのときに友を得たりと我思ひけり

討論会で、自分の考え方の浅はかな事を鋭く批評されると確かにいこじになりがちだが、最後の日には少しは改まり、自分の意見を率直に言うようになった。夜遅くまで、自分の

考えを聞いてもらいたい、それについて意見を言ってもらいたい、その一心で話し掛けられるようになったことがとても嬉しい。

一言で心の中に入っていける

（中央大学　法　二年　佐野和利）

たどたどしき言葉重ねてうったへし友の姿は忘れられざり

ともすれば理くつを言いたくなる私ですが、この合宿で学ばせていただきましたことは、言葉は少なくてもよいから己の心をむなしくしてありのままに、素直な気持を一言いうだけで、お互いの心の中に入っていけるのだということであります。

私はこのことを基礎として、祖国日本のこと、天皇のこと等々をお守り申上げなければならないのだと考えるようになりました。

わだかまりは消えた

（専修大学　商　二年　茂木克彦）

五日間の合宿生活を振り返って小生が特に感じたこと、それは参加者がいずれも真けんな態度にてのぞまれているということである。そんなことを思った時、小生の、当合宿に対して抱いた少なからざるわだかまりの気持が消え去っていった。

カメラ・レポート　1

会場入口には，大学入試発表のような班編成名簿が発表されている。参加者は未知の人たちとの班生活にとまどいを見せる。

だが一つだけ納得できないのは、共産主義というものが、頭から否定するに値するごとき悪しきものであろうか、ということである。

進んで心を割らなかったことを反省

（亜細亜大学　法　三年　栗田信彦）

最初、この合宿は心を割って話し合うと言う目的からはずれていると思っていました。しかしそれは大変な間違いである事が今ハッキリと理解出来ました。なぜならば、全体意見発表の席で涙を流した友達がいたからであります。涙を流すほどまで心を割ったと言う事。そこで私は反省いたしました。なぜならば私は心を割って話した事がなかったからです。自分で心を割らなかったからです。

最後の夜
徹夜までして語り合ふ友どちといつしか知らずなごみあひけり
全体意見発表にて
まごころを述べし友どち涙あり思はず我も目が熱くなる

信念を求めて生きたい

（東京工業大学　工　一年　瀬上　信）

日常の大学の講義と全く違うものが感じられた。それは講師の方が信念を持って語られた事です。まだはっきりと信念というものがない僕にとって驚嘆に値する事でした。

この合宿の最後の発表会の時、壇上に立たれた方には、信念の脈がうかがわれてならないのです。なんとうらやましいことだろうか。

僕はまだ信念を求めて生きる段階なのです。

夜ふかしに遅れてならじと走り来てまだ夢心地の朝の体操
友どちと五日過せし我が顔のひげの長さに思ひしのばる

第二班—男子学生—

友を大切にすることから永遠のものに繋がる

（早稲田大学　法　四年　古川　忠）

今までは、友を思うことと国や祖先を思うこととが、ばらばらであって、何かその間を繋ぐものを求めてきたが、この合宿に於て、一つの実感として、友を大切にすることから永遠のものに繋がっていく一つのいのちというものを感じることが出来たように思う。

先生方の言っておられることや、行事のそれぞれが、より深く自分の気持に浸み透ってくるのを感じる。

全体意見発表を聞きて
友どちと心ゆくまで話しえず口惜しかりきと声つまらせぬ
苦しかる友の心はひたぶるに己が心に迫りて来るも
班の友どちと別れの宴をしたる折
五日前初めて会ひし友どちとかくまで深く睦み合ふとは
来年も是非まみえんと契りたる友の眼を忘るるものかは

参加できて嬉しい

（亜細亜大学　法　四年　佐藤光直）

学生の内に必ず参加したいと思っていた事がこの機会に参加できた事を嬉しく思っています。

諸先生方の御講義をお聞きして、はっとさせられた事、又もう一度じっくり考えてみる必要があると思った事など、幾度かありました。

親しみて深く話さんその時に惜しいものかなもう日はつきぬ

人間らしい生き方を伝えてやりたい

（東京外国語大学　露　一年　名越健郎）

現在日本に欠けている人間らしい生き方を感じとることができた。

僕もイデオロギーの中でしかものを考えられない習慣が身についており、開会式での国歌斉唱では抵抗を感じた。だが諸先生方の御講義を聞いてゆくうちに、自分は果して素直な心で物の原点に帰って考えているのだろうかと気づきはじめさっき小田村先生の御講義を拝聴して、つくづく日本人として当たりまえのことをしてないことをさとった。やがて閉会式がはじまるが、今度こそ抵抗なく国歌斉唱ができると思う。

来年は友人らを参加させようと思う。理論よりももっと尊い人間的いぶきに満ちた生き方を教えてやるために。

カメラ・レポート　2

受付係は，なごやかに遠来の参加者を迎え，班名と氏名と大学名記入の名札と，沢山の資料のはいった大型封筒が各人に渡される。

惜別

真剣に国を憂ふる友どちに無常なりしは時間なりけり
二度となき思ひを胸に友どちは去って行くなり再会誓ひて

日常生活を反省した

（九州大学　工　二年　福山宏一）

班の友人はほとんどが初めて会った人たちでありますが、年令差、学校差などまったく感じられず、うちとけて話し合い、また時には指摘されたことについてありがたく思います。

歴代天皇の、本当に我が国のことをお思いになっている御歌をお聞きし、また学徒出陣なされた方々の歌を読んで、胸が熱くなりました。そして私の日常生活をふりかえり恥ずかしい思いがしました。

和歌は大変むずかしく苦労しました。もっと豊かな情念を養っていこうと思います。

惜別

阿蘇谷にともに学びし友どちと別るる時はつひにきたりぬ
山下りて別るる友と必ずや学びて後に再び会はん

これからを大切にして生きていく

（東京大学　理　三年　藤野真三郎）

これまでの僕は、とかく理論にばかり気をとられ、人間的な深みのなさに気づいていなかった。人と話す時は、先ず相手を説きふせてやろうという事が先に立ってしまっていたのである。人を説得しようとは思うまい、素直に自分の心を相手にぶつけてみよう、そう考える様になった。

しかし「日本人としての心」が僕の中に充分はぐくまれているとは思えない。僕が学んだことはほんの第一歩にすぎない。これからが大切なのだと気をひきしめ生活していくつもりである。

今我等立てり

（中央大学　法　一年　渡辺忠之）

小田村先生の御感想を聞きて
まごころの通ふところのまん中に我が大君のおはすと言はれし
わが民の心はひとつ大君を慕ひ慕ひて御国続けり

心と心との一致の為には心が通わなければならず、そうすればおのずと心はひとつとなりうる。

我が日本は、数千年来、天皇をお慕いして国民は心を通わせてきた。だが今の世にその面影はなし。今我等立てり。

やめないでよかった

（鹿児島経済大学　経　二年　成尾勇一）

友が、師が、胸おどらし目輝かし我にせまってくる。国を憂うる気持を、民族を思う気持を、国家主義だの、バカらしいだので、かたづけられ、ともすればやめてしまいたくなる

ような時もあります。でも、先生方に、友に、会って、やめないでよかった、おれは間違ってないと。

友の背をあらひ流しつ我いのる山を下りても幸せあれと
友どちはけふで終りとほほえみて我が背流してわかれむといへり
我も又心にとめおかむ真心を伝へし友と師の言の葉を

イデオロギーをこえた真剣さ

（熊本大学　工　一年　岡井政彦）

講義の中には同調できないような所があって、素直に聞けないという所もあった。が、しかし小田村先生の話を聞いたとき、これでは自分自身がみじめだと感じたのである。長い人生経験の中から、本当に我々日本人の住む日本を憂うる気持ちが大事なんだと心に思ったのである。そこには、イデオロギーやイズムを乗り越えた、人間本来の生きるという事に対する、真剣な考え方が見られた。これが僕がこの合宿で得たものであろうと考えている。

合宿にてつかみとりたる真心を大事にせよと先輩言ふなり
熊本の大学にもどりてもしっかりとこの真心を忘れじと思ふ

第三班 ―男子学生―

日本についてもっと考えたい

（九州大学　工　二年　大野英則）

カメラ・レポート　3

幹部学生諸君によって，さまざまな準備がなされるが，「のぼり」を大筆で墨書するのも，庭先に，しっかりと張るのも，学生である。

この合宿に来て、諸先生方の御講義、とくにその中でも今林先輩の青年意見発表を聞くに当たって、今後の学問に対する心構えというか決意というかそのようなものを再認識するにいたりました。一見「平和」のように見える現在において国ということを考えずに過ごしがちになりますが、この国日本についてもっと考えて行かねばならないことに気づきました。こういう今の自分の気持を大事にして持ち続け一生懸命生きていこうと思っています。

事実を述べたら受けとってくれた

（亜細亜大学　法　一年　ペマ・ギャルポ）

この合宿に参加することを可能にしてくださった皆さんにどのように感謝したら良いかと思っているのですが、それはおそらく一人間として一チベット人として生きることであるように思っています。

きょうの意見発表でも僕の話について出ましたが、僕はそれらを聞いて又見て、とても嬉しかった。僕は決して僕の実力で皆さんを感動させたとは思っていません。皆さんを感動させたのは二つあると思います。それは、僕が述べたことが事実であったことと、そういう事実を事実として受けとる心が皆さんにあったからだと思います。

同国民達に比べて自分は大変恵まれていると思います。又それだけに彼等に対する責任も重大なものがあると思います。これはこの合宿に参加して特に良く分ってきました。

皆さんは日本人として日本と言う国を考えてゆくと同様、僕もチベット人としてチベット人が世界のさまざまな民族と堂々とつきあって行けるように頑張って行きたいと思います

阿蘇山で五日過して神様に再会を祈りて友と別れる

そうだ、これからだ

（法政大学　文　二年　田倉茂樹）

自分の体験を通しての言葉でしか他人に聞いてもらうことができないきびしさの中、その中から生きた対話が生まれる。へたな同情や妥協がとてもいやらしく感じられる。このような雰囲気の中では、真に自分の意見を持たなければその討論へ入る事ができないもどかしさ。仲間はこんなにまで考えている、それに対して自分は……と考えさせられながら日を過ごしました。しかしここで終ったわけではない、これからなのだ。そうだ、これからなんだよ。

精神を緊張させていきたい

（早稲田大学　第一政経　二年　影島一吉）

この合宿では、国家と自分、学問と自分との関係についていろいろ考えさせられた。

ぼくは日ごろ、自分ひとりでこの世にいるかのような生活をしている。両親、祖先、そして自分のまわりにいる人々の

存在というものを直視する必要があると思う。そこから運命共同体の日本というものをしっかりと把握できると思う。

この合宿を契機に、小田村先生の話された「精神の緊張」を少しでも持ちたいと思っている。

話したし話したけれど口に出ざる自分のことが悲しくなりぬ

もうしばらく時間が欲しい

（九州大学　法　一年　中村健一郎）

最後まで、かたくなな心を棄てきれない私でした。今なお無数の単語が脳裏をかき廻し切りきざみ、たたき落とされてもどうしても限りなく飛来します。もうしばらく時間が欲しい。

かたくなな心の我をじっと見つめ我が言の葉を待つ友どちよ

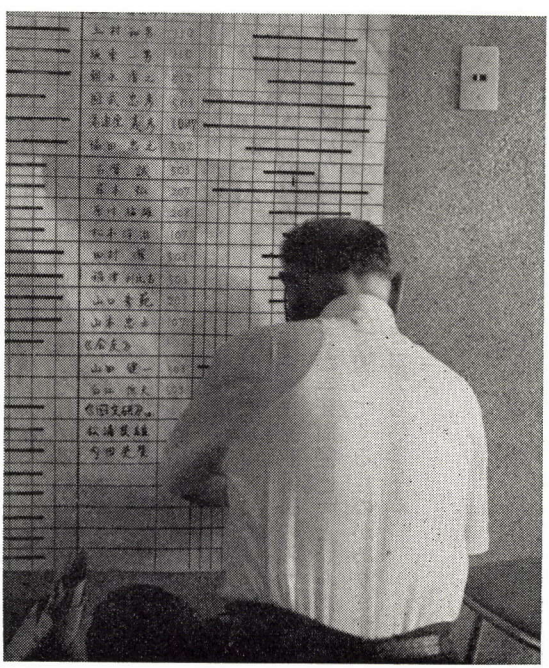
自分の心の中に息づいている日本

（玉川大学　文　一年　小谷太一郎）

今まで僕は「国家」とか「国のために」などということを自分とは無縁なようなそして遠い存在としてしかとらえられなかったのであるが、「なにもでかいことをやれということではなく自分自身の立場でできることをやれば、おのずから国のために、すなわち日本のために通ずるのだ」ということを聞いて、国というものを身近に感じ、自分の心の中に息づいているのだと思った。

カメラ・レポート　4

合宿事務局では、五十余名の助言者の来会に備えて、その人々の到着の日程表も作成しておかなければならない。



この合宿は非常に長いものに感じた。しかしあっという間にすぎた感じもする。これからはこの体験を、ともに生活している人たちに伝えて生きたいと思っている。またこの合宿で知り得た友との邂逅というものも大切にして行きたいと思う。

第四班 ―男子学生―

生き方を正しつつ励みたい

（早稲田大学　第一文　四年　藤井　貢）

小田村先生が「多くの現代人が国と対する時、自らの基本的人権ばかりを主張して行くのは、自分を軽べつして生きていることだ」と指摘されました。また「そうした生き方をしていたのでは、自分と共に生きる家族友人の、或いは大和言葉の、大切さが判ろう筈もない」と指摘されました。僕らはともすれば身近な人を思い浮かべずに天下国家を論じて、また論じた儘で終って「良し」としていると思います。友人との研鑽の中に、是非ともこういう生き方を正し合い、自己を鍛えていきたいと思った。

朝の集ひの折
露おきし草原に立ちておごそかに揚る日の丸見るはすがしも

日常生活が大切だ

（熊本大学　法文　二年　田之上正明）

今日の最後の小田村寅二郎先生の御言葉を聞き、政治運動の何のかのといふことではなく、人間がお互ひに信じ合って生きて行かうとするその本源的な、おほらかさ・強さ・美しさが胸にひびいてきた。それは、それが良いものであるから、とか、あたりまへなものだとわかったら、とか、というだけでできるものではなく、いつの時代にも何時でも、私たちに課せられた根本的な問題であると確信いたしました。日常生活そのものが本当に大切なものであると感じられました。しかしそれが一人であっては絶対にできるものではない。一人一人の人間の無力さ、そこに「共に是れ凡夫のみ」といふ御言葉が改めて思ひだされ、また「死而後已（やむ）」といふ御言葉も、今では違った意味をもって迫ってくるものがあります。

師の君の教へさとしし御言葉は一語一語が心にきざまる

ことばの重みを痛感した

（神戸大学　法　四年　丸山　明）

この四五日の緊張した生活は、生まれて初めての経験であった。合宿における先輩達を見ていると、いかに自分が安易な精神生活を送って来たか恥ずかしい思いをした。そしてことばの重みを強く感じさせられ、人に真意を伝えることの難しさをおしえられた。

ほんとうの事物の姿を見極めるには、知識は反ってじゃま

になるということを痛感した。

感動できるやうになりたい

（亜細亜大学　経営　二年　深井辰海）

班別討論の際、友の痛烈な批判が出ると「コノヤロー」と頭に来て何度も、反論しようとして言葉を捜した。真心をこめて自分の為に批判してくれる言葉を素直に受けとれなかった自分が恥づかしくてなりません。

御講義で、また和歌を作ることで、感動するといふ大切なことを思ひ起すことができました。

自分はほたして人間だったのか、日本人だったのだらうか、唯、感動を知らない動物であったやうな気がします。これからは「人間だ、日本人だ」といふ言葉を胸に、何事にも感動できるやうに成らうと思ひます。

班別の討論のをり友どちのきつき言葉に我反撥す
あらためて思へば友が我が為に心つくして言ひし言の葉
長年の友にはあらぬ人なれどなぜか別れが惜しまるるなり

和歌を習った

（日本経済短期大学　一年　伊藤佳和）

この合宿で和歌を習いました。今まで、自分の感動をなにによって表わしたらよいかわからなかったけれども、和歌をつくることによって、これから自己の感動を表わしたいと思

カメラ・レポート　5

開会宣言は、地元熊本大学の学生によってなされた。四百余名の参加者は、「班別立札」を目印しに、すぐに自分の班の席を見出す。（この立札は、前後に毎日移動して、前の方で聴けたり、後の方の席に変わったりする。）

います。又、高校生のサークルにも和歌をとり上げたいと思います。

もどかしき口に出でこぬわが言葉なにかむなしくむねにのこれり

胸の中がいっぱいである

（九州大学　法　一年　永松真洋）

いったいどういうことなのだろう。一生懸命耳を傾け聞き入っていたつもりなのに、御講義の感想を求められると少しも心に浮かんでこないなんて。同じ班の人は「それはやはり君の精神の緊張度が足りないからさ」と言う。そんなことあるものか。確かに理解できないところは多かったけれど、まるっきりわからないということもなかったんだと言いたいのに、胸の中はもやもやとして何も言えない。ほんとうにあせってしまった。ぼくもこんなに頭脳をフル回転して物を考えようとしたことはかつてほとんどなかった。

あせらずに何かをつかんで帰れとの先輩のことばを心に刻みぬ

第五班—男子学生—

言葉を味識してこそ人の心に迫り得る

（九州大学　医　六年　小柳左門）

合宿の当初より、僕自身が、また皆が求めてきたものは「国のいのち」といふことであったと思ふ。「日本人はかけがへのない尊いものを天皇といふ御方を相続しつつ受け継いできた。それは、日本人の素晴しい叡智である」と小田村先生は仰言ったが、そのお言葉を聞いた時、僕が受け継いでゆかうとしてゐる内容こそ「国のいのち」であることが実感できたのである。

最後の夜は遅くまで歌を批評しあった。長い間沈黙のつづくこともあったが、その間にも友はみな作者の身になって味はってゆかうと努力してゐた。友の言葉には自分が気のつかなかったところまで思ひやってゐる言葉が沢山あり、本当に有難いと思った。五時間近く行ったが、時のたつにつれ僕達の間にあるへだたりが一歩一歩近まってゆくのを感じた。

言葉を正しく味識することは、その言葉を表はした人の心に迫ることである。古人とのつきあひはこれが根本となるべきである。天皇の御事に関しても、事柄の裏をみるといふ作業のみが行はれ、御言葉そのものを味はふといふことができなくなってゐる。これは「人の心のまこと」を信ずることができなくなったといふ事である。僕は、ひとつの言葉にこもる真実を感得できるやうに、今からも心を鍛えてゆきたいと思ってゐる。

小田村先生の「合宿をかへりみて」の御講義を聞きて

合宿を早く去りたる学生も苦しみをらむと述べ給ひたる
合宿を嫌ふこころに学生は去りたらむとのみわが思ひしを
発表せし一人一人の学生に心くばりて話し給へる

我らをば見すゑましつつ机の上に身をのりいだしてうったへたまふ
何としても分ってほしいとふお心のしのばるるなり強きお声に
お言葉を聞きゆくうちに日の本にうまれしよろこび胸にわきくる

歌には強い力がひそんでいる

（東京大学　教養　二年　等（ひとし）　健次）

歌に、思っていたよりも強い力がひそんでいることに気付いた。男をして泣かせ動かすほどの情熱がたった三十一文字の中に含まれていることにようやく気付いたのである。

次の歌は、班員全体でよんだ、戦没学徒松吉正資氏の歌である。作者の広瀬兄御一家に対する感謝の念は私の心を強く大きく揺り動かす。この、感動できる心をはぐくみたい。

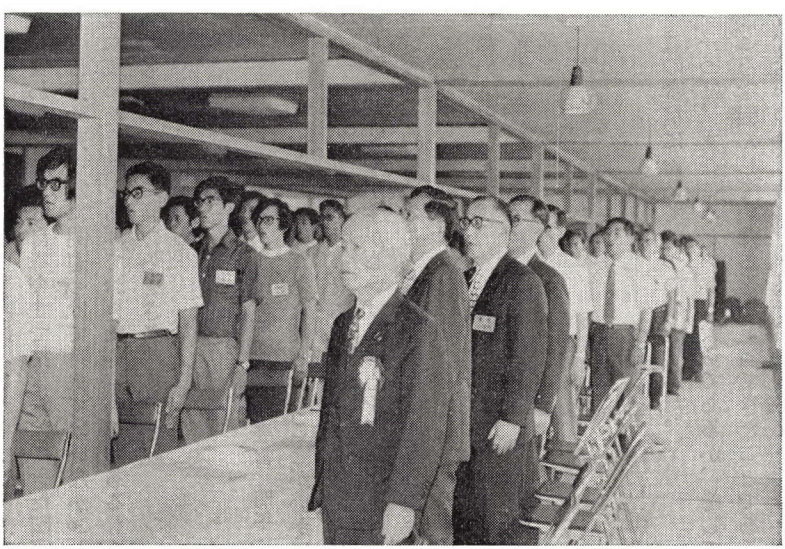
広瀬兄御一家にお別れして（戦没学徒・松吉正資さんの作）
いとまつげ出でむとすれどことばなくふかきなさけに涙ぐまるる
門の辺に立ちて名残りを惜しまるるみ姿をがみ去りがてぬかも
ふりしきる吹雪の中に立ちわかれ去りゆく時し涙おちんとす
見ず知らぬ我をかくまでいたはりし人の心を忘れて思へや
　班別相互批評にて我が歌を批評せられし時
思ひやりてなほ思ひやりて語らるる友の言葉の胸に迫りく

はじめて、人に敬服した

（関西学院大学　経　二年　増田善造）

私は討議において、どんなに批判されてもよい、とにかく自分の思っている事をそのまま述べる気持を少々ながらもく

カメラ・レポート　6



開会式での国歌斉唱は，この合宿教室では，いつも2回繰返す。やはり2回目は一層迫力ある声になってくる。山本勝市先生は，右列先頭で，真剣なご表情で唱和しておられた。

り返した。

私は自分の意見をずばずばと言って、人の意見を無視しがちであるが、リーダーの小柳左門さんの、議論における態度には敬服している。人に敬服したのは生まれてはじめてのことである。

回帰そして継承

（熊本大学　教　二年　徳永　晃）

天皇の御製を通じて、二千有余年の日本人の日本に対する思いが真に感じられた。

御製には、民を思われる心、日本を思われる心でいっぱいであるが、国民は又、天皇に対する思いで、他の国民と共に我が国日本への思いを通じあわせていると思う。僕はこうした日本人の受けついできた日本を受けつぎ、又将来の日本を担う人たちに確実に渡す使命があると思う。日本人だからこそわかる日本への思い。これなくして何で将来が語れよう。日本思想への回帰、そして継承。

天皇の御歌を読みて我が思ひしかと日の本受けつがんとす

いのちあるもののために

（早稲田大学　商　一年　甲斐和彦）

最大の問題点は山田先生が講義なされた「われらにとって国家とは何か」であったと思う。この中で先生は国と死ということをとり上げ、現代の国民はこれらを二次的にとっていると言われた。自分自身今まで抱き続けてきた国家観にしても、自分の死を国に関連づけて考えてはいなかった。強く印象に残った言葉をあげておきたい「いのちあるものがいのちあるもののためにいのちをささげる」と。

この体験をとても大切にしたい

（明治大学　経営　四年　青木則雄）

まごころをもって友だちと話し合うことがいかにむずかしいか、にもかかわらず、そこにはなにか心の澄みわたる感じがしてとてもすがすがしい。人の心を素直にうけとめることを、今後も心掛けることを強く身につまされた。

このような貴重な体験をしたのであるから、とても大切にしたいと思います。

我が友と語るときには素直なる心を持ちて接したしと思ふ

学んだ二つの事

（成城大学　経　一年　布川嘉和）

この合宿において二つの事を学んだ。

一つは、まごころがいかに大切であるか、そして今までまごころを軽んじていたことを反省できたことである。

もう一つは、物事を一眼で、あるいは一元的な考えでもって、見ることの危険性を知ったことである。

私はこの五日の間に、天皇は人間である、それも「すばらしい日本人」である、ということを認識したことを大変うれしく思うのです。

真剣な友のまごころ心打ち馴れぬ正坐も気にならぬなり

日々の生活に持ち続けたい

（亜細亜大学　経　二年　久世郁夫）

我々が失いつつあるものが、日本人が大切に持ち続けて来た心であり、私が持っているはずの心である、と確信を持ったのです。この自覚あってこそ、生きている喜びを感じられるし、祖先に対する感謝がこみあげて来ると思います。

この心を持ち続け守って行くことが人間にとって自分にとって今一番大切な事に思います。そしてこの気持を日々の生活に持ち続けたいのです。

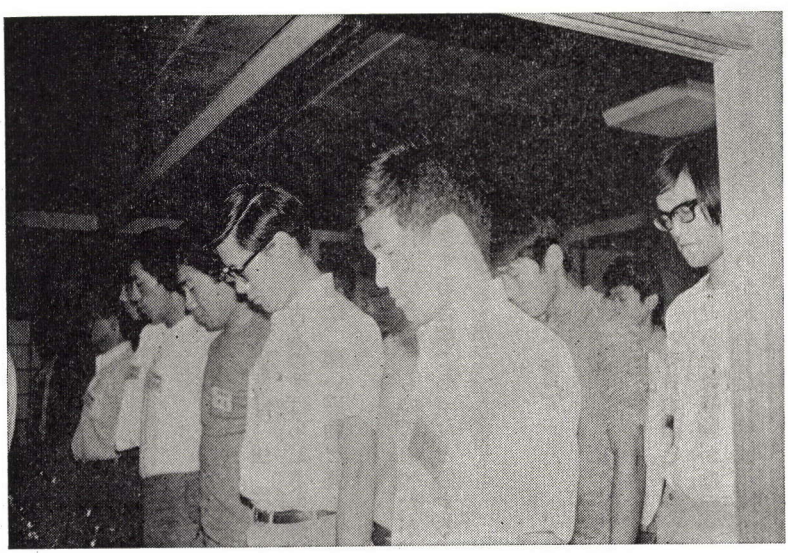
友どちの述べし言葉は短けれど強き決意のあふれをるかな

真剣に聞いて、考えてくれた

（鹿児島大学　医　一年　徳田善久）

討論のとき班長さんが、私の言う事をそれこそ真剣に聞いて下さり考えて下さったあの姿に強くひかれた。班長さんがこう言われた「自分の言おうとする事を相手が納得できぬときは、自分が自分の内面を誤りなく見ていない事を示すものではないか」この御言葉は、私の今までの姿を強く示されて

カメラ・レポート　7



国歌斉唱につづき，「われらの祖国を守るために，尊い生命を捧げられたすべての祖先のみたま」に一分間の黙禱が捧げられた。1分間というのは，たいへんに長い時間であることを知る。

いると感じる。これが自分の足らぬ所であったようだ。
この合宿によって、学問の姿勢、今まで求めたかったそれを見た気がした。
最終日に小田村先生の「合宿をかえりみて」の御話をきき自分がはずかしく修業の足らないことを知りました。

第六班—男子学生—

部分的な感情にとらわれすぎていた反省

（玉川大学　農　四年　川尻博宣）

今までの私は、部分的な感情にとらわれすぎて、丈夫の気持とその精神とをまっとうすることができませんでした。また先生の、国のいのち、祖国を思う力強い御言葉を聞き、先生のいわれる「日本人」であることに、私も自信をもって誇りをもって生きていきたい。そして私たちの祖国が、信じあい助けあっていける国にしたい。

国思ふ雄々しき心つたひきておごれる我が身のはづかしかりき

眼の開かれる思い

（立正大学　仏教　三年　星野輝夫）

木内先生と胡蘭成先生の御講義が特に感銘深く拝聴させて戴きました。両先生は岡潔先生と共に、東洋文明の真の偉大さ、これからの世界のあるべき姿を御教示して下さいまして全く眼の開かれる思いが致して居ります。三人の先生が一致して説かれる御思想こそが、真に世界を救うことのできるものと思って居ります。

いかに世の乱れますとも神の国我もはげまん敷島の道

もっと古典を勉強したい

（亜細亜大学　法　三年　浅妻知久）

和歌や古典にしたしみ、古人のすばらしさを感じる。そういう方々を生んだ日本の国に、深い感動を覚え、もっと古典を勉強しなければと思う。
この合宿は四泊五日という短いものであったが、二十年にも三十年にもひってきする合宿であったと信ずる。

友達と夜の野原に飛び出して歌を唱ひて別れを惜しむ

きつかったが、うれしかった

（九州大学　工　二年　牧角龍憲）

来てみてよかった、つらかった、きつかった、そしてうれしかった。言葉というもの、いや日本語というものにこうまで煩わされ驚かされ感動させられた経験がなかっただけに、何と書き表わしていいのかわからない感情が胸の中をうごめいている。
心をフルに使うというのは難かしく疲れるもんです。いろ

んな事があったはずなのになかなか思い出せません。

古のますらをびとの血潮なる強き言の葉忘るるものか

ことばの選択で苦しんだ

（中央大学　経　二年　中村　裕）

古典の輪読会とか和歌の創作などにおいて、一語一語のもつ重み、重要さというものを身をもって感じた。本とか講演からその人の真意をつかみとる困難さと、自分が表現する場合のことばの選択での苦悩というものを学んだ。

天皇に対する認識というものを改めざるを得なくなったのも、ひとつの収穫であった。御製の一首一首を読み理解すると、おのずから敬愛の念が湧き出てくる。

班別討論でどうしても素直になれなかった自分自身が情けなくなって皆にあやまりたい気持で一杯である。

みともらにまことの意図を伝へんとことのはさがしに苦しみにけり

一語一語を大事にすることを知った

（鹿児島大学　工　一年　甲斐敬之）

私は今「自分は日本人なんだ」と言う自覚をはっきりと持ちました。日本に生まれてほんとによかったと思います。

また班別討論において、あれ程までに真剣に物事を考えるということの重要さ、またうれしさというものを知りました。古典を読む場合については、ただ品詞に分解して活用を

カメラ・レポート　8

国民文化研究会を代表しての小田村理事長の挨拶につづき，大学教官有志協議会を代表して，亜細亜大学教授の夜久正雄先生が，真剣なまなざしと温い表情をこめて挨拶された。

調べるとか、受験に出そうな単語を覚えるとか、そんなことばかりやっていた私ですけど、一つ一つの言葉をだいじにしてその心を勉強することを知り、はじめて、ほんとうの学問とは何か、を少しではありますがつかんだつもりです。参加してほんとによかったと思います。

我が命いかになるともますらをのただますらをのため我生きむとす

古典を読む必要性を痛感した

（熊本大学　法文　一年　船津竜一郎）

初日から次第に考えさせられた事は、自分の国というものに対する認識が全く不足していたということです。わずかに認識していたとすれば、国家即ち国家権力というような見方でしかなかったようです。これから歴史的に現実的にそして正確に知っていかねばなりません。それには古典を謙虚な気持ちで読む必要性を痛感したことは言うまでもなく、そうそうたやすくできるものではないかもしれませんが、今の自分にとって是非やっていかねばなりません。

第七班—男子学生—

迫って来てくれる友が有難い

（九州大学　理　三年　堀田真澄）

和歌の創作を試みたときどうしても歌が出来ず、仕方なく創った歌を提出しました。班別批評で一人の友達より「何か堀田さんの、余りものを大げさに言わない謙虚さが表われている」と言われました。僕の気持に迫って来てくれる友があり がたいと思うと同時に、友にするどくも自分の心の現状を指摘されたと感じました。まだぐずぐずしている自分が残念に思います。

これから帰って、輪読会寮生活をがん張ってやりたいと思います。一緒にやってゆける先輩同輩のいるのがとてもうれしく力強く思います。

明日にならば別れゆく身は心のこりなくのちのことども今宵語らむ
ひたすらに語りて来れど別るる今語り尽きざることばかりなり

古人の書物に接することが大切だ

（東京工業大学　工　三年　植田伸一）

いかに古の人の残された書物に接することが大切かを痛感しました。

国を思ふといふことにしても、まづ己の生きる姿勢を正すことが大切なのではないだらうか。さうすれば、国などといふことは思はなくても、己の生きる姿勢を正すといふこと自体が国を思ふことになるのではないだらうか。そして己の生きる姿勢を正すには、古の人の身を以て体験されそしてその体験をもとにして書かれてゐる書物に接することが、大切なのだといふことを感じました。

今まで知らなかった喜び

（東京学芸大学　教　四年　田島正行）

僕はこれまで真の自己を見つけようと求めつづけて来た。今合宿を終わり、一つのことを知った気がする。それは我々の個人の生は決して一つの切り離された完結的なものではなく、個人を越える何か大いなるものによって生かされているのではないか、ということである。僕は今まで「自己」という一つの部分の中で、空しい生の空転を続けて来たような気がする。諸先生や班長のくり返し述べられたことは、個人のからに閉じこもるなということであり、すなおな心を伸ばし、人間らしい人間になろう、ということであった。

あたり前のこの事実が解らなかったことにイラ立ちを感ずると同時に、今迄自分の全く知らなかった喜び、力というものを内に感ずる気がした。

小田村先生の御講義を聞きて

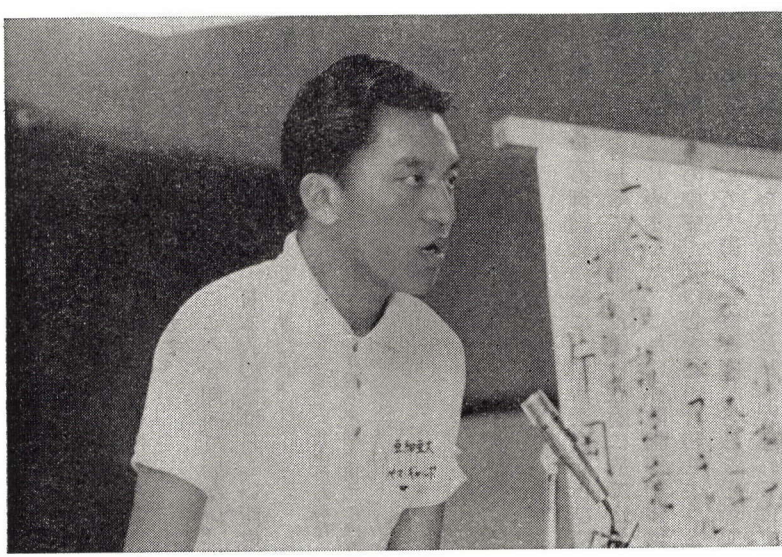
迫り来るあつき思ひに胸つまり思はず我はまなこ閉ぢたり

人格完成を目指してはならない

（亜細亜大学　法　一年　田村泰宏）

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の中の「少欲知足」という言葉に接し「無欲」という言葉を思い浮かべた。少欲とは「自分はとても無などという境地になれない、そこ

カメラ・レポート　9



開会式の直後，この合宿に参加している唯一の外国人，チベットのペマ・ギャルポ君は，流暢かつ迫力ある日本語で，中共に侵略占領されている祖国チベットの悲運について，15分間のアッピールを行い，全参加者に多大の感銘を与えた。

で少欲という現実との接触を保ち乍ら謙虚に生きて行こう」と解した。しかしそれは妥協であることを知った。「無欲とは口でいうことは易いが行ない難い」と思っていたのはまちがいであった。「少欲であるという現実生活に関連しながら、学び、心を開いて行くこと」により、自然と無というのは生まれてくると思った。このことから「自己の人格完成」などという狭い観念的生活ではならないことを知った。同じ日本人として共に学び、人の心から心へと伝えることこそ、最も大切であったのだ。

慰霊祭
御製よむ声はみ霊に伝ふが如く我の耳にもひびきしみこむ

自分本位の考えが浮かんで来る暇は無い

（福岡大学　法　二年　薬王寺百合雄）

私が学んだ最大のものは生活の基本精神とでも言うものでした。これまでの私は自分に囚われ過ぎていました。人間が真剣に生きる時には、日常の些末な出来事に一々心を奪われているような無駄な時間は無く、一分一秒とも自分本位な考えなど浮かんでくる暇はない、ということを、切実に学ぶことができました。これは私にとって、第二の人生の出発とも言える程の出来事です。

阿蘇登山にてペマ・ギャルポ兄に弁当を渡す
弁当を渡しつ見ればにっこりと微笑む顔に光る瞳よ

心に一番残ったこと

（鹿児島大学　農　三年　川畑良幸）

心に一番残っていることは「もっと日本人として誇りをもて」といわれたことであります。

まだまだ天皇陛下のみこころを知っていない。

日本のすばらしさを、日本人のすばらしい諸偉人の方々の事を知り、それを伝えていきたい。

日の本に生をうけたる丈夫ぞ誇りをもちていざゆかんかな
すばらしき御心知りて我が内にあつき誇りぞ湧き出でにけり

第八班—男子学生—

広やかなものを仰いで生きるしか無い

（九州大学　医　六年　前田秀一郎）

小田村先生の御講義の後に、明治天皇ならびに今上天皇の御製を声を合わせて拝誦した後の討論に於ては、皆が感動を素直に語りはじめました。これは和歌創作を体験し、又緊張した合宿生活の中で、互の心を通い合わせようとしてきた為に、御製を通して大御心を直接感じとることができたが故に、大御心にみちびかれ、こだわりを忘れて自ずと真情を語ることができたのだと思います。

このことから、自分の思いを率直に述べ人の身になって考

えるということは、個我を超えた広やかなものを仰ぎつつ生きる、ということによってのみ可能であり、そうして来たのが日本人であって、自分はその様に生きるしかないと痛感致しました。

一句一句大切に聞かずには居られない

（鹿児島大学　法文　四年　山本俊一）

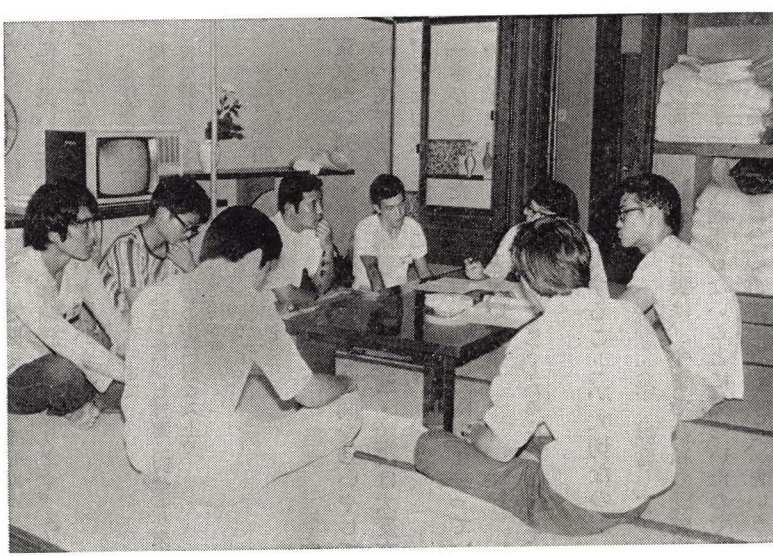
今度感じた事は、自分が求めなければだめだという事です。強い欲求があれば、何をしても熱が入り、弱い自分を少しでも強めてゆくと思います。人の話を一句一句大切に聞く事は疲れる事ですが、そうせずにはいられなくなるのです。そして一方、人に話をする時は、本当に伝えたいと思う時、自分の言葉に責任がかかってくるので自分自身をよく見つめなければいけないと思いました。

小田村先生の「合宿をかへりみて」といふ御講義をききて先生の小乗といふお言葉に目を覚されしここちするなり

立派な組織を作るものは心である

（東京理科大学　経営工　四年　吉村圭四郎）

私が勉強して居ります経営工学は、いかにして最も能率的な組織をつくるかと云うものです。そして立派な組織をつくるものは、理論ではなく誠意と熱意と云う心であると云うことを教えられました。



最初の班別懇談会では，はやくも班員同士の直剣な会話が開始された。

また昨晩の宴会の前に小田村先生はささやかな用意しかできなくて申し訳けない意のことをおっしゃいましたが、世間によくある儀礼的な言葉ではなく、なおさらにお気持が感じられて本当にありがたく想われました。

先生のお心づくしのありがたきビール一缶西瓜一切れ

新しい可能性が出て来た

（東京工業大学　経営工　二年　五江淵　仁）

物事にすなおに感動している友を見ていると、非常にうらやましくなる反面、何か感傷的にも見えるのである。そこに非常に冷めきった自分の姿を見いだし、さびしい気がして来るのである。このような状態からぬけ出したいと思ったが、まだまだの状態で終ってしまった。しかし今までとちがって、何か自分の中にも新しい可能性が出てきたような気がする。今後輪読会などを通じて多くの古典に接し、すなおに感動できる自分を作って行きたい。

とらわれないで飛び込んで行く

（九州大学　法　二年　十時一郎）

小田村先生の最後のお話を聞いて、私は今まで自分のことしか考えていなかったということに、はっと気づきました。うかつなことですが私は、友達と一緒に勉強して共に向上して行かなければならないということを、今ごろになって実感したのです。悔やんでももう間に合いません。しかし私は幸いにも良い先輩方に恵まれ輪読会もあります。今の気持を大切にして勉強を続けたいと思います。

全体意見発表でギャルポ君の話を聞きて
何処に居ても君等のことは忘れぬと言ひし言葉に胸せまり来る
言ひ終り頭を下げて壇を下る君の姿に涙こみ上ぐ

また参加したい

（立正大学　経営　一年　湯原　孝）

東京から列車を乗り継いで長い時間をついやしてここ阿蘇にやって来ました。講義・班別討論・輪読は大変有意義でした。また短歌も好きになりました。

「きびしかったな」と言いながら阿蘇を去っていきます。しかしまた参加したいと思います。

我あゆむときにはつまづきしりぞきてしかるに道は遠く果てなき

自分の言葉で表現することが大切なのだ

（亜細亜大学　経営　一年　山口博英）

友達の真剣な訴えや主張は、今までの私の既成的な考え方や表現がまったく通用しないことに気づいたのです。自分の思っていることを自分の言葉で表現する、ということが、美しいことで大切なことでまたそれが本当の自分の思想であるということが解ったのです。活字や他人の主張をうのみにし

て大きな顔をしていることが、いかにむなしいことであるか解ったのです。日常の自分の言動が、なんと責任のなかったことか……。

混乱して収拾がつかない

（早稲田大学　社会　一年　折原卓美）

僕の頭の中は大変混乱しています。先生方の、今日の日本の失なったたいせつな何かをとりもどそうという気持はこちらにも痛いほど伝わってきます。しかしながら、ぼくの理解の限界を越えている様に思います。今の僕は大変苦しい。頭の中は混乱して収拾がつかなくなっています。

先生の胸迫りくる御言葉にわれの心はさらに乱るる

第九班—男子学生—

祖先を尊敬せねばならぬ

（熊本大学　教　一年　南田武法）

この合宿では、祖先を尊敬せねばならぬと切実に感じた。今まで僕は墓まいりもおろそかにしていたようである。日本人の昔の人々の心をあまり勉強していなかったのは、恥ずかしいことだと思う。

班員の皆とは、自分がこう言えば相手はどう思うだろうと思うと、つい言いそびれてしまって、このまま別れるのは残

カメラ・レポート 11

四泊五日間の合宿内容に対して、不安と緊張が交錯する第一日の夕食。男子も女子も、やはり食事はたのしそう。

念です。

泣きつつも思ひをつぐる先輩の思ひに我は胸の高まる

瑞々しい情緒を持ち続けたい

（亜細亜大学　経　三年　朱膳寺辰雄）

川井先生の「精神性の回復こそが共産主義超克の柱であり それは我々が瑞々しい情緒を持つことだ」と語られた事が今もって忘れ得る事ができません。私たちはとかく親の恩、友人同士、その他の人間関係において感謝の気持ちを忘れがちですし、他人への思いやり、他人の事を常に自分の事のように思ってやる事をし得ません。私はこの事だけは、今後の日々の生活においてぜひ実行してゆきたいと思いました。

さらに、古人の尊い教えを十分に体得して後生に伝える任務を背負っているのだ、という事を実感として感じました。

これだけはわかってほしいとうつたふる師の熱情にわれおどろきぬ

日本思想は理論体系ではない

（東京工業大学　工　二年　布瀬雅義）

僕は今まで、日本思想ともいうべきものが様々な主義のうちのひとつだと思っていたが、それは大きなまちがいだった。この思想は断じて一個の理論体系などではない、という事を知る事が、これを学ぶ第一歩であると思う。

この思想は理論ではない。それ故に、ただそれを知り理解するだけでは何にもならないと思う。いかにこの思想を体得してゆくか、それが最重要問題だ。

言の葉を行はずんばまごころゆお話されし師にあひすまず

述べ得なかった口惜しさ

（専修大学　経営　一年　鈴木　弘）

合宿に参加して、自分の無知不勉強があらためて強く知らされた思いにもなった。討論の場にでてきても、友達の意見に対して、真正面から対立して述べることもできないくやしさが、あまりにも大きすぎるように思える。自分に確信がないため、はっきりした意見が述べられずにすぎてしまったように思えるのが非常にくやしい。

くやしさにうちひしがれずべんがくのみちひらかれりとひとりあゆめよ

胸中深く思っているべきだ

（鹿児島大学　医　一年　松山公士）

友情とか、みずみずしい情意とかの言葉がひんぱんにでてくるというのは自分にとっては非常におそれ多い事であり、こんな言葉は各人が胸中深く思っていればいい事であってあまり外に出すべきではない。小田村先生の分りやすい熱のある言葉、特に最後の言葉にやや安心した者の一人である。

真心と友情等と言はずともおのづとわかる友の心は

もっと自国のことを考えなければならない

（九州大学　経　二年　堤　正弘）

僕たちは日本という国に住んでいて日本という国家のことも、日本ということも考える必要もなく生活している。そのことは幸福なことである。しかし幸福だといっているだけではどんなことになるかもしれないので、もっと日本という国家について考えていかなければならない。

最後の日の意見発表を聞いて感じたことは、僕はあまりにも自分を中心にして物事を考えすぎていたのではないだろうか、ということである。

これほど心を動かされた事は無い

（早稲田大学　法　一年　小清水和彦）

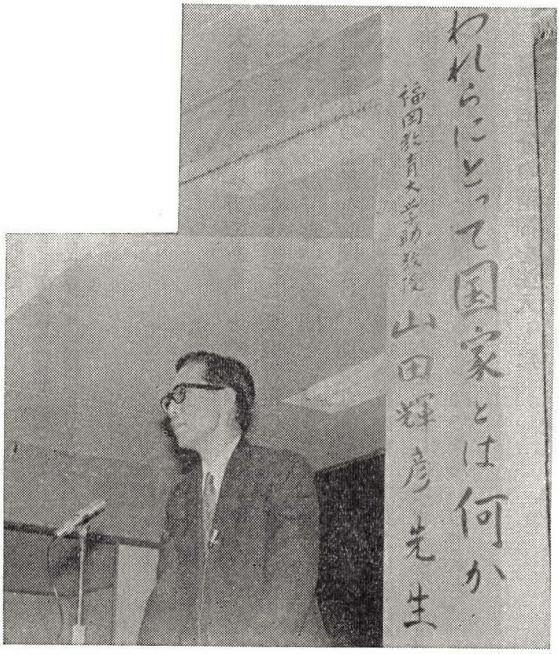
一番心に残った事はやはり最後の全体意見発表であった。壇上に立って絶句した社会人の方もおられた。そして真剣に心のうちを明かしていく友だちの言葉は決して雄弁ではなかった。しかしこれまで、ああいう形で聞いた人の意見というものにこれほど心を動かされた事があったろうか。

涙して語る友らの言の葉に汚れの心なきぞと思ふ

初めて会った人と語る難しさ、そしてつらさ。しかしその事が、最後には楽しさに通ずるという事もわかった。今までの自分のからより、とびだしたこの貴重な時を、む

カメラ・レポート　12

最初の講義「われらにとって国家とは何か」山田輝彦先生は、ズバリと問題の本質にはいっていかれた。



だにはせじという思いでいっぱいだ。

第十班―男子学生―

相手の気持を大切にすることが大事だ

（九州大学　工　三年　天本和馬）

最初の自己紹介のときに、自分の気持ちを言った上で討論に入ったのですが何かばらばらで、まとまって一つの話をするということができませんでした。そこで討論をする場合に各人が互いに自分の気持ちを出し合ってその点について話を進めて行きました。すると少しずつではあるが話が具体的に進み出したように思います。相手の気持ちを大切にすることが本当に大事だと思いました。

川井先生の御講義を聞きて

おのおのの心に思ひを致さずば革命は起ると師はとき給へり
お互ひの心を通はせ信じあふことより日本の国守られてゆく

国家とは自分自身である

（亜細亜大学　法　三年　村田隆和）

合宿では「我々にとって国家とは何か」という事が問題になりましたが、雰囲気や御講義の一つ一つが、国を想うという気持ちに裏打ちされており、知識や概念を語る講義ではなく、先生方御自身が国家をささえる一人である、又その気持ちがあるという事がうったえられ、国家とは自分自身である、決して遠い政治上にあるものではないという事が改めて感ぜられました。

小田村先生の御講義を聞きて

祖国とは御祖を想ふ心なりと師は我々に語り給ひき
国の為命ささげし御祖にも我等は共に報いて行かむ

まだ納得できない

（熊本大学　医　一年　島田達也）

天皇は敬うべき方である、と幼い頃から母に言われて来た私は、単純に両親から感じた天皇肯定の考え方をそのまま受け入れていいのか、という疑問をいだくようになった。

諸先生方のお話をお聞きし、切実な願望の念を感じるのである。しかし何事にも一度は疑いの目をもって見なければ気が済まない自分には、先生の御心をお察しはできるが、どうしてもそれを自分に納得させることはできないのである。

何十年分の精神を注入した

（明治大学　法　二年　笠井勝彦）

会場に到着したことまではっきり覚えているのですが、教室の内容といったものは殆んど忘れ去っているような気がします。努力不足だったのかと秘かに恥じていましたけれど

も、先程の小田村先生のお話に救われたような気が致しました。先生は、無為のままに過ごしている日々の何年も或いは何十年分もの精神を注入した結果であることをお示しになられたからです。

又、国家のこと天皇のことなど真剣に考えなければならないことにもようやく気付きました。今迄感じていた疑問、例えば死にたえた教義に頼るマルクス主義者、目先の利益ばかりを考えての日中国交問題等の解決の糸口となる明示暗示を得たような気がします。このことを永遠に大切にしたいと思います。

五年も十年も後もとこしへにこの感慨を忘れじと思ふ
東京に帰り行きてもこの気持いつまで経つとも忘るまじと思ふ

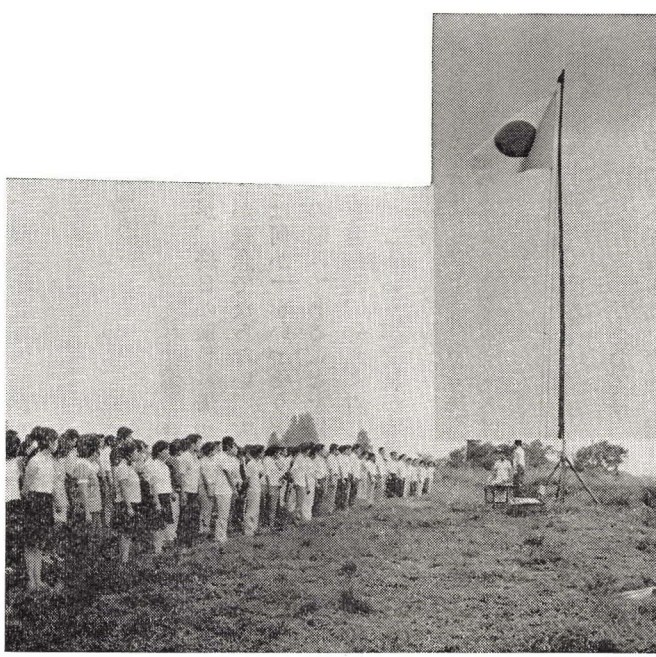
やむにやまれず

（早稲田大学　文　二年　西沢和明）

自分は高校時代に学園紛争を経験し教育不信に陥り厭世的になり、左翼にもノンポリにもなれない自分にもいやけがさし自殺をしようと思ったこともありました。そんな中で生長の家を知り、以来積極的人生を歩むことになりアルバイトで学費と生活費を得乍ら維新運動を続けて参りました。その中でいつも思い続けてきたことは自分はまだ本当の日本人になっていないということです。どうして維新などできようかと思いつつもやむにやまれず学生運動をする、このジレンマで

カメラ・レポート　13

朝の国旗掲揚は、阿蘇高原にひらめく日の丸が、新鮮な国旗の感覚になって伝わってくる。



す。（自分には、小田村先生や川井先生の「体制を変えても人間の心が変わらなければ」というお言葉、身にしみてよく分ります。それは左翼ばかりでなく吾々に与えて下さったお言葉だとも思っております）それが、この和歌創作、御製拝誦という、日本古来の道が、こうも人に感動を与えるのかと知らせて頂きまして非常に感激致しました。

前の晩に、ここにくる前、家に立ち寄りし時を思ひ出して
久しかる家の帰りも夜ふけなるいそがしき身をうらめしと思ふ
帰りきて家のあかりの消えをれば呼びリンの上にそっと手を置く
静かなる家の奥にて鳴りきこゆベルの音三つ母の声すなり
かあさんといってみたいがはづかしくただただ今と言ひて入るなり
わがためにたてたるお湯に入りをれば静かにきこゆまないたの音
自炊にて料理上手と思ひしがかなはぬものは母のみそ汁
みそ汁をつぎし母の手ほそきこと目にとまりつるゆげの中にて
最後の日の行事の折に
国の為いのちをすてし人たちに申し訳けなくただただ思ふ

第十一班—男子学生—

班員と共に感想文を書きて

（九州大学　文　四　志賀建一郎）

み友らはおのもおのもに用紙に向ひペンを走らせ感想書きをり
真剣に書きをる見ればもろ共に語り合ひにしことども思はる
様々に感じ来つらむみ思ひを敷島の道にたくしたまへよ
表現はよしつたなかれみ思ひをまことの言にたくしたまへよ

我等今、国の危機に直面している。国を思う、国の命を感ずる心の回復と、具体的には日中問題に於ける政治姿勢・外交思想の混迷とが、眼前に立ちはだかっているのを感ずる。決断を要す。

帰った友を思う

（熊本大学　法文　一年　中園幹也）

僕の勧誘した友が、終日の前日に帰った。もっとよく語り合わなかったことが残念でならない。でも僕は友の悩みが、これから「学問とは何か」をいっそう深く考える様になり、友にとってプラスの悩みであることを信じたい。小田村先生もそういったことを言われ、それに対して自分たちにも責任があると語られた。こういう御言葉が本当に有難い。

病みて合宿の途中に帰りし友を思ひて
君の心思ひてをればひしひしと君の悩みの胸に迫り来
友どちよ己に克ちて前よりも強くぞなりてみせよ御姿を

心は脈々と連ってゐる

（九州大学　医　一年　桑野博行）

日本を今迄に支へてこられた方達の御言葉や短歌を読むと、実にその方々に直接ふれる事が出来るのだといふ事を身をもって感じる事が出来たと思ひます。そしてその御言葉の中に祖国を、民を、天皇を思ふ心が脈々と連ってゐてこれこ

そが我々が最も大切に、又最も謙虚に我が身に振り返って考へなければならない事であると感じました。

合宿を終りて
三時間たたば友らと別るとも我らの心は常に一なり

ジーンときた

（亜細亜大学　法　一年　桜井源一）

最後の日、壇上に上がって話された一人は「すなおに相手の気持ちを考えてやることが必要だ」といわれました。その時の自分は胸にジーンときました。口では表わすことのできないものです。

これから大学にもどってどうやって生かすかはまだ不安です。でも一日一日悔いを残さず「艱難汝を玉にす」という言葉を再認識していきたいと思います。

来年も又来たいと思います。

最後の語り合ひ
語り合ひ国を思へば時を忘れ強き言葉も出でて来るなり

「ありがとう」のみ

（長崎大学　教　一年　松尾昭彦）

国家ということばに、民族ということばに、私はこだわっていました。それ故に私の肩は、いつもこちこちに凝り固まり、つい、ことばも荒々しくなっていたのだと痛感させられ

さわやかな高原の空気を胸いっぱいに吸って，400名の朝の体操がくりひろげられる。眠気をふっとばして，とても心持よいものであった。

ました。

私は日本人として生をうけたことを感謝したいと常に思っておったのですが、どうしてもこだわりを捨て去る事ができませんでした。でもやっぱり「ありがとうございます」ということばしか出て来ません。それが一番うれしくまた心強いことです。

朝の集ひにて
終日の朝の集ひのレコードに合はせてわれは君が代を歌ひぬ

思いやりのある人に会えた

（熊本大学　工　二年　鎹（かすがい）　信弘）

私はやはり日本人だったと今実感しています。

今まで思いやりを持った人間、そんな聖人君子みたいな人間はありえないと思い、とにかく自分は自分の人生を充実すればいいんだと言う考えの中にいました。

この合宿に参加して、こんなに多くの人が共に是れ凡夫同士の思いやりに立って、国を良くしていこうとしているんだからなんとかなりそうだ、という感激を覚える事が出来ました。そしてそういう姿勢こそ日本の文化そのものであることをお教えいただき、ああやっぱり自分は日本人だった、僕が求めていたものは日本人の心であったと感じました。

君が代を真心こめて唱ひ終へもの思ひもなく目をつむりたり

あらゆる階層を思いやらねばならぬ

（富山大学　経　二年　石原昇治）

国を思う気持ち、相手を思いやる気持ちがありながら、恵まれぬ人々に対する思いやりが感じられなかった。またそういった考えに基づいた意見も聞かれなかった。相手を思いやるということは、話をする時のみならず、あらゆる階層の人々に対してもなされなければならない。

国思ふ国とは何ぞ友どちの冷たき言葉に心沈みけり

これから和歌をやってゆく

（鹿児島大学　法文　三年　冨永博志）

一番楽しかったことは和歌の相互批評の時間でした。創造する苦しみと出来上った時の喜び、それはひじような喜びです。そして何よりの喜びは、それを詠んで他人から批判してもらったことです。良い批評をしてもらったうれしさは筆に尽くせません。これから少し和歌をやってみたい気持に駆られました。

我もまた友らと和歌を斉唱すこの喜びを永遠に忘れじ

身近な所から

（早稲田大学　教　二年　松村俊明）

自分の身近な共同体の中に、調和したすばらしい世界を創

り出し、その輪をだんだん拡めてゆく。その過程に、身近な生き甲斐を得、ひいては日本の理想の姿を再建してゆくことこそ、我々の当面の任務であると思いました。僕は諸先生方のお話を聞き、己の問題から発したところから、一つ一つ解決していく努力を怠らず続けることが、御恩にむくいることであると実感致しました。

全体意見発表にて

演壇に登りて語る学友の涙見し時胸つまりけり

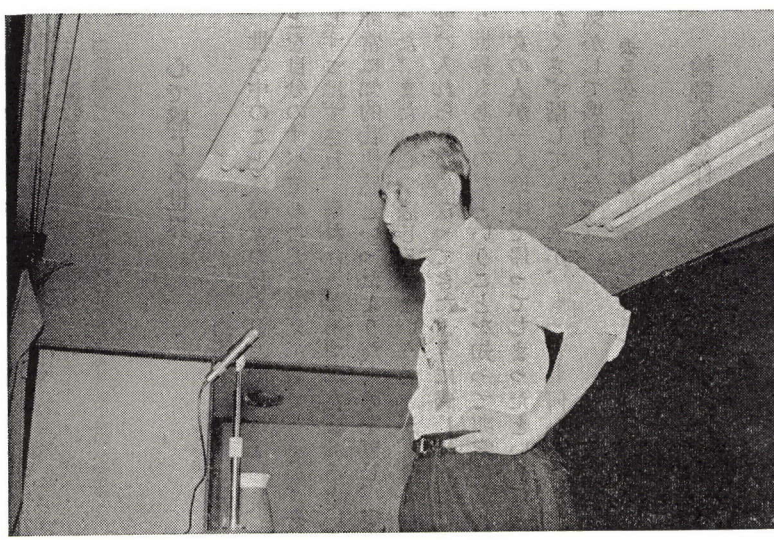
我もまた思はず手を上げ演壇に登りて言ひしも胸内のまま

第十二班—男子学生—

臆せず飛び込んでゆきたい

（鹿児島大学　理　三年　仁多永夫）

何事も一人で解決してゆこうとするのはむずかしく、こうした合宿に来なければ、国という体験を切実に自分のものとしておられる方々の思いに触れるということもできなかったでしょうし、たとえ本を読んでも自分の気持がいい加減であれば、強い感銘を受けることなくして結局は、自分の生活を導くものになりえないであろうことを思えば、むしろ向後は、臆せず毎日のいろんな人とのつき合いに飛び込んでゆき、自分がいいと思うものに殉じる位の覚悟でやっていくよう決意します。



第2日目の朝，木内信胤先生のご講義は「最近の世界の動きとその解釈」と題されて，今日の日本と世界について縦横に説かれた。

先輩より「疾き遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものはまことなりけり」といふ明治天皇御製を示されて
弱気より離れ今より師や友の導きに添ひ生きてゆきなむ

「心で感じる国を創る」に感動

（早稲田大学　政経　二年　宮本俊信）

小田村先生が最後に「頭で理解し合うのではなく、心で感じ理解し合おう。そういう国を創ろうではないか。左翼・右翼などという言葉にとらわれ、そのような発想・立場からものを考えるのはよそうではないか」と言われたが、僕はこの御言葉に「そうだ。そうなんだ」と非常に感動した。話上手という人はいくらでもいるし、又訓練によってなりうるだろう。それに対し、本当に人に話すということの難しさ、重さを強く感じた。

小田村先生のお話を聞きて
力こめ語らるる姿ありがたき広き心に涙覚ゆる

真の学問の姿を確信した

（立教大学　経　一年　岩本英亨）

全員が真剣に学ぼうとする気持ちと、諸先生方のこういう事を知ってもらいたいんだというお気持とがぶっつかり合い、二時間足らずの講義であってもつかれきってしまう毎日でした。講義を拝聴し、班の友人達とせっさたくまをして、一つの事に意見をぶっつけ合い、ある時には憤りを感じ、ある時には心のつうじ合う喜びを味わう、こういった事が真の学問をする姿であると確信しました。

御講義をききて
御講義の一つ一つが我が胸につきささってくるのを覚ゆ

心で感じる世界

（慶応大学　経　二年　杉田　朗）

世の中のことは様々のわく組の中で行なわれ、その中のことを自分のすべてのことと考えがちであるが、そのわくが少しずつはずされ、素朴なところで考え直せるというところが非常に知的壮快感といったようなものを感じ、実際ためになった。また「心で感じる」ということが、ぼくらの周りでは受け入れられなくなってきたように感じていたので、こういう世界もあるのだということを知って非常にうれしかった。

女の人が一人途中で帰ってしまったということを、動揺もかくさず話していた人が、もっとも何かを示しているような気がして感動した。

去る友を止められなかったせつなさを涙もて伝ふる友よくじけるな

輪読会を作ることにした

（駒沢大学　経　一年　柏木　宏）

生まれて初めて和歌などというものを作ってみまして、短歌のむずかしさや、その裏にかくされている歴史や、いろい

ろな良さが心に感じられるような気持ちになりました。
このような合宿のあることを帰って友に知らせ来年はもっと多くの学友達に参加してもらいたいと心から思いました。そして輪読会のようなものを作ろうと決めました。

大阿蘇の山々遠き彼方より煙登りてまひ上るかな

第十三班—男子学生—

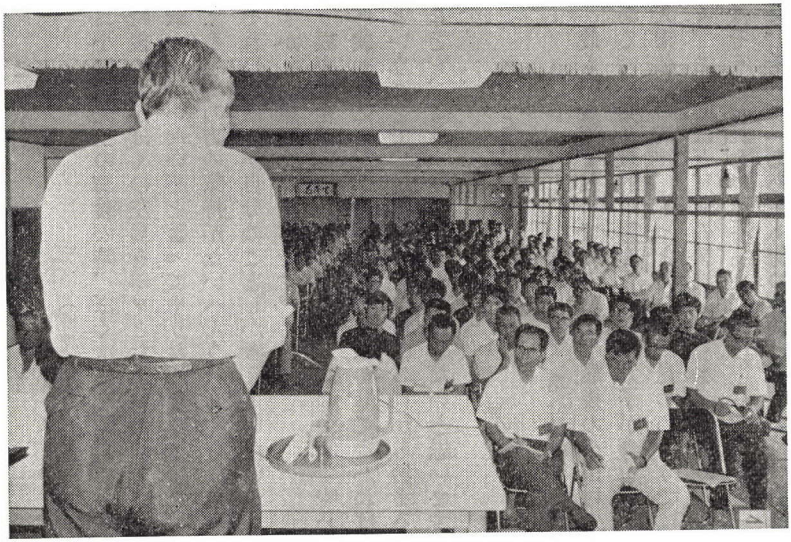
その時々の感動を大切にして行きたい

（専修大学　商　二年　丸山克己）

いろいろな講義を聞いたが、それはみな自分にとっての問題の解決に役立ったというよりも、今まで自分がほぼ正しいと思ったことを再考しなければならないように自分を追いこむことになった。日中正常化・マスコミ・教育・天皇制などの問題が私の前に山積みになっている。

また友達の意見を聞くたびに、自分がほとんど注目していないところを鋭い目でもってとらえていることに驚かされた。私は、もっと細心に注意を払うためには、自分の感動をすぐ歌に読むということによって、その時々に生じた自分の感動を大切にして行きたいと思う。

み友らの切実にいふうったへが我が身にふれて悩みをおこす



木内信胤先生のご講義に聴き入る参加者，この日は社会人班・教員班の座席が，最前列にくりあげられ聴講する。

「国を思ふ」とは友を思ふことだ

（熊本大学　法文　四年　福永好紀）

今僕は、国を思ふとは、この合宿で学んだことを一人でも多くの友に伝へて行くこと以外にはないと思ひました。本当に国を思ふといふことは、友のことを思ふといふことなのだ、じっくり友のことばを聞き、そして自分の思ひを語り尽すことなのだ、と思ひました。

また慰霊祭で頭をさげてゐる時、自分の祖父母を送り迎へてゐるかの気持がして、それが「国を思ふ」といふことにつながってゐると感じてゐます。

友と別るる時

別れ告げ帰る友らよもろともに学びし日々を忘れざらまし
何かしら得たりしもののありといふわが友のことば聞けばうれしも

もっと古典に触れなくては

（亜細亜大学　商　四年　綿引芳行）

今回は、相手の意見・考えをすなおに聞くことができ、それに対してよく考え、すなおな考えが出せたように思われ、一つの収穫であった。また、古典にもっと触れなくては、という感が強くした。

良い歌とわが歌ひし歌を覚えると教へてくれと言ふぞうれしき

これからだ

（鹿児島大学　農　一年　宮島　基）

小田村先生の講義の時、ぼくは目を閉じていました。その時後の人がぼくの左肩をポンとたたいたのです。ぼくは俺は眠っちゃいないぞと言ってやりたくなりました。でもよく考えるとその方の気持がたいへんうれしくなってきたのです。それほどぼくが自分のことしか考えていないか、つくづく恥ずかしく思われた次第です。

坂東先生もいわれた事ですが、この合宿で味わった感動や体験したことを、一生を通じて生かしてゆかねば意味は無いということです。本当に、合宿はこれから始まるのだということを、もう一度心にとめておきたいと思います。

スッと晴れやかになった

（早稲田大学　第一政経　三年　古宮　勇）

最も印象深く残っているのは、最後の小田村先生のお話である。小乗仏教的な態度と、聖徳太子が身をもって示された大乗仏教の精神、もっと大らかに見つめようではないか、等々。この時ほど、何の抵抗もなく水が流れるように（自分にはそう思われた）先生のお言葉が入ってきたことはなかった。そして「ああ俺も俺の体験と考えとで、聖徳太子の説かれたところの一端でも理解できるんだな」と思ったとき、満

足感とともに、心の中がすっと晴れやかになるのを感じた。

三年にまさる四日間

（早稲田大学　社会科学　一年　坂元　重孝）

矢のように通り過ぎたこの四日間は、短いとは言え、その充実感は、只無駄に過した三年間にまさるものであった。

全体意見発表の時ギャルポ君は言った「私に対する拍手はチベット民族に対する支援の拍手に思われた」と。ああ偉いものだ。自分も負けずに国を憂い、民族を思わなければならぬと思う。

最後の日感きはまりて言の葉をつまらせてゐるいとしき友よ

人生に於ける有意義な時

（亜細亜大学　経　二年　沢田　健）

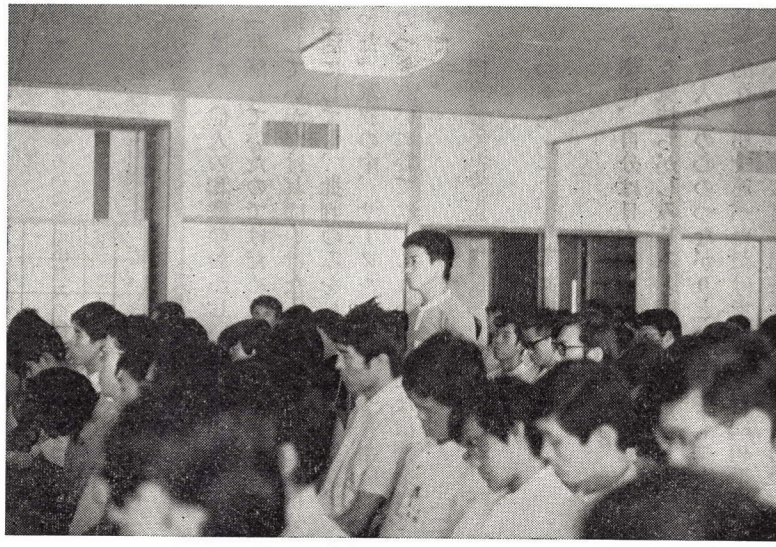
四泊五日の体験は、私の今までの人生、これからの人生に於いて最も有意義な時であったのではないかと思われます。

班員との巡り合いという縁、合宿教室への参加という縁で自分自身を、また日本という国を、真剣に考えみつめなければいけないと感じました。

我思ふ合宿における体験を己のものにする覚悟なり

短歌創作を通して感じたこと

（鹿児島経済大学　経　四年　久保田孝夫）



講義直後の質疑応答の時間は，どんな質問が出るか，と全員耳をそばだてるものである。男子学生の質問。

我々にとって言葉の表わし方は、うまく出来ないかもしれませんが、歌は、実にその人自身の心が現われていると思います。私が歌を通して感じました事は、自分の事ばかり考えず他人の言葉をもっと尊重して、その心をくみとらなければならないかを学び取った事で、私にとって最高のよろこびであります。

遠くして住める所はちがへども友の心ぞみな一つなり

第十四班—男子学生—

先人のおかげを感じる

（九州大学　工　四年　久々宮　章）

僕は、御製を皆と読んだが、素直に受けとめられないという感想しか聞けなかった。

それが四日目の青年研究発表・慰霊祭の後に、皆の気持に大きな変化を生じた。先人に対する畏敬の念が自然に起ってきたと友らは語った。もう一度先輩の歌・今上天皇の御製を読んだ。感動・胸の高まりが皆の声に顔にあふれるのを感じた。感ずるという時に理屈はない。やっと共感することができた、というよろこびでうれしくなった。

先人達の、身を献げて国のためにつくされたおかげで今の自分達が生かされている、ということに気づいた時に、自然にわき起ってくる喜びと決意とを感じ始めた。

合宿を終へて

窓辺より見ゆるかなたの山並みの裾野にひろごる青田目にしむ

正確な指摘をしていきたい

（鹿児島大学　法文　二年　野間口俊行）

僕が、他人の和歌のおかしい箇所を非難していたら班長が「非難していたのではだめだ。どこがどういう風に悪いと指摘していかなければいけない」と言われた。自分の今までの生活にしても、批判のみをして、正確に指摘することがなかった。家族の中、サークルの人とのつきあい、クラスの人とのつきあいに於ては、これから正確な指摘をしていこうと思います。

皇国の益良夫の道求めつつ求めつつ進まむ心定めて

つきつめて始めて共感できる

（熊本大学　教　二年　宮田政徳）

今僕は、自分は日本に生まれ日本で育ち日本人であるんだという気持ちがしみじみと感ぜられます。

人と人との心のつながりという点でも胸を打たれました。抽象的な理屈を述べただけでは、絶対に相手の心に響かないし、人を動かすことは出来ないと悟りました。自分の問題意識を自分でとことんまでつきつめて始めて人を共感させるも

のとなるのだと思います。何とかやって見たいと思います。

班員と今別れゆくいつの日かまた会ふことを約束しつつ

最後の夜夢を見た

（慶応義塾大学　工　二年　戸沢昭紀）

班員との話し合い、また班長との対話によって、次のようなことがわかったような気がします。それは、相手の言わんとすることをつかもうとするならば、自分が相手の心の中に溶け込んで相手と同じ立場に立った時のことを真剣に考えなければならないということです。

私はいろいろと悪いところを指摘されましたが、それが心に深く感じたのか、最後の夜に夢を見ました。

夢なかで我の盲を友どちにきびしく問はれはつと目をさます

この夢で、友だちの大切さが今まで以上に感じられ、これからも友だちを大切に、また友だちをふやしていくように努力したいと思います。

友どちの気をつけてといふ言の葉が心にしみてうれしかりけり

天皇について考え直した

（東京電機大学　工　一年　杉田　勉）

和歌を創作し、和歌に含まれている感情を、歌を通して知ることがたいへんすばらしく思いました。また自分が歌を作ることにも興味がわいてきました。もう一つあります。それ

カメラ・レポート 18

木内先生は，班の部屋を訪ねられ，班別討論に加わってくださる。

は私は今まで天皇のことについてはどうでも良いと思っていました。この合宿にきて、天皇がどんな気持ちでおられたかということが曲がりなりにも捉えることができたのがたいへんうれしく思いました。次回も参加したいと思います。

天皇の民思はるる御心の思ひたふときここに我思ふ

国の源のありか

（鹿児島大学　法文　一年　福留純孝）

今まで観念的に国家というものを考えてきた事を反省させられました。皆と共により良い社会を作ろうとする心にこそ、国が存在するものであることを知らされました。

今まで知識が大切だと考えていましたが、心を学ぶことが根本であることを知りました。先輩が目を見つめて心をこめて話されたあの中にこそ、国の源があると知りました。

今思えば友らのきびしい言葉の中に温い心があったのを深く思い出します。

友どちの語る言葉のきびしさは我を思ひての真心なるかな

この友あの師がある限り、すばらしい日々を送ることが出来ることと思います。近くの友にこの感激を伝え共に励んでゆく友を増そうと思っています。

第十五班―男子学生―

日本のいのちに連なりたい

（九州大学　二年　工　川井泰彦）

僕は数人の友を誘って参加しました。わかってくれるかなと不安な気持もしておりました。でも先生方の御講義を聴いていくうちに、心が洗い清められたように感じましたし友もきっとそうだと思いました。

人間として共に信じあいながらよく生きていこうとするのが日本人の生き方である、という小田村先生の御言葉、命死ぬとも生は存在し続けるという胡蘭成先生の御言葉は、貴いものを示して下さったように思います。現在まで脈々として続いてきた日本のいのちに触れたおもいがしました。僕もそれに連なっていきたいと思います。

班の全員で戦没学生・松吉正資さんの歌をよむ

友どちと声を合はせてよみゆけばみ友への思ひ胸に迫りく

真先に考えるべきは天皇のことだ

（香川大学　経　一年　玉井　健）

諸先生の講義にもありましたように、皇室は日本において千数百年続いてきたのです。そしてすべての国民は皇室をう

やまい、国民一人一人が国を思い、その時日本は一つでした。

今の日本が、ちりぢりになっていきつつあるという危機感は、果して私だけのものでしょうか。

天皇陛下を敬いその御心を肌に感じ日本の国のことを考える。今の私達がまっさきに考えなければならないことは、このことではないでしょうか。私はできるだけ多くの人に、自分のこの気持ちをうったえて行きたいと思っています。

センチメンタリズムを排す

（早稲田大学　第一文　一年　鳴神和之）

特に大きく響いたのは小田村先生のお話であった。その時私は、自分の持ってゐるつまらないセンチメンタリズム・嘘・エゴといったものが自分の心中にあるといふことを確認しそれらを排除すべきことを決意し、更に、さういったものが何処から来るかといふ疑問を解く鍵を見付けたやうな気がした。

私は更に自己といふものを見つめてゆきたいと思ふ。但し小田村先生のいはれたやうに、小乗にはならぬやう心掛けたいものである。

全体意見発表にて

壇上の友泣きぬれば何処よりか乙女のすゝり泣く声のする
熱き心もて話さるゝ言の葉はあふるゝ涙にとだえとだえて

カメラ・レポート　19

木内先生は，また，教員班・社会人班約60名の人たちとの座談で，質疑応答をかさねられた。（山本勝市先生も同席された。）

子供の頃を思い出した

（東京電機大学　工　一年　山下穂積）

朝ラジオ体操をやり国旗掲揚がありましたが、朝早く、美しい自然の中でやるこんな朝の集いにはたいへん感動しました。昔、小学校・中学校の頃夏休みの朝学校に集ってやったラジオ体操を思い出しました。

僕は生まれて始めて阿蘇に登りました。あの火口のところは全くすごかったです。

おほらかな気持ちになりて話したる集ひの五日はもう終りたり
僕は今ここに生きてる日本に多くの民と共に生きてる

日常生活上の最大問題

（熊本大学　法文　二年　武田博幸）

胡蘭成先生の御講義についてだけ少しだけ書きます。哲学科の学生として、西洋哲学ではどうしても学べないものを教えられたような気がします。これからやっていくなかで中心とすべきものであると予感しています。

ここで学んだすべてを、日常生活のどこに生かすかが、なんとしても最大問題です。

「夜の集ひ」の後のペマ・ギャルポ君

盛大な集ひ終りて薄暗き廊下の隅に彼の姿見ゆ
いかほどか下うつ向きて彼の眼は淋しき思ひ漂ひあるも
いつの日か君が故国に同胞と語り合ふ日を想ひやりしか

国を客観視していた

（亜細亜大学　経営　二年　佐藤義典）

諸先生或いは諸先輩方の話をきいているうちに、今までの自分の生き方、生活の姿勢というものに、はずかしさを感ぜずにはいられませんでした。皆が真剣にうちこまれていたがあの時の自分の姿はどうであったか。おう〳〵にして今まで日本の国を客観視していたからに外なりません。

でも今何かを感じています。この合宿を契機に少しずつでも日本人らしい人間になりたいと思います。

各地より集ひ会ひたる若者の心は一つ国の事なり

第十六班—男子学生—

祖国がある有難さ

（熊本大学　工　三年　高岡正人）

ペマ君の話を聞いて、祖国が存在するということの有難さがひしひしと胸に迫った。そしてペマ君の国を想う気持ちが全くペマ君の生活に密着していることを思うと、自分がまだまだ「国とは我だ」という気持ちが薄いように思う。恥ずかしい気持ちでした。

吉田大兄の意見発表を聞きて

手を上ぐるその時までの大兄の胸の苦悩の偲ばれてならず

中園兄の意見発表を聞きて
常日ごろ口数少きこの友の怒りのこもる言葉は激し
小田村先生のお話を聞きて(前田・中園兄について)
師の君の語り給ひし言の葉の我が胸深くしみてくるなり

一つ一つ実行して行く

(亜細亜大学　法　三年　渋谷啓一)

一刻も早く東京に帰りたいという気持です。九州を旅行したり京都・奈良にも寄って行きたいが、早く帰って、まだ読んでいない本がたくさんあるので、それをこの夏休み中に読み終えたいと思っています。そしてこれからは自分の出来る事を一つ一つ実行していきたいと思っています。

小田村先生の御話を聞きて
師の君のはげしき口調を聞きをれば己の道の定まるを覚ゆ

学んだ二つのこと

(熊本大学　法文　一年　宮崎重人)

全体意見発表を聴きて
壇上にて言はむとするに涙こみあげただためいきのみはく友の姿
ありがたうと涙ながらに感謝せし友の姿に我は拍手す
ますらをの歌をうたひし友どちは国守らむの気概に満てり
我もまた御国のために尽さむと新たの思ひ胸にみちたり

僕は二つの事を学んだ。一つは国について、もう一つは学問する態度について。

国を論じるとき、国のために命をすててい った先人のこと

カメラ・レポート　20

第二日の午後は、川井修治先生のご講義「大学改革の基本視点」であった。

を考えなくてはならない。そういった先人の心をくむことなしに国はわからない。

学問は感動することから始まる。例えば歴史を学ぶ時、当時の人の喜び悲しみが感じられて来るためには、自分が自分の周囲の物に感動できねばならないと思う。学問する者は他人の喜び悲しみがわかる人間でなければならない。

深い共感を得た

（福岡大学　経　四年　安恒正祥）

班員一人一人が考え方をどんどん出してくるので、自然とその中に引っぱられてゆくような気持が感じられ「あゝ皆も自分と同じようなことを悩み感じているのだなあ」と思うとこれほど感激したことはなかった。

自分にとってプラスになったことがいくつかある。まず日本という国があるんだという自覚ができた。さらに自然に対する考え方が重要に思われるようになったこと。そして素直になれるようになったことである。この至誠を失なうことなく生活していきたいと思う。

最後の夜の消灯後
夜なべして語りし声は消え去りて耳にしみ入る高いびきかな

大きな感動を味わった

（九州大学　法　一年　吉原琢磨）

小柳先生・小田村先生の講義をお聞きして予想以上の感動を受けました。というのも、この合宿は右翼主催のものと思い諸先輩の説明を聞いてもやはりしぶしぶ参加を致したのです。

今までの自分には感動という言葉が少なかったのですが、それでも少しはありました。それは大きな感動であるのだということが教えられたのです。有難う御座いました。

友どちの心をこめし声を聞き我も思はず姿勢を正しき
真剣に語り合ひたる友達と今日はいよいよ別れて行くか

一生懸命やるのみ

（鹿児島大学　法文　一年　居細工豊）

早かった五日だった。やはりいかに精神を集中していたかが解る。この思い出は一生忘れることはないだろう。本当に良かった。

何かどかーんとした大きな柱を打ち込まれた感じだ。こんな経験は未だかつてない。今はもう一生けん命やるのみ。

友どちとあと一晩を泊らむと決めたるわれの胸は踊りぬ

我々は「ただ日本人」なのだ

（早稲田大学　商　二年　岩下彰夫）

「合宿をかえりみて」と題しての小田村先生の御言葉「体制・反体制という言葉はナンセンスだ。右翼でも民族派でも

ない。日本人なのだ。これ以外の何でもない」何か小さく萎縮してしまっていた小生に激しいおしかりを受けて、あらためて自分を振り返る材料となりました。

君が代の心震はすメロディに目頭知らず熱くなりきぬ

勉強し直したい

（慶応義塾大学　経　一年　田中敏博）

本当に来てよかったと思う。今迄してきた学問が、知識がいかにむなしいものであったか、その原因がはっきりとわかった。

天皇や国家や政治について、今迄つめこんで来た知識を、一つ一つ心にのぼらして、初心に戻ったつもりで勉強していきたい。

心のつたわらないもどかしさも、自分が相手の心となって考えるということができていない為だとよくわかった。これからは、本当に人間のつきあいをして行きたいと思う。講師の先生方や国文研の方々に本当に感謝したい。

合宿に来し時の我かへりみて今の自分のなんとうれしき

素直になりきれなかった

（中央大学　法　一年　首藤潤治）

自分が素直になりきれなかったのは何故だろう。それは急激な変化、合宿に対する先入感そういったものが自分の心を

川井先生のご講義に，女子学生も一心に聴き入っている。

閉ざしてしまったのだろう。しかし東京に帰り、以前していたような話が自分を虚しくさせるようだったら、来年またこの合宿に来るだろう。

第十七班—男子学生—

国につながる基盤

（九州大学　歯　五年　吉田哲太郎）

最後の日の夜、床についた後、期間中余り話さずに苦しそうにしていた友と話して、友達が少しずつ自分の気持を話してくれた時、心の中で僕は御礼を言いました。その様な友にめぐり合うことができて有難いことだと思いました。ある友は「逃げて帰ろうと思った事があった。しかし不思議な事に何か連帯感みたいなものを感ずる」と言ってくれました。

お互いに、友の話に心を傾けて聴くと云う真剣なつき合いをした結果生まれた連帯感と云うものが、僕等が国と云うものにつながってゆく基盤であると思いました。

杉山君を思ひて

夜遅く床を並べて友達のまごころこもる話を聞けり
今までに言葉少き君なれば話を聞きてうれしかりけり
言葉数少けれども班員の気付かぬことを世話せり君は
我らみな気付かぬことを思ひやる君が心は貴かりけり

一つの灯がともった

（亜細亜大学　法　四年　成田幸太郎）

国家といふ大きな問題に対し深く考へたことがなかったが、小田村先生のおっしゃった「心の内に国はある」といふ言葉をお聞きして、この問題に何か一つあかりがともった様な気がします。美しい日本、日本人の心を、後に続く者に伝へる為全力を傾け努力してゆこうと思ひます。

班別討論

わかってくれわかってくれよとうったふる友のまなこに胸を打たるる

参加してよかった

（福岡大学　経　四年　浅海順二）

振り返って見ると、最初の気持と今とでは全然異なっているみたいである。

合宿に来て、見るもの、聞くもの全て物めずらしい事ばかりであった。

私は参加して本当に良かったと思う。

全体意見発表にて

友どちのなみだあふるる声聞きていつしか我も涙しにけり

気がつかなかった「物の見方」

（明治大学　法　一年　石田弘彦）

ぼくは班別の討論会を第一に評価したい。

何かしら違和感、又納得できかねる部分があるが、今後再度考え直してみたいと思う。

とにかくぼくの心に残ったものは、みんなが実に真剣な取り組み方をしているということだった。ぼくが得た最大のものである。いたずらな批判をせず徹底的な素直な取り組み方、これこそ今まで全く気づかなかった物の一面であった。

別れゆく今日のこの日は寂しいが友よ忘るな我も忘れじ

今までのことが恥ずかしい

（慶応義塾大学　文　一年　西高辻信美）

ペマ君の話から受けたあの国を愛する心、チベット人という自覚は、僕に欠けていた最も根本的な「僕は日本人だ」という意識を目ざめさしてくれた。

また御講義や班別討論・輪読等を通して今まで僕自身が何か最も重要な心のことを忘れ、ただ表面の事象だけを追っていたのではないか、そんな印象を強烈にうけ、今までの自分自身が恥ずかしくもどかしく感じられてならない。

それぞれの土地はちがへど集ひきて想ふ心はこの国のこと

運命的な感じ

（鹿児島大学　教　二年　松元忠久）

偶然にも自分が、開催回数と同じ第十七班に列しているの

第2日の夜，小柳陽太郎先生による「聖徳太子のご思想を解明するテキスト」の輪読講義，この合宿教室ならではのものである。

を知り、驚きと不安に似た強い気持ちを持った。そしてこれが自分にとって何か運命的な出逢いのように思えた。
もっとも考えさせられたのは、人と人との交わりがいかにむずかしいかという事であった。

限りある命知りたるのち故に思ひつくさむ生くべき道を

汲み取るむずかしさ

（亜細亜大学　経　一年　杉山勝久）

ギャルポ君のあの目の輝きがいまだ心に残っています。自分が日本人であることが恥ずかしく思いました。
他人の気持ちを受け入れるのは易いけれども、その時どのような気持ちで言っているのかということを考えるのは、とても難しいことだと思いました。
帰ってから友達に語りたいと思います。

友どちと心開きて語りたる言の葉胸に阿蘇を去り行く

数々の思い出

（熊本工業大学　工　二年　北島春嘉）

建築家として生きてゆく上に、あの奥富修一先生の御言葉は、一生忘れることのできない発表であったし、国家というものが身近に感じられるようになったし、日本人としての自覚がもてたということはすばらしい習得であり、ひきしまった日々ではあったが、すばらしい日々であったことは確信をもっていえます、いまの僕は。

第十八班―男子学生―

生き生きと頑張りたい

（福岡教育大学　教　三年　金沢明夫）

私は反体制運動をしている者と時々話すのですが、理論的に負けることがしばしばあります。そのことを残念に思っていましたが、その様なものは何の価値もないように思えました。大切なのは、その人が実際地に足のついた確固たる事実と真実の感動を有するかどうか、ということだと考えます。
私は生き生きとした「生」の叫びを叫びつづけて頑張りたいと思います。

友どちと親しくなれりと思ひしが別れの来りて惜しくもあるかな

部外者であったことを反省

（熊本大学　法文　二年　藤田克彦）

この合宿を、右翼的であり国粋主義であるんではないかと考えていた事を深く恥じている。
友らとの語らいもその友達が本当に自分の気持ちを考えてくれている、そう分ると打ち解けて話が出来る様になった。
私達の世代は国家という事を考える事がタブーでもある

かの様に教えられ、国家についてほとんど考えなかった。考えても、制度などといった外的国家についてのみであった。私自身は部外者の立場で眺めていたにすぎなかった。私は山田先生に非常に感銘を与えられた一人であります。

これからの生き方にしたし阿蘇山にて学びし真の学びの道は

自分のためばかりでなく

（早稲田大学　政経　二年　椎名誠二）

天皇と聞けば国家主義を連想し戦争と結びつけていた僕は新たに心の目を開かれたような思いがした。これから僕はしっかりとこの祖国日本の土を踏みしめて生きていこう。それは独り自分のためばかりでなく、他の多くの同胞である日本人のためであり、日本国そのもののためである、と心に刻みつけられた。

このような決意も次第にうすれていってしまうかも知れません。けれども僕は自己をすてて人のために尽くすという心を思い出すように努めます。

厳しさのある生活へ

（日本経済短期大学　一年　北原　実）

青年研究発表での今林さんと奥富さんの両先輩方に深く感動を受けました。いかに日常生活を真剣にお送りになられておられるか、ということです。日常における厳しさある生活

カメラ・レポート 23

小柳先生のご講義のあとは，「班別輪読」が各班の部屋で2時間にわたって持たれた。

の精神性への回復は、両先輩ばかりではなく、我々国民一人一人の大きな課題であることは間違いないと思う。

全体意見発表を聞きて
それぞれに思ひをのぶる友をみて熱くなりにき我が目がしらは

初めての阿蘇に、友らと共に登ったこと

（駒沢大学　経　一年　池上輝樹）

先生の言葉を聞けば胸せまりはらの底から力わき出る

友の一人が言っていたが、友だちとおもいっきりレジャーなどを楽しんでみても何かしらむなしいものが残ると。自分もそんな事を感じたことがある。

自分は阿蘇へは初めてであった。もくもくとふき上がってくるけむり、大きな口。自分はこの大自然を、ただ単にレジャーで来たのではなくして真の友・先生・先輩たちと来た事が非常に意義があったと思う。すがすがしい気持ちである。

第十九班—男子学生—

先輩の気持がわかり始めた

（鹿児島大学　法文　四年　徳丸雅信）

今日まで自分が斯の道を歩んで来られたのは、先生・先輩方の御指導のおかげであると思います。受身的立場に居る間は、どうしてこれ程までに真剣にぶつかってこられるのだろうかということが十分にわからなかった。しかし最高学年になりサークルの中心的立場に立ってみてようやくわかるような気がする。今度は自分が後輩に対して今まで先輩がやってこられたことをやっていくんだという気持でおります。

ペマ・ギャルポ君の発表
壇上に一番に登り胸をはり手ぶりをまじへて君は語りき
チベットの国を憂ふる君が心鋭き眼差にあふれてをりぬ
合宿に誘ってくれた先輩や先生方に感謝したいといふ

敢えて杞憂を

（東京外国語大学　英米　四年　草場正博）

山田先生は「内なる国家」があると言われた。勿論できあいのものだと言われたなどと言うのではない。しかし一人一人が苦斗して培うべき不定形のものに枠組を与えることになるのではあるまいか。その熟語は、そのような人々に、自分の身の周りからしか「内なる国家」が始まらないことを忘れさせるような気がする。学ぶことのはるかに多かった合宿で敢えて杞憂するところを述べました。

慰霊祭にて
真黒なる空のもとにぞ集ひけり貴き御霊慰めんとて
虚空より降りきたりつる御霊へと種々の品捧げてぞある
捨て難き身にしありしを先達は王（おほきみ）の辺に死にしとぞ聞く
死にしとて末の世までも国民にさきはへあれと守る先達

感情を抑制して来たが

（福岡大学　薬　一年　石井真徳）

自分は今まで感動した時常にその感情を抑制してきた。感情に溺れたり、それによって出来る連帯感を利用されるのを恐れたからだった。

人間の感情を、ただ客観的・理論的に割りきろうとした結果、自分は人間であり日本人であることを見失なっていたことに気がついた。この合宿で、自分の・他人の感動を受けいれられ、人の心のふれあいができるようになれたのは、何よりもうれしかった。

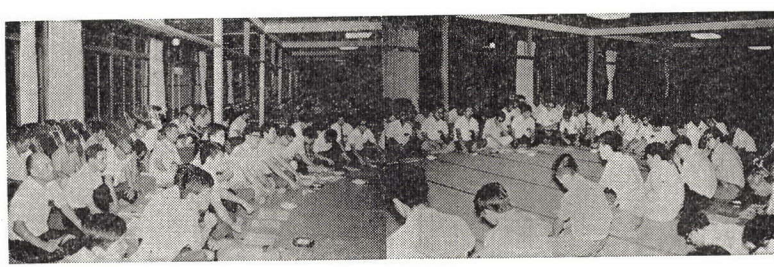
友どちの叫びし言葉にわが心わが身はふるへ奥歯かみしむ

参加して良かった

（亜細亜大学　経　一年　山下一成）

先生の国を思うお言葉の一言一句に気をふるわせ感動したこと。思うままに歌によみ、すなおなる気持を持ち得たこと。聖徳太子を輪読し、日常生活学生生活のささえ・かてとなるものを身につけたこと。数えればつきないがほんとうに参加してよかったと思います。

めし時に離れしお茶を持ってくる心づかひにうれしくなりぬ



カメラ・レポート　24

第2日の日程が完了した夜の10時半から2時間，すなわち，夜半にかけて，班長・副班長，それに各班に出向いている助言者合計80名近くの者が「夜の検討会」を持った。参加者一人一人について心をこめた助言を交換し，残り3日間への布石とした。（また，この席には，社会人班・教員班の班員たちに傍聴の自由が伝えられ，熱心な方々が，後の方で聴き入っておられた。）

これからやりたいこと

（熊本大学　工　一年　溝上郁夫）

全く知らなかった友と、五日間生活を共にし、学問について人生についてまた世界情勢について語り合ったのは初めての事であり、また不安も入りまじった喜びでありました。これを機会に、自分を見つめ直し、正しいと思ったことに真すぐにつき進んで行きたいと思います。それに、時々和歌などを作り心静かな目を養いたいと思います。

友どちと別れ去る時近づくに我が胸うちに寂しさをおぼゆ

自分がやらねば

（長崎大学　工　二年　草野健一郎）

後半のわずか三日でこれ程感激するとは思いもよらなかったし、決して語る友が出ようなどとは考えもしなかった。そしてそれ程までに人間の生きる道や生きがいを求めている姿に接して、恐ろしささえ感じた。もうやらねばならぬ、自分自身がやらねば、日本の神ながらの心が失なわれていくように感じられてきた。本当に日本の心を感じとり実行して、なるべく多くの人々に伝える決心をしました。

感動の心も忘れ幾年を過せし我が身を恥づかしと思ふ
涙して語れる先輩の感動にいかに耐へても涙あふるる
大君の国民思はるる御心を語れる師の情熱ぞ我も感じむ

大御心（おおみごころ）を心で理解できた

（九州大学　文　三年　坂口秀俊）

一年生の時から参加しなかったことを大変残念に思っている。これから友に、我のうけた感激を出来るだけ知らせようと思っている。

私が得た最大のことは、和歌を通して知ることの出来る日本の心である。特に大御心を心で理解出来たということは嬉しかった。今迄、天皇のことを話す時、政治体制上のことばかり話していたのを心から恥じている。

自分で和歌を作ってみて、御製を拝誦する時も感激がこみあげて来た。今からもっともっと勉強して本当に大御心を知り奉り、出来るだけ多くの人に自分の感動を伝えて行きたい。

全体意見発表の時
感激の涙にむせぶ友の声ただただ我も嬉しかりけり
グッサリと胸につきささる先輩の御言葉うけていざ我行かん

今までを反省して

（福岡大学　商　三年　左藤正伸）

私の学生生活は、ただ生きているから生きているのだという無気力さの中にいました。これからの人生の礎（いしずえ）となるべき物を得たようなきがします。私はそれを自分のものとして生

かして行くため学んで行こうと思います。

合宿の最終日に我は思ふ
誠心を尽して人に接しつつ御国の為に身を立てねばと
合宿の最後の時間を過すとき亡きたらちねの母を偲びぬ

第二十班—男子学生—

自分は生かされてゐる

（熊本大学　工　四年　松田信一郎）

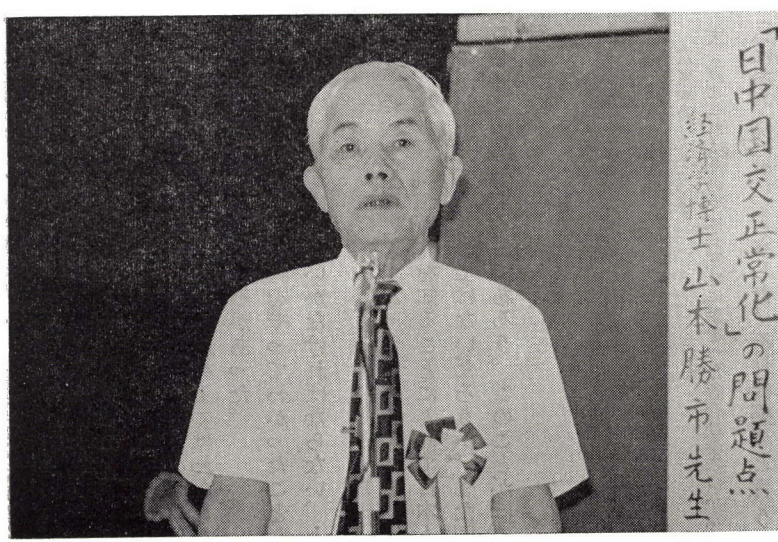
生かされてゐる自分といふものをつくづくと感じました。日本がますらをのかなしきいのちの積みかさねによって守られてきたといふことを、日頃余りにも軽そつに忘れてゐたやうだ。はっきり気づかされたのは先づ慰霊祭であった。

そこに気づいてから班生活が全く違ったものになった。お互ひに班員の気持を思ひやる生活に一変した。全員が班長でありまた班員であった。

さうなって来て講義を聴く態度も、解るとか解らないとかいふ聴き方をしてゐたのが、先生方の御気持が直に迫って来るやうな聴き方になった。心を虚しくして聴くといふのはこのことかと今思ってゐます。

野の草に残れるつゆに朝日さし光の珠ときらめきてをり
別れの時に
去りがたき思ひいだきてみ友らはあとふり返り今別れゆく

カメラ・レポート　25



第3日の午前は「日中国交正常化の問題点」と題して，山本勝市博士の肺腑からほとばしり出るような憂国の直情が吐露された。

共に考え、努力して行きたい

（亜細亜大学　経　二年　村上　勤）

大学生活においてとかく自分は自己中心に生活を営んでいることを痛せつに感じてなりません。

今よかったと思っていることは、友だちの意見をまた先生方の御講義を全力を傾けてきいたということです。

最後に小田村先生がお話された「人の心が集結されそれが連綿として後世につたわってきたのが国家なのだ」という御言葉が大変力強く感じました。自分達が、いや日本国民が、ともに国について考え、ともに努力していかなければならないのだと思いました。

急に沁(し)み込んで来たもの

（亜細亜大学　経　一年　白田正義）

始めのうちは「早く終らないかな」としばしば思うことがありました。しかし終りに近づいてくるたびに、自分に得る所が大であるとの思いが重なって来ました。

今迄考えてもみなかった国家・天皇など、諸先生の御講義で急に頭の中にしみ渡った思いです。これから考えて行こうという思いでいっぱいです。

みのりある合宿生活参加して今ただ我は国を思ひつ

考えさせられた一つ二つ

（熊本大学　教　一年　高瀬徹哉）

いくたびと訪ぬる阿蘇の山なれど心ざわめく合宿参加
これからの日の本の国背負ひ立つ役目担ふは我ら若人

良かったのか無駄であったのか今よくはわからない。しかし二三考えさせられるところがあった。

一つは読書である。輪読をやってわかったことなのだが、作者の心を深く追求していかなければならない、ということであった。

もう一つは天皇のことであった。どうして日本人は天皇を必要としたのか。この点を知ることによって日本人の心というものがわかってくるのではないだろうか。また国家というものも自らわかってくるであろう。このことがぼくの課題であろう。

忘れていたことば「感謝」

（駒沢大学　文　二年　畑中宗仁）

友を思ふ
友よ友よこれよりのちはお互ひに手をつなぎ合ひ歩みゆかなん

私はある事に気づきました。それは感謝と言うことばです。地球・大自然・両親・兄弟又は周りの人間に対して、批判ばかりしてそれで終っている自分のことば、行動なのであ

ります。でも我々は批判や行動を行う場合に、まずそれの存在に対して感謝の念をいだかなければならないと思います。そうです「ありがとう、ありがとう」と心に常に持ちたいのであります。

これよりは西に東に別れても心のきづないついつまでも

最も実りのあった誕生日

（福岡大学　法　三年　山本哲史）

最初ただ不安のみが先行し心の開き難きとさえ思えたものでした。しかししだいに楽しさを感じ、又班友の和歌創作に苦しむのを我が苦しみと思う様になりました。

合宿中に誕生日を迎えた私は、二十二年間の誕生日の中で最も実りのある日となしえたのであります。そのとき班友の「おめでとう」は、心からの言葉であり私はただもう有難さでいっぱいでした。この様な心からの友、心を大切にする友、を増して行きたいと思います。

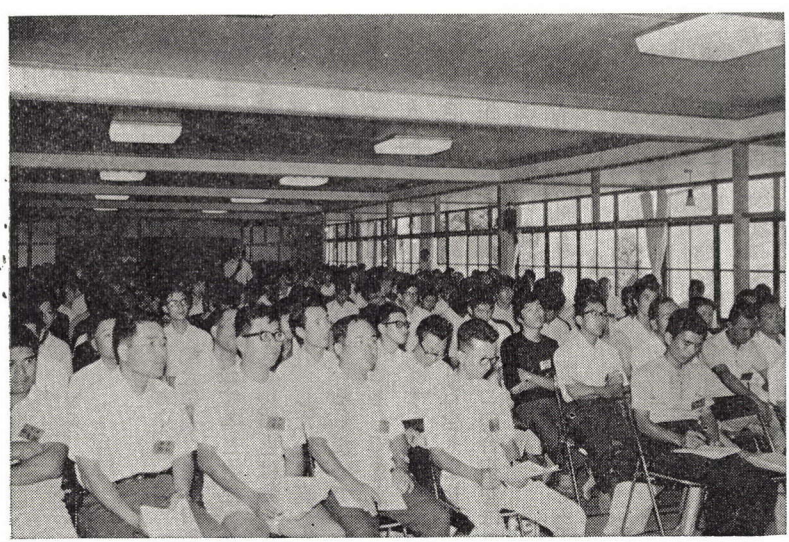
友をうたふ

今はもう別れの時を迎へてはじつと見つむる友の手と顔
思ひ返せばほんの四五夜の友なれど互ひに感ぜるその心内
また逢はむとちかひし友の手をにぎり言葉なくして力しめゆく

収拾がつかない

（早稲田大学　政経　二年　副島辰英）

五日前の出来事ははるか昔のことのようだ。何か重要なも



山本博士の言々句々は，聴く者の胸奥にこれに呼応する何物かを生まずにはおかなかった。

のを置き去ったようで心の動揺を覚える。

国の中に自らの生の意義を見いだそうとしている友等の姿、それに比較して僕は生の意義の有無について観念的とも思える思考を続けている。それが分った時には悲しかった。口に出そうかとも思ったが出さずに見ていた。虚無を見つめているだけでいいのか、という反省はそれによって起こった。

来年も参加したいと思います。

わが想ひ千々に乱れて言の葉に表すこともあたはざるなり

心に残る言葉

（早稲田大学　政経　一年　福田俊英）

合宿の感想も月並なものもある。が、そういうことよりも何より小柳先生が「諸先生方の話を聞いて〝なるほどそのような意見・考え方もあるのだな……〟しかしその気持ちのままでこの山を去らないでほしい」とおっしゃったその〝あるのだな〟という気持ちで今去ろうとしている自分に嫌悪感さえ覚えている。

みやげをばひとつひとつとかぞへしも何故か心はさみしかりけり

第二十一班―男子学生―

学生としての生き方が問題

（大分大学　経　四年　野田清文）

学生大会においては相手を論破することにより多くの学友から支持されるのである。むなしい事とは知りつつも、そういった事で毎日がくりかえされ、しだいに真の心というものが失なわれていた事を今感じているしだいです。しかしそうかといって見て見ぬふりをすることもできません。

日本人として生きようとすればするほど、大学生として如何に生きようとするのかを考えざるをえません。大学のあり方、学生のあり方を考えなければこの合宿をほんとうに理解したとは言えないと思うのです。

思ひやり思ひやりして話すうちわがいたらなさ身にしみて感ず

ことばにならぬ感動

（早稲田大学　商　四年　星野幸夫）

通俗的なことばで言えば、よかった・ためになった、そんなことばになってしまいますが、今の心の中にはことばでは表わせないような感動でいっぱいです。

他人の心を思いやるという、人間の素朴な感情こそその人

間のすべてだと思う。だからこそ大切にしなければならない。

学園の荒廃ぶりを思ふにつけ胸の怒りはいや増しに増す

一人で生きているのではない

（亜細亜大学　法　一年　山田睦彦）

今までの自分は余りにも日本人であることを意識しないでひたすら私利私欲の為「人間尊重」ということをいい続けた自分が恥ずかしくてなりません。本当に、自分一人で生きているのではない。これからはもっと人の心をわかってやろうと努力しなければならないと思います。

合宿に来てよかったといふ友に言葉かけねど我もまた同じ

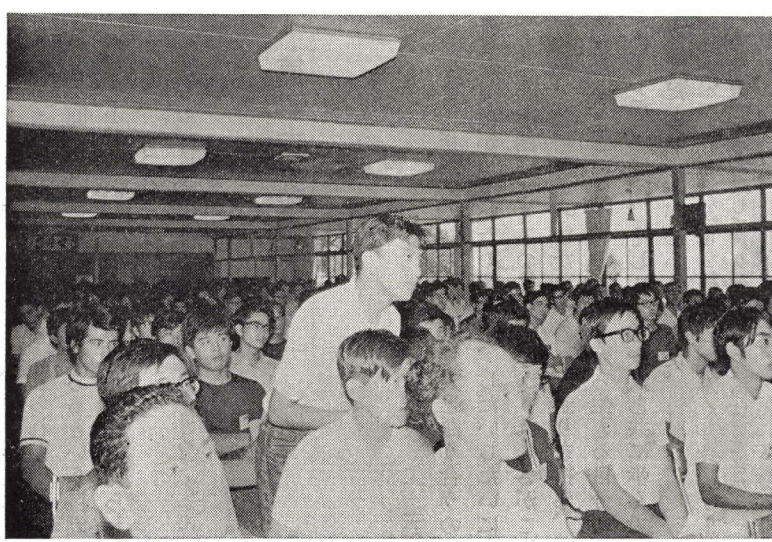
広い心を持ちたい

（熊本商科大学　経　二年　丸山震哉）

二日目あたりまで異様な雰囲気を強く感じていたが、しだいにうすれていった。おそらく皆の真けんな態度に接したからだと思う。

人間は一般に自己主張したがるものだ。自分もそうである。これではいけないと思った。もっと広い心をもつ様努力したいと思う。

朝霧にかすかに見ゆる阿蘇山は壮厳にして美しきかな



山本先生への質疑もまた，日中問題の行く末を含めて，真剣そのものであった。

足元を見直して

（拓殖大学　政経　三年　妹尾恭治）

大学では、インターナショナル的な立場で学問を深め全人類のために貢献しようと肝に銘じてきました。ところが合宿で国家という議題が述べられ、まだはっきりとした確信は得られてはいませんが、自分が紛れもない日本人であるということを根底におき、インターナショナル的時事に、事に、あたろうと自覚し不安定な考えながら筆をおきたいと思います。

祖先を抜きにして国は語れない

（鹿児島経済大学　経　二年　森　茂木）

国のいのち、我々の生きている日本、そして祖先が伝え守ってきた文化、日本そのものを考える事なくして、日本・国家というものは語れないのだと知りました。

私が今日ここに生きているのは、多くの祖先があられての日本というのが守られて来たからこそだと思い、これらの祖先に対して感謝したい気持でいっぱいです。

心を尽して話せば

（明星大学　理工　一年　石川純男）

相手の話を聞こうとしても、自分の考えにとらわれ、その人の言わんとしていることが何であるかわからなくなってしまうことがあった。けれども、心を尽くして話せば相手の心を打つことができるものだと感じられた。ことに小田村先生の話を聞いて、自分が日本人であるという自覚が強まり、そのことを抜きにしては自分の生き方は考えられないと思われた。

阿蘇から家に向って帰ってもこの感激をとどめておかん

第二十二班―男子学生―

心の支え

（熊本大学　工　三年　坂本精児）

今までぜんぜん知らなかった友と語り合うのに、焦りのような気持がしていたのですが、しだいしだいに自分も又班の友も心を開いてくるのに、なにかうれしさがこみあげてきました。合宿後もぜひなにかのつながりを持ち、たやさずに行きたいと思います。それが今から生きる自分の心のささえになると思います。そして先輩や友と共に歩んでいる道は本物なのだという事がわかりました。

各々の心のうちを語りをれば夜のふけゆくも気づかざりけり

夜ふけまで心尽して語りあふ友のあるのは有難きかな

土にも木にもこもるいのち

（専修大学　経営　三年　青砥誠一）

どの先生も、何を思うより前に、日本の国というものを考えておられているのだという感じを非常に強く感じた。そして今僕達がこの日本という国に生きていられるというのも、僕達の祖先の方々一人一人が本当に日本という国のことを真剣に考えて来られたが故に僕達は今生きていることができるのであって、一握りの土、一本の木にも祖先の方々の尊い命というものがこめられている。又そういうことを後輩に語り伝えていくことが使命であると感じます。

小田村先生の御講義を聞きて

日の本は一人一人の胸ぬちにありしものなりと語りたまひぬ

自分が感動することが出発点だ

（福岡教育大学　教　二年　大槻身信）

本を読む事にしても、端的に言えば人を論破する為にだけに本を読んだようだ。そして人に感動させようさせようとばかりに気がとまり、自分が感動するということを忘れていた。自分は先生という職業につきたいと思うが、今までのような気持ちでは絶対になろうとしてはならないと思う。

今林さん・奥富さんの話される様子、目の光。あれは本当に自分の体験・感動の積み重ねから発せられた言葉だからこ

山本博士はご講義のあと，班の部屋に招かれて，学生たちと直接の会話を持たれ，ここでも，はげしい憂国のご心情が静かに披露された。

そ胸にせまってきたのだ。これからの自分は、このことを本当に大事にしなければならない。

後輩の一人が参加せず残念である。その思ひを
君のすがたを待てどこぬまま君なしの開会式ははじまりにけり
君を思ひいまだこんのかと先輩も心配りて我に聞きたり
我もまた思ひは同じ君の体の病みてやゐぬかと思ひつづくる

生きて行く基本

（国学院大学　法　三年　平田一郎）

最後の小田村先生のお話を聞いて居りまして、本当に先生の言われる通りだ、私たちはあの悠久以来の美しき大和民族の心を再び取りもどして行かなければ決して生きていけないのだという想いが心を強く打ちました。その時広場に目を転じましたところ日の丸の旗が風にひるがえって居りました。

小田村先生のお話を聞いて
日の丸と師の御言葉が鮮やかに胸に残れり合宿教室

「すなお」を考え直した

（東京工業大学　理工　二年　高木英雄）

〝すなお〟ということについて考えさせられた。言葉に表わせない心のモヤモヤを、いとも簡単によそものの言葉で片付けようとしている自分を知った。このことは、夜久先生による和歌全体批評でより痛感した。「雄大なりし……」〝雄大なりし〟これはごまかしているのである。

全体意見発表で「整理のついていないということにとらわれすぎていることに気づいた」というような旨の発言をなされた。僕は「これだ！」と思った。

自己満足を反省

（岡山・大安寺高校卒　横山光太郎）

いままで友達と話しあっていく場合に、自分の本当の気持ちを飾っていたことに気付いた。そして空論を論じあって自己満足していたことを恥ずかしく思いました。

僕がここで感動したその心を誰かに話したい気持ちです。これから日常生活のささいなことから感じた心を実行していきたい。

自分にとらわれていた

（鹿児島経済大学　経　二年　北島　誠）

ふりかえってみて、自分が今までいかに自分という一つの概念をつくりあげてその中でただ自分だけを見つめて生きて来た事か、ただ社会の中の一員として何故もつと世の中を見つめなかったか、ということが反省させられる。又、歴史の見方をただその事実を知る事だけに満足をおぼえ、深くその中に浸るまでは行かなくても深く考えなかった事がはずかしい。

考え直したい

（福岡大学　医　一年　原　信也）

国家という言葉を、今までは妙な偏見によって定義づけてしまっていました。しかしあらためて素直な心でそういうものを考えた時に、また新しい自分なりの考えが起ってくるものだという事、そして教育されたというか教えこまされてきた固定観念というものを、もう一度考えなおさねばならないという事を痛感しました。

五日間生活を共にした友人にもなぜか親しみを覚えて忘れがたい気もします。

最後の夜ふと目がさめて
真夜中に寝言いひたる友をみてなぜか親しみわきいづるなり

第二十三班—男子学生—

勉強したい三つのこと

（長崎大学　医　二年　藤富　豊）

三つほど勉強したいことがある。

一つは「内なる国家とは、いのち・価値である」とはどんなことなのか。二つ、天皇のこと。三つ、集団における個人の自由と思想の歪曲・自己欺瞞をいかに乗りこえるか。

カメラ・レポート 29

待望のピクニックを前に，夜久正雄先生によって「和歌創作について」と題して，全員が今日の遠足のあいだに，和歌が詠めるようになってしまう極意が伝授された。この極意伝授の1時間はたいへん楽しい時間でもあった。

おほらかな師の御心にひきこまれ知らず知らずに身をのりいだしつ

他人の弱さを感じてやる

（鹿児島大学　教　三年　有馬守一）

講義とは別に、最も心打たれたことは写真係を担当していた学生の発表でした。「自分は弱い人間だ。心の弱い人間もいるのだということも考えてほしい」といった言葉は、どうしても取りさることのできない心の影の部分を代弁してくれるように思ったからです。

小田村先生がおっしゃられたように、国を思うことは自分を生かし同時に他人を生かすものであると思うし、他人を思いやるとは、他人の欠点や弱さや苦しさまでをもひっくるめて感じることだと痛感しました。

我が歌のはづかしきほどの稚さにいひ添へくるる友のうれしさ

相手の身になって考えたい

（山口大学　工　一年　鬼頭富之）

相手の身になって考える、自己中心的な考え方をなくす、というこのことを自分は小学生の時から言われ続けてきましたが、この合宿に参加する前までは忘れていましたが、再認識するとともに今後実践していきたいと思います。

合宿にて我が生くる道見つけたるこのよろこびは何にたとへむ

自分と相手とは一つ生命

（島根大学　農　二年　近藤正史）

自らをさらけ出して話し、そして友の話に耳をかたむける、この生活の中の基本的な習慣に今までの自分は欠けていました。他とともに生きているのだ、自分と相手は一つの生命なんだと分りました。国を思う姿勢も、他の話を自らのものとして聞ける自分から始まるのですね。

合宿で感動せし友達は一言いひたしと壇上に立つ

始めて見た姿

（福岡大学　経　一年　松本道明）

最後に行なわれた全体意見発表で、いろんな話を聞いて感激を受けた。話すすべての人々の目は輝き澄みきっていた。このように真剣に物事を考えようという姿を生まれて始めて見たようだし、自分もその姿の一員だったと思う。ある人は心ゆくまで討論しあった事に満足感を抱き、またある人は御講義のすばらしかったことに感謝し堂々と意見を発表した。

別れゆく友を見送らんいつの日かまた合ふ日をば心に夢みて

はがゆかったわけ

（亜細亜大学　法　三年　阿部　仁）

自分の気持を言葉で表わせたのはほんのわずかなものでし

た。自分なりに努力はしたものの、日頃の自分の生活態度のいい加減さを隠しきれるものではありません。この五日間を通じての、はがゆくてならなかった気持というのは、言葉の一つ一つ又本の一冊々々を粗雑に扱ってきた自分に対してのことではなかったのか、というような気がしてなりません。

全体発表に感じて

先輩のうれかしったの一言に友は涙に声つまらせつ

肩を組んだ年輩の人

（熊本大学　法　一年　落合隆文）

今でもありありと心に残ってる事が一つある。それは夜の集いにおいて僕の右側に肩を組んだ人のことである。その人は五十才前後の方でした。その方は、それはもう本当に手離しで喜びあふれる顔で、力一杯足を振り上げ、無邪気というか純粋な青年のごとく声のあらん限りをふりしぼって歌っていらしたんです。その人の顔が忘れられないんです。

僕は思いました。先生と生徒の対話なんて全く存在しないなんてよく言われるけど何てことないじゃないかと。とにかく肩をつき合ってみれば理解できるじゃないかって。しかしやはり残念なことは、それをやる場というのが、今の大学には余りにも少なすぎる、いや皆無の状態である。

師と共に肩組み合ひて寮歌をば歌へば自づと心伝はる

大型バス6台を借り切って，全員が草千里・阿蘇山火口に出発する。

第二十四班 ―男子学生―

第二回参加の感想

（長崎大学　経　四年　吉田綱一朗）

今度で二回目の参加でありますが、忘れ果てていた事を思い出しました。先の合宿で得たことが、ややもすると固定観念に堕してしまった感じがしないでもありません。私はやはり頭だけで考えて心で感じ見ることを忘れていたのだと気付いたつもりです。聞き流していた気にもとめなかった事々に感動したと言い和歌を読まれた人に教えられた気がします。

友どちの言の葉草をとどめけりふたたび会はぬ友と思はれ

今後の努力

（西南学院大学　法　一年　小賦正剛）

いよいよ帰る。頭の中が混乱している。小田村先生の講義によって非常に気持が楽になりました。今からは自己に忠実に生きなければと思います。人と心から交わる努力を続ける意思です。

お互ひに胸襟開きて語らへば友も同じに思ふと答へし

報恩奉仕

（専修大学　文　一年　大庭　繁）

大学には〝報恩奉仕〟という言葉が有ります。今までこの言葉に接する度に格言のようなものに思え私自身忌み嫌っていたむきがあります。しかしいま可能な限り〝報恩奉仕〟を実践しようと思います。

今皆で感想文を執筆していますが、彼ら一人々々をみていると、五日前まで見も知らぬ人間だったとは思えません。私はここで人間がいかにすばらしいかを知りました。

大阿蘇を去るとて忘れじ友どちの険しき瞳かがやかせしを

今日から始める

（岡山商科大学　商　四年　稲葉隆志）

私にとっては、明日からいや今日から新しい合宿が始まろうとしている。というよりも、私のためにそして同胞のために祖国のために始めなければならない。

私は今、我が祖国を考える前に、私の生き甲斐を知り出す前に、自分の心を是正したい。素直にしたい。何彼につけすぐ自分を飾ろうとする己がいやでしょうがない。それらから入門し修業しなおす覚悟だ。

大阿蘇に道を求めし友どちの降（くだ）る姿をそっと見にけり

ともされた灯

（長崎大学　経　一年　富元典嗣）

山田先生や特に小田村先生の御講義にあった国家の問題だけはとても身近に感じられ、この山を降りて世間の雑踏の中にまじっても、ともされた感動の灯は決して消えないと思う。又絶対に消したくない。

始めは全く知らない者同士だったけれども、今では一生忘れることができない友、先輩である。これほど信頼できるようになった人々は始めてである。

別れゆく友のためにもこの我はしっかりせねばと決意するなり

人が信じられた

（東京外国語大学　仏　三年　森田秀二）

かえりみて、やはり変わった自分に気がつく。

僕にとって一つの転機になりえたのは班別討論であった。友達の素直な疑問や感想の表出に、やはり、さわやかな〝人を信じられる〟という気持ちを感じた。もう少し得たことがあったろうと思っていたのだけれども、実はこの一言に尽きるように思われて来た。〝人を信じられる〟という喜び。何よりも得がたい、こんな簡単なことが。

友達の素直な言葉におのづから心の開く思ひがするかな

草千里の放牧場での中食は，なんともいえぬオイシサである。

モヤモヤが最後にとれた

（熊本商科大学　経　二年　稲田数保）

講義あるいは班別討論において、何も得る事ができず少々不満を持っていました。それが、最後の最後になって、この合宿の意義というもの、人間関係というものが、痛切に感じました。それは小田村先生の講義においてです。今まで不審に思っていた頭の中でモヤモヤしていたものがいっぺんに消しとんだ気がしました。これらの経験はこれからの人生において大きな意義を持つと思います。

知らざりし友ら集り語り合ひ火花ちらしし四泊五日

第二十五班―男子学生―

いま、生まれた

（中央鉄道学園大学　業務　二年　緒方英夫）

私は今まで何と甘い人生を過ごしてきたのだろうか。友達付き合いにおいても、何と慣れ合い的だったのであろうか。又国家・天皇に対しても、何と軽薄であったのだろうか等々、今は猛省しています。

現代の人は心が死んでいる人が多いのです。私も今まで心は死んでいました。私は今からこの世に生まれてゆくのです。心の生きた人間として……。

全体意見発表をして
国鉄のうれひを語る我が心心もしまり身もしまるかな
中園君の意見を聞きて
友達の言の葉ききてハッとなり吾はづかしく赤面するなり

まぶたが熱くなる思い

（亜細亜大学　経　二年　和栗邦夫）

自分は、学園生活の中でも私生活の中でも、本当に他人の事を思って行動して来たかと言われると、かならずしもそうでは無かった。

また天皇についても、本当に国民の為を思ってこられた歴代の天皇に心がしめつけられる様な思いがして、御製を読まれた時まぶたが熱くなる思いでした。

雄大なる阿蘇のすそのに語り合ふ友との話いつまでも尽きず

講義というものに初めて感激

（九州大学　理　一年　宝辺矢太郎）

御製は、今までどうも胸にせまってくるものがなかったが、慰霊祭の厳粛な雰囲気の中で拝誦されるのを聞いていると、目頭が熱くなるのを抑えることができなかった。

講義というものに初めて感激した。特に小田村先生の御講義はすばらしかった。身を乗り出さずにはおれなかった。

「主義も体制もない、我々の胸の中に息づいているものが国ではないでしょうか」という御言葉がいつまでも心に残った。

朗朗と霊まつる声に聞き入れば心洗はれすがすがしき思ひす
大阿蘇の火口に立ちて見下せば激しき息吹きに足すくみゆく

苦難から喜びへ

（岡山商科大学　商　三年　奥原幸雅）

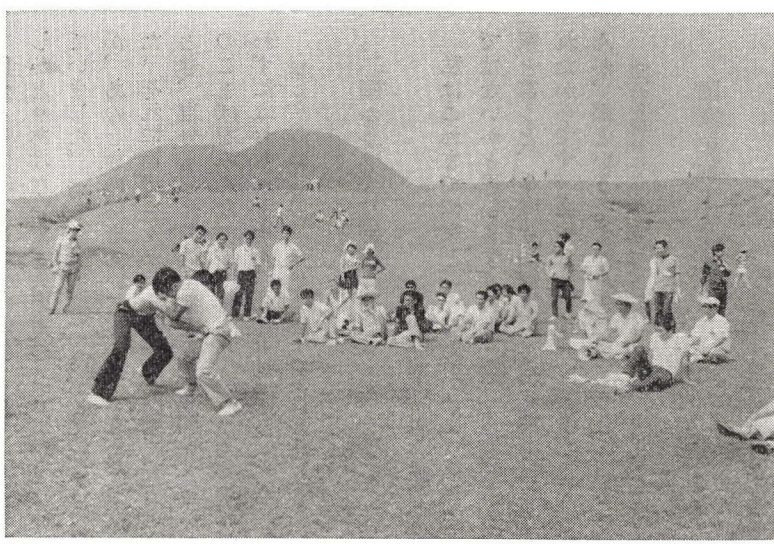
自分にとっては苦難の合宿ではあったが、終えた時点での喜びは大きなものである。皆の真剣に国を想う姿勢を肌に感じ、山を降りてからの自分の姿を頭の中にえがいてみると、今迄にはなかったものが形になって造りあげられているのを感じる。とにかく今言える事は合宿に参加してよかった、本当によかった、という事である。

我今は大なる機会を賜はりて只々天に感謝するなり
定まりし五日の日々は過ぎゆけど明日への歩みこの続きなり

国のいのちに連り得た実感

（西南学院大学　商　二年　占部賢志）

慰霊祭の中で三井甲之先生の「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」の朗詠に、祖先のいのちが一すぢにつながり流れてゐるのを痛感し、涙のわきでるのを禁じ得ませんでした。私は全身で感動したこの



草千里での中食後のひととき，まさに草相撲という所か。見る者からの爆笑も絶えない。

体験により、国のいのちにつらなり得たといふ名状し難い喜びを感じるのです。

慰霊祭にて

先達のみ霊まつらむと共々にくらくなりたる庭にゆきけり
かがり火をたきてみ霊をなぐさむる今その時となりにけるかも
祭壇をはらひ清めんとますらをの歌詠む声に涙いできつ
祭壇で御製詠みたるその声の胸に迫りて涙もよほす
先達に思ひをつげむとよみゆける師の御言葉の胸に迫れり
慰霊祭終りて神酒をいただきつのみほす時のその味のよさ
りんりんと虫鳴く音のさやかにも我が耳内に響き来りぬ

生半可の心配は吹きとんだ

（早稲田大学　政経　一年　太田伝男）

見ず知らずの人達が集まって何の共通するものをもたない者同士が討論し合う、うまくゆくかと案じていた。そのような生はんかな心配など初日から吹きとんでしまった。口数の少ない班長の言葉は自然に耳を傾けさせる力を持っております。就寝前の短い時間に友達の話す言葉の中に、心を打つものがあり、心あたたまる思いがしました。

この合宿で感じた事を思い出し思い出し心で暖めて自分のものとしてゆくつもりです。

暇あらば訪ねてくれといふ友の名刺一葉胸にしまひ込む

言はずには居られない

（長崎大学　工　一年　前田　光一）

自分としては、ここでは国のことや中国・マスコミのことしかとりあげないで、人の道のことは話さないのかなと思っていました。でも全体発表の時、酒のことで話がでてきたが、あのときの話を聞いて、心のもやもやがすっきりしました。それに緒方さんが「十年後をみてください」といわれたとき、自分も「自分の生活をみてくれ」と言いたいです。このことばをみんなの前で言うのはおそろしかったけれど、言わずにはおられません。

話したい気持はあれどなかなかにすなほになれぬおのれの心は

国を身近に感じる

（亜細亜大学　経　一年　下山映二）

私はこれまで国家というものにあまりに無関心であったのではないかと思います。国家と聞くと抵抗がありました。国家と言うと、やはり国家主義・国家権力というものが連想されたからです。今でもはっきりぱっとしたわけではありませんが、国というものが身近に感じられるようになりました。

班長の気持になりえず討論にだまりこみし我すまなく思ふ

国家を論ずる前提

（熊本商科大学　商　四年　中園俊郎）

小田村先生は最後のお話で「自分が誤っていた場合それを友に言っているような悠長なときではない」と指摘され、冷

水をあびせられたような気がしました。私は友と天下国家を論ずる前に、自分の心の中で国をほんとうに自分のこととして感じ得るよう学んでゆかねばと思っています。

五日間共に学びし友どちと今別るるは寂しかりけり
今日よりはこの友どちの暖き心忘れず学ばんと思ふ
元気でと手をにぎる友のはれやかなまなざしを見てたのもしく思ふ

第二十六班—男子学生—

ことばの重み

（亜細亜大学　経営　二年　夏山相秀）

班別討論ではあまり発言出来なかった。やはり自分の考えがまだまだ確立していないと自覚しております。

輪読で感じたことが一つありました。それは、ことばのおもみを知ったことです。

友どちの心にしみる言の葉に我のみじゅくさ知らされにけり
友どちの語りしことば身にしみて明日へのために我あゆむかな

自分にもやれる

（亜細亜大学　法　一年　菅野光秋）

御講義を拝聴し、今までの自分の考えのあまさを痛感するとともに、今の日本の現状は自分の力ではどうしようもないという絶望感をもっていた自分に、やれることがあるという

カメラ・レポート 33

はて草千里での彼女二人，なにを話し合っているのだろうか？

ことを教えてくださいました。

最終日に
合宿にて親しくなりし友どちと別るると思へば悲しかりけり
朝起きて友らの顔見て来年も又会ひたしと思ひけるかも

起こされて生まれた友情

（熊本商科大学　商　三年　徳光礼周）

一番心残りにおもった事を書きたい。それはよくいねむりをしたことだった。眠るまいとおもいながらも目を閉じてしまう。そしてこんな自分でも友や班長は起こしてくれる。こんな自分が残念で腹立たしかった。またこんなことから友情が結びあえたのも収穫ではなかっただろうか。そんな気がする。

最後の夜に
最後にて床に入りしもなごりをしみ友らとともに話つきざり
床に入り目をつぶりてもねむられずいよいよあすは別れの日なれば

感動を実行に

（熊本大学　工　二年　津田良一）

この合宿で得たことは、自分の胸に感じ、顔がひきつるくらいに感動したことには正直に進むべきだ、ということでした。この阿蘇を降りてからもこの気持ちを持ち続けていきたいと思います。

合宿を終りて友は去りゆけど我は忘れじ友の熱意を
有難き縁に結ぶ友どちとはや別るるはさびしかりけり

志ある人が多くて心強い

（岡山商科大学　商　三年　山本吉弘）

先生方・先輩方あるいは又同輩たちの話を聞いていて、今までクラブの師範あるいは先輩方から聞かされて来た数々の御言葉が出て来ることに気づきおどろかされた。やはり志ある人、現代の日本の国のことを憂い深く考えておられる人々は、この合宿に集まっておられる人たちばかりではないということに気づき心強く思われた。

流れゆく歴史の中の一しづく消えてゆくとも何か残さん

今後頑張りたい

（国学院大学　文　一年　石井孝一）

全体意見発表を聞きて
壇上に心かたむけ語られし友の御言葉胸にしみいる
つまりつつみむねのうちを語られし言の葉おもくひびきくるなり
うれしげに踏みゆく道を語られし友の言葉の強きことかな

時間におわれ想いが十分まとまりません。以前からそれなりに短歌も読み歴史や教育等についても考えていたのですが、それでも最初はとまどいを感じ素直に聞けませんでした。が、しだいに感じるようになりました。今後決意を新たにがんばりたいと思います。

第二十七班 —男子学生—

先人の後について行きたい

（熊本大学　法文　三年　金子　豊）

我々は、日本を、日本の歴史や文化・伝統を、又同胞を、暖かい真心をもって見つめていくべきだと思います。そうしてこそよりよい日本ができていくと思います。これこそが人間として正しい道であると思います。そしてその道を歩んできたのが我々の先人達であったと確信します。私は一生懸命ついていきたいと思います。

明治天皇御製を拝誦して

国のみを思ふ御心知り初めしてふ友どちの言葉うれしかりけり

政治家に成らなくとも

（熊本商科大学　経　二年　井上弘次）

合宿でつかんだことは、国のためにつくすということが政治家になって政治をおこなうことではないわけです。自分の足もとからやってゆく、この気持が大事だとおもうのです。この気が日本人のすべての人につたわれば、日本は本当に立派な国になるのだとわかりました。このわかったことが僕のよろこびでもあります。

阿蘇山の火口に立って，こわごわ火口底をのぞきこむ者等々。この間も火口底からの噴煙は，休みなく白煙を噴きあげていた。

全体意見発表の時
壇上に己が心のたかまりを友皆様に我はかたりし
泣きながら皆にうったふる友の目のいかに清けくたふときことかな
友と別るる折
友の手に力いっぱいにぎられて己が手の内にいたみ残れり

勉強の意欲が湧いて来た

（亜細亜大学　経営　三年　桑原　務）

御講義又輪読・討論と、考えを整理する間もなく五日間が過ぎました。この合宿において色々と考えさせられ今後自分なりに勉強する課題も出来ましたが、やはり今一番頭に有る事は勉強のいたらなさであります。しかしこの事にしても、合宿によって気づいたと言う事に勉強の意欲と喜びを感じております。

阿蘇に来てともに語りし友どちも独り帰らむ我もまた帰る
されど友我が心には君達の一人一人が焼きつき離れず

やればできる自信

（拓殖大学　商　二年　梶原孝司）

合宿を終えて思うのは、第一日目の心の重さである。本当に逃げだしたい思いがした。心を開いてくれたのは阿蘇登山であったと思う。三日目の夜からは溶け合って来た。四日目は一日の過ぎるのが何と早かったことか。皆と交わるのがこんなに楽しいものとは知らなかった。今のこの友情を大切にして行きたい。

これほどの緊張に果して自分は耐え得るだろうかと云う心配は今日は喜びに変わってしまった。自分でもやればできるのだ、と云う自信にすっかり変わってしまった。

心の経過を
合宿の始りし日は我が心貝のごとくに固く閉しけり
友どちに心開けと我が胸にいひきかせども固く閉ぢつる
阿蘇の山煙とともにこの悩み我が胸内より一掃しつる
悩み消えて我が胸内は水を得し魚のごとくに飛びつ跳ねつす

生き甲斐

（福岡教育大学　教　一年　西原正博）

今私の心は整理のつかない状態です。それは今まで考えたこともなかった多くの問題を知らされたからです。この一つ一つにこれからぶつかっていくことが、私の生き甲斐のような気がします。今日からは少しずつでもいいから自分の気持を直に相手に伝えていきたいと思います。四百人の友がいると思うと、なんでもやれそうな気がします。

合宿を終へ帰らんとする我がむねに四百人のこころ入りをり

耳を傾けて聞く

（長崎大学　工　一年　小林　耐）

小田村先生からお話がありました「人の話に耳を傾けて聞く」ということがどんなに難しく大切であるかを身を以て感

じました。相手のおっしゃられようとしていることがどんなことであるのかを分かるには、こころを開いて素直に聞き入ることが大事なことだと思いました。

また国家とは一体何なのか、という問題をつきつめて考えますと、体制とか機構とか制度とかいうものでは絶対にないのだ。国のいのちを感じつつ生きていけば、そこに国を守るという行為が生じるということを強く感じるとともにそれは日本人として生きることにつながるということをしみじみ感じました。本当に生きるのは合宿を終えてからだと思います。

むねひらき素直にのぶる言の葉におのづと頭たれてくるなり
友どちの感ずるままを聞きをれば我はただただうなづきにけり

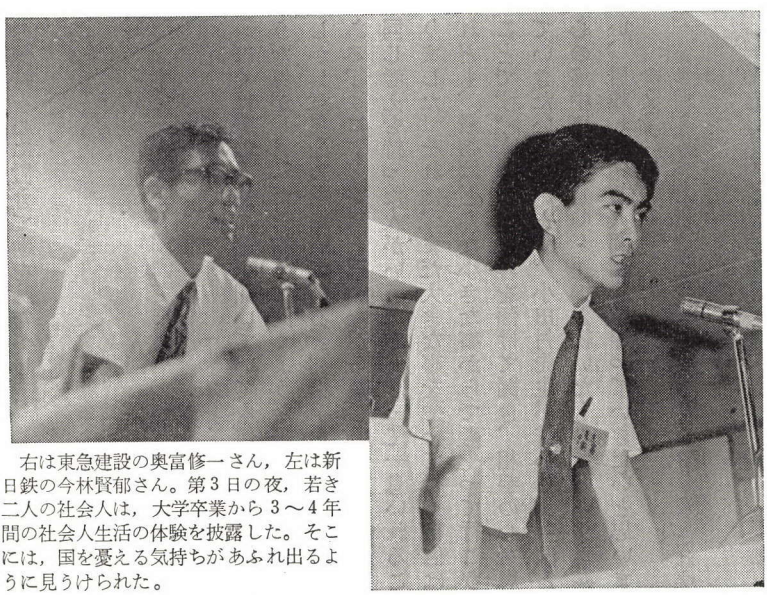
第二十八班—男子学生—

最終日に救われた

（長崎大学　経　四年　木下文雄）

班別討論においてある班員の疑問にどうしても答えることができなかった。お互い相通じるものを持ちながら国というものが解ってもらえないことほどつらいものはなかった。最後の日の小田村先生の御話の中に班別討論の縮図と、どうしても理解できなかったものを発見できた。それは

多くの人が「国家権力が悪だ」とか「個人が国家に規制さ



右は東急建設の奥富修一さん，左は新日鉄の今林賢郁さん。第3日の夜，若き二人の社会人は，大学卒業から3～4年間の社会人生活の体験を披露した。そこには，国を憂える気持ちがあふれ出るように見うけられた。

れる」という先入観をもって話してるんじゃないか。そうじゃなくして、考えるべき国家とは、政治権力とは関係ない、我々が生きて生活している国である。我々の祖先が互いに集まり共にはげみあっていこうとするのが大きな和となってできたのが、国である。

という御言葉である。

いままさにわかれて行かん時になり語りしことのなほ足らざりし

一人ではない

（亜細亜大学　経　四年　富沢君夫）

国家を論ずる時、とかく観念的になりがちな班別討論であったが、自分が生きている国、家族と共に生きている国、自分の心の中にある国、と考えた場合、そんな観念的な話は自分には何の価値も持たない事を確かめ得た。

自分の思いを話すことが出来たので、苦しくもあったがそれ以上に喜びを感じた。心を一点に集中する事により友との連帯感を感じ得たし、自分のやっている事は一人じゃないんだという気持ちが今後の生活の支えとなるだろう。

さらに歩み行かん

（中村学園大学　家政　三年　三角浩之）

友よ　師よ　異国より来れる民よ　親を思ひ　国を思ふ　今はもう別れんとする　我ら身は別れ行くとも　共に語り共に得たるものをもちて　さらに今より歩み行かん　この気持を心に置きて歌を詠むべし

全体意見を聞きて
心してすまぬと語る我が友に真にすまぬと頭下れり

小さな事でもやって行く

（九州大学　工　一年　末次直人）

ぼくは班の人達の話を聞いていても何かついていけないような気がしました。初めて聞くような語句にも恐れました。しかし意見発表を聞いていると、相手を思う気持がここにもある、ここにもある、と思いながら羨しい気持を覚えました。同じ考えを持った人がいるなあと思って一息いれることもありました。それは、まだ大きな事をやって行く自信はないけれども、最初はどんな小さな事からでもやって行こうということです。人の話には耳を傾けて聞き、相手の心を思いやっていきたいと思います。小田村先生が言われた「国とは人の心の集中されたものが連綿と続いたもの」という言葉を思い、信頼しあえる人間関係を作っていきたいと思います。

夜の集ひ
お世話になりましたの歌声に先生たちはぎこちなくとまどほれけり

日本人としての自覚

（亜細亜大学　経　二年　本多一也）

合宿に参加して日本人としての大切なものを教えられた。それは何であるか。戦後の現代に教育された自分にとって、日本人としての自覚というものが何故か遠く置きさられていた様に思われる。自分にとって日本人のあるべき心がわかった様な気がする。

全体意見発表を聞きて

壇上に上りたる友よりありがたうときけばわが胸にその声こだます

国歌を大声で唱った

（慶応義塾大学　法　二年　森　博重）

最後の夜に

かへりみていと口惜しと思ふのは多からざりし我の言の葉

夜もふけて消灯の時も過ぎたれど語り続くる最後の夜かな

最初の開会式で驚いたことは、国歌を皆大声で歌ったことである。日常の生活において国歌に接することはあまりない。しかし世界各国で自分の国の国歌や国旗を愛さない国はあるのだろうか。国歌を聞いて驚いた自分がおかしいのだ。

和歌の創作も良かった。うまくあらわそうとか、いい作品にしようとかいう気持が入ると、その和歌は心ないものとなることもわかった。

我々は日本人である

（岡山大学　法文　一年　中島裕樹）

第3日目の最終行事は，亡き祖先たちのみ霊をまつる慰霊祭。暗黒の屋外には阿蘇高原の夜露がしっとりとしていた。祭典が厳粛に行なわれたあと，「なおらい」のお酒が，ホンの一滴ずつくばられた。彼女も，このぐらいなら，とうれしそうにいただく。

勝負がついたのは、最後の小田村先生の「合宿を顧みて」の講義だった。勝負がついたというのはおかしいかもしれないが、そういう言葉がぴったりする。

我々日本人にとって国家は日本であり、そこでは我々は日本人である。唯それだけ。体制・主義・主張そういったコザカしいものを超えた不可侵のもの、自分が日本人である限り凡てはそこに根ざしている、という当り前な、しかし重大な真実を観ることが出来た。それまでもっていた一切の邪念は、一瞬に消え去った感があった。

壇上に声をつまらせ絶句する友の顔を見得ず目を伏せにけり

理解して欲しい

（熊本商科大学　商　二年　浜崎重吉）

一人合宿の途中に去りし友に

我は今君を追ひて話したし君の苦しみ慰めんがため

私が思っていたマルクス主義と、この合宿の講義で話されるマルクス主義の内容があまり差が大きすぎる。私は自己について主体性、人間性、特に私自身のやさしさや悲しさなどの人間性を追求してきた結果として、マルクス主義を肯定してきた。今もその気持はかわらない。

邪心を恥じつつ

（西南学院大学　経　一年　田所保雄）

師の言葉胸ををどらせ傾聴し目が熱くなりうつむきにけり

最終日小田村先生の御話の中で一番頭に残っている言葉は「我々は日本人だ」。天皇制を批判する前に天皇の生き方を学ぶべきであると自分も思いました。今までの日本を正しく導いて来たのは、中間層や下層の人々が、立派に日本のことを考えてきたからである、と言われたことにも感銘し、「自分は尊敬されたいが故に有名人になるのだ」という邪心を持っていたことがはずかしく思われます。自分には大した力もなければ財産もないが、生きがいとは「生命あるものに自らの命をささげることである」と教えられたことを胸にとどめ、今から精一杯生きてゆきたいと思っている一人の学生です。

第二十九班—男子学生—

日本人らしい教師になりたい

（長崎大学　教　二年　鈴木志郎）

松陰先生はあれほど激しい政治運動をやられました。そしてその心の底には、きびしい人生追求があり、日本人としての誇りが脈打っていたと思います。小田村先生が最後に、小乗的生き方と大乗的生き方について話されましたが、明治維新を成し遂げた志士は実に大乗的な生き方をした人々でした。本当に国を思う心があって初めて維新を成し遂げたのです。

この日本に生きている事を無上に嬉しく思います。そう思うが故に、もっと国を思い、そして日本に尽くしたいと思います。祖国を思いつつ亡くなられた英霊に対し、恥ずかしくない生き方をしようと思います。

自分は将来教師になります。教師の道はもう始まっています。戦後の教育によって日本を知らされなかった我々です。より良き日本人教師となりたい、それが、自分の悲願とも言える心からの叫びです。

（大阪大学　文　二年　草地芳孝）

五日間が過ぎて

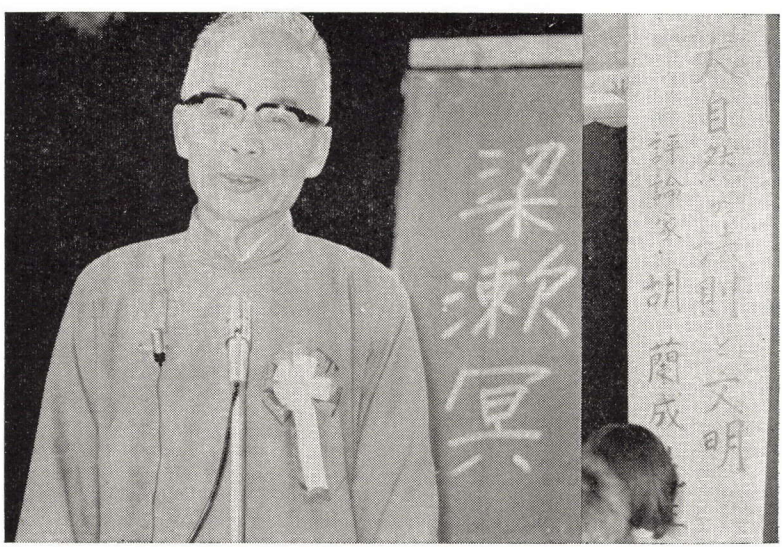
阿蘇のもとつどひし友と五日間共に語りぬ今やわかれん

自分ひとりで書物から取り入れたものと実際の行動のなさとが形作っていたやや厭世的な考え、それと漱石の「それから」の代助の父に於ける「理想」のなさということを、批判される。そして行動的な哲学の必要性を感じそれを求めていこうと考える。

（立教大学　経　二年　青木　修）

今後の課題

共産主義の問題やマスコミの偏向について、今まで考えていたことが根底からひっくり返されたかのようだ。この中で素直にまちがっていた所は改めたい。



第4日目の午前は，戦後かなり日本に生活しておられる胡蘭成先生の「大自然の法則と文明」と題するご造詣の深いご講義であった。人類の在るべき姿を求めてのお話は，次頁のカメラ・レポートに見る聴講者の顔や目付きにもよくうかがえる。

これからもせねばならないことがたくさんあることを知った。でもあれもこれもやろうと思っても無理である。だからただ一つ「共産主義の問題」についての疑問を解明し超克して行きたい。

もっと考えて行きたい

（中村学園大学　家政　一年　武藤嘉彦）

合宿に来る前のことを顧みると、自分なりに人に善意な行為をしていると考えていたが、しかし今日の自分は、前の自分よりももっと他人のことを学び取った気がする。

世の中の形かはれどわが心たえず身の奥友を思はむ

活々としたもの

（下関市立大学　経　四年　幸尾兼次）

大学生活を虚無感又は空虚心の中で過ごして来た僕は、普通友だちとは語り合えない話題を同輩の人たちと語り、残り少ない学生生活にも又国民生活にも、自分というものがハッキリ位置づけられていくような気持がし、これからの生活に活々としたものを吹きこんだような気がします。

晴れ渡る阿蘇の裾野を見わせばいつしか心悠然となる

深く迫ったもの

（熊本大学　法文　一年　荒木保光）

初めて参加した自分であるからといっても恥ずかしいくらいに、頭の中に強くハッキリと残るものがありません。しかし大学生活の数カ月において、ましてや三年間の高校生活においても、自分があるいは他人が、これほど深くせまったものを聞いたことがありません。ただただ今までの自分であってはいけないと思うばかりです。

苦しくも過しし日々に得しものは心に残れひとつなりとも

日本の歴史を断ち切ってはならぬ

（国際経済大学　経　三年　根岸正幸）

「理論上納得してもそれは仕方ない」ということが実感として感じられます。

大東亜戦争を反省するにつけても、戦争は二度とおこすまいとか個人の自由であるとか、それは反省にも何にもなりはしない。

理想社会を想うにつけても、過去の歴史の中にるいるいと積み重ねられた尊い御霊の中にこそ、真にすばらしい日本の命が感じられます。

新しい価値観などで我々の日本の歴史を、そのよりどころを、断ち切ってしまえるものではない。そうしては絶対に駄目であると痛感せられます。「古今ニ通ジテ謬（あやま）ラズ」これはこの合宿に参加して一つの確信となったところです。

第三十班 —男子学生—

世のために真に役立ちたい

（熊本大学　法文　二年　白浜　裕）

この合宿で得たものは、すぐ行動に結びついて実効的な力とはなり得ないかも知れませんが、今後合宿を重ね、また友達と共に勉強を重ねて行くうちに、しだいに蓄積されて真の力強い信念となって、世の中のために役立つことを信じています。

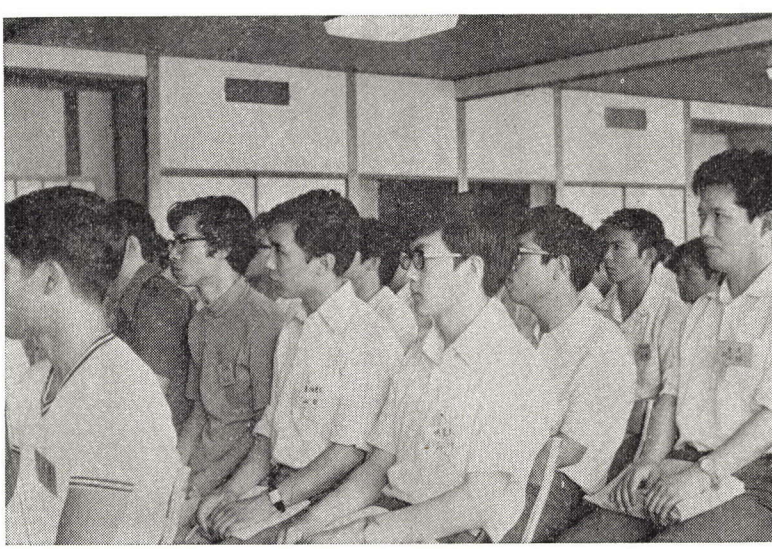
そのためにも、ここで学んだ事を一つ一つ大切にし、感動をその場限りにすることなく、日常生活の中での地道な努力を第一にし、研さんを積み重ねて行きたいと思っています。

一点をみつめつつ感想をのぶる友のおもわは紅く染りゆくはや
来年もきっと会はむと約束する友の眼の輝きてをり

僕は日本人だ

（慶応義塾大学　法　三年　重松賢一）

「僕は日本人だ」と言われた小田村先生の言葉を、胸をはって言えるように修業を積み重ねてゆく覚悟です。何々主義とか何々派などのような言葉に惑わされることなく、人間のおおらかさ・のびのびとしたところを捜し求めたい。それに



レポート37で書いたように胡蘭成先生のお話に聴き入る男子学生たちである。

はやはり父祖の足跡を辿ることが近道と思います。

講義を聞きて
厳しくも語り給ふか師の君の面には汗の吹き出して来て
我が胸に深く刻まむ師の君の「僕は日本人だ」てふその御言葉を

心が通った

（駒沢大学　法　一年　村端圭二）

初参加だったために、中間感想文では不満ばかりを書いてしまったので今思うとはずかしいばかりです。

前半の講義を聞いて「右翼か」という印象があったためかなぜかすなおになれなかった点もありましたが、小田村先生の熱心なお話に頭のさがる思いがするとともに、先に講義をなされた諸先生にあやまりたい気持でいっぱいになりました。

最後の夜のつどいでは、全部の人たちと心が一つになった気がして大変感動しました。

暑さをばふきとばさんとこの部屋に集ひし中に我も歌ひけり友の歌に
拍手をうつ手もあつくなりそのあつさよりあつきもの感ず

初めてだったので

（福岡大学　法　四年　早野好典）

初めての参加ということで、言われる事をすんなりと入れるまでにはいたらなかった。

提起された問題に対して、自分なりのしっかりした考えをもたなかった私に対して課題を投げかけてくれたのが、この合宿だったと思います。

初めての経験いかすも殺すのも今後の我の在りかたしだい

初めてだったが

（亜細亜大学　経　一年　佐藤文彦）

名も顔も知らなかった人が友となり別れを惜しむかの様に思われます。僕はこの機会を利用して交わりを深め、そして自己というものを改めてかえり見、進歩するように歩みたいと思う。今回だけに限らず又参加したいと思います。初めてですが、それだけに良い体験となったと思います。

名も顔も知らざりしかど心とけ別れのつらさわきでてやまず

圧倒された

（亜細亜大学　経営　二年　渡壁勇三）

正直いって疲れました。多くを語ることはできませんでした。しかし真剣にやったつもりでした。ところが全体意見発表のとき、泣きながらの意見・とことん考えぬいた意見・又ギャルポ君の真剣なまなざしに、私はあっとうされました。自分の考えの甘さを思い知らされました。

ステージを指さし示し我を見る皆の笑顔に疲れわするる

疲れと充実

（熊本大学　教　一年　池田辰男）

疲れた。

この五日間というものは、ぼくにとってこれまでの大学生活というものを、一ぺんにふきとばしたような充実したものであった。

ぼくたちにうったえていらっしゃる諸先生方のまなざしはわれわれ若者以上にはりつめたいきいきした眼をしていらっしゃるにつけても、ぼくの心の中に深く響きわたるものを感じた。これからは、ここで学んだことを反省し考えてみたいと思う。

まごころ

（鹿児島大学　理　二年　梯（かけはし）　祥郎）

全体を通じて学ばされた事は、ものの誠と人の真心を知るということでした。先生方のその一言々々にそれが感じられましたし、特に小田村先生の御講義をお聞きして、歴代天皇の真心を知るということにも大きな意味を感じました。よそよそしい生活に一区切りをつけて、真心をもってまわりの人々と接していきたいと思います。

師の面にくもりは見えでうったふる真心のみぞ伝はりくるなり

胡蘭成先生は，旧知の熊本大学名誉教授松本唯一先生がこの合宿を参観されておられるのを知って，大変に喜ばれた。胡先生のお隣りが松本先生，向い側は小田村先生。

第三十一班 ―女子学生―

明るく大らかに

（鹿児島大学　教　三年　小山さよ子）

昨年初めて参加させていただきましたが、今年はまた違ってずっしりと重みのある日々でありました。特に小田村先生のお言葉は、物事の何が一番重要なことかということを、自分の心に問い返してみなくてはならないなあと思いました。明るく大らかに生きていきたい、心は大きくありたいと思うことでした。

慰霊祭も素晴しく、祖先の霊もなぐさめられたことだろうと思いつつ、これからの日本を立派に守り育てていく人間になることを誓ったことでした。

違う意見も尊重してほしい

（明星大学　人文　四年　尾形真理子）

共産主義の中に育っている者の中にも、自国のことを真に思っている者もいる。このような人達のことはふれずに自分の思想に合った者のみの意見を、あたかも共産主義の真只中にいる者の叫びのように伝えることは片手落といわざるを得ない。違った国の在り方を考えている人達の意見も尊重してもらいたいと切に願う。

心が通じるのが人間

（長崎大学　薬　三年　中野陽子）

すばらしい友にあつたということより、友に話すことの尊さ、本当の語らいを知った。真心の通じあうのが人間なのだから。

この合宿を終えて、素直に清く明るく生きていくことを心に誓いたいと思う。

夜をふかし語りあひたる友だちは誠の道を教へてくれぬ

めぐりあい

（鹿児島大学　教　三年　村山紀子）

この合宿ではじめて人らしき人々に巡り合った気がいたします。この世の運命のお導きに感謝いたしております。

夜、友が苦しみを話している中で、必死になり友の苦しみを考えていた自分に気づき、自分というものの発見をしたことです。ああ私にも天命・天の意志が働いているなあという事です。天からの大きな使命に気づいた事です。

壇上に涙につまり話す友ともに生きなむおお大和のために

言葉にあらわせない

（鹿児島大学　教　二年　山下律子）

感想は山ほどあると思っていましたが、言葉にあらわせないのがもどかしい思いでいっぱいです。諸先生や班のみなさんの真剣な御気持は一番心に触れました。本当にありがとうございました。

「ひとりじめするな」

（熊本短期大学　二年　長野直子）

私はマルクスをそれ程理解しているわけではないのですけれど、マルクスのいいたかったことも結局「ひとりじめするな」ということだったと思うのです。「ひとりじめする」という発想の中からは私たちの理想とするものは何一つ生まれてくるはずはないと感じます。

「君が代」はすばらしい、日の丸の旗は美しい、天皇の御歌には涙がこぼれます。でもだからといって私にはマルクスを批難することなんかできません。

わかったふりをしていて

（明治大学　文　二年　野中正子）

来たときと今の、気持ちの違いにびっくりしています。私はかつてこんなに強く日本という国を、そして日本人であることを意識したことはありませんでした。真剣に考えもせず取りくむこともしていないのに、さもわかってるかの様にとくとくとしゃべっていた事への反省。日本は国民一人一人が

第4日目，大学教官有志協議会の諸先生，わずかの時間ではあったが，次々にご登壇くださって温いお心を示してくださった。

（右）岡　昌宏先生（広島商科大学教授）
（中）山口宗之先生（九州大学助教授）
（左）宮司佑三先生（鹿児島大学教授）

築いていくのだと言う責任。本当に目覚めた思いです。

小さなことからでも

（日本経済短期大学　一年　光本智恵子）

初めのころどうしても反発を感じてしまった。何となく思想的なものをおしつけられているようで……。しかし日がたつにつれて先生や先輩方の心がしみじみと感じられてきた。

最後に全体意見発表では、何度か涙が出てくるのをおさえられなかった。でも私には大きなことはできそうにないので、小さなことからでも日本の国を思う心を表わしていきたいと思う。

全体意見発表をききて
我が友の涙声にてうったふるその言の葉に我はうたれぬ

心から話し合えた

（女子美術大学　絵画　一年　辻　宙豊（なかとみ））

友達と心から話し合える機会をもてたことを感謝します。又、親を尊敬することの大切さを教えていただいてありがとうございました。

とにかく勉強したい

（熊本大学　教　一年　田中千鶴）

私は自分の生きるべき姿を見たような気がします。それはまだ具体的にはっきりしたものではありませんが、合宿終了後も週例会を開くことも予定されたことですし、来年もまた開かれる時には馳せ参じたいと思っております。これからとにかく一生懸命勉強せねばなりません。

第三十二班―女子学生―

生きている喜び

（鹿児島大学　教　三年　内山なな子）

日本人として生きるよろこび、東洋人として生きるよろこび、日本の国に生まれてきているよろこび、私を誕生させて下さった祖先をいただいているよろこび、天皇陛下を上にいただいているよろこびは、なにものにもかえがたく胸のうちを占めております。これはいのちのよろこび、大きな一つのながれにつながるよろこびとして、永遠につきないものでありましょう。このよろこびを伝えることこそが、教育の柱になるべきものではないでしょうか。教師への道を歩みつつある自分に、常に問うてきたことが解かれた気がします。

みなともに生かされてゐるよろこびは歴史につながる人のみぞしる
おほいなるしぜんの道につらなりて生くるよろこびただただあふるる

これならやって行ける

（熊本大学　教　三年　山本圭子）

川井先生の御講義の最後に、「精神性の回復、瑞々しい情緒を持つことこそが、共産主義の超克になるんだ」とおっしゃいました御言葉に、「これなら私にもできる」とうれしくなりました。

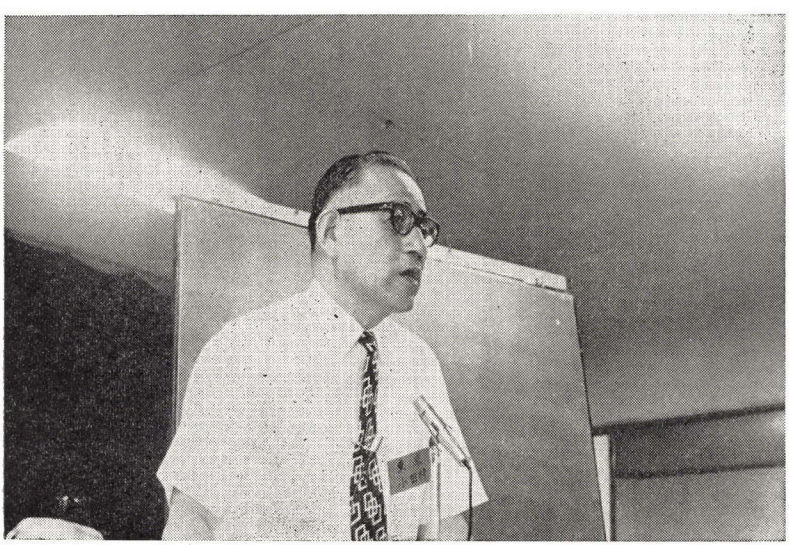
スリッパをそろえること、あいさつすること、お年寄りの方を大切に思う気持ち、一つ花もじっとみつめる心、又感謝の気持ちをもつこと、そういう小さなことだったら、私にもやって行けます。又将来教師になった時に生徒へ伝えて行けます。

ペマ・ギャルポさんのお話を聞きて
チベットのことば使へずとうったふるうまき日本語聞けば悲しき

古典の読み方を学んだ

（成蹊大学　文　三年　開　由紀子）

今まで古典を読む時には辞書を調べ口語訳にして理解するのみで、それでも「私は古典を学んでいるんだ」と思い込んでいましたが、それは単なる作業にすぎないことを知りました。先生もいわれたように、「求道」という言葉も、頭で考えると「道を求む」だとはわかるのですが、それは辞書でわかる単なる知識であって、当時の心情をくみとらねば「読んだ」



第4日目の午後，この合宿教室での最後のご講義は，国文研理事長の小田村寅二郎先生の「人間本来の心を取り戻そう」であった。

とは言えないと思います。講義の中で「小林秀雄の『野原にすみれの花が咲いている。それが〝すみれだな〟とわかるともう見ようとしない。その花を〝すみれ〟という概念におきかえてしまうのだ』という言葉」にハッとさせられました。頭の中で形をいったん作り上げてしまうと、もうそのものの姿を見ようとはせず、心には感ぜられなくなると思います。

御製をよんで行きたい

（九州大学　歯　三年　畦森雅子）

昨日今日と小田村先生が天皇陛下のことを話されるのをお聞きしてとても感動しました。

今まで天皇陛下のことについて考えているつもりでしたがそれはただ天皇政治というものについて考えていただけのような気がします。〝体制などは問題じゃない。問題なのは心だ〟とおっしゃったのがとても心に残っています。もっと天皇陛下の御心を知ることができるように、天皇の御歌を読んでいこうと思っています。

国を思ひ声はりあげてのたまひし師の御言葉に胸うたれたり

感動することのすばらしさ

（福岡女子大学　家政　二年　有馬節子）

一番強く印象に残ったのは、人のいうことを素直に受けとり感動できるということが、どんなにすばらしいことであり、それこそ我々が人間らしい生き方をしていくのに重要不可欠のものである、ということを学び得たことです。今までの生活の中で、友達と話し合いをしてみて居づらくなるという感じまでしていたのは、自分の方にこそ問題があったのだ、相手の立場気持ちになって共に考えるならば、決してそのような異和感など感じるはずはなかったのだ、と考えられるようになりました。

又、歴代の天皇の御歌を通して、古くからの和歌というものが、いかに日本人の精神のよりどころとなっていたかを知ることができたということです。

日本の国土で生まれ、日本の伝統・日本人の魂というものの中で育ってくることのできた自分を感謝したいという気持が今はしています。

いにしへの人のこころのかくまでに我の心にしみ入りくるとは

今林・奥富両先生のお話をききて

我こそと思ひあがりしみづからをただはづかしと覚ゆる今かな

内に湛える

（法政大学　文　二年　中村裕子）

小田村先生の「苦しいと思う心・感じは、むやみに外に出すのではなく自分の心の内にたたえなさい」というお話は、何でも話してしまい、自分の心にとめて深く考え苦しみに耐えることができない自分の心を見ぬかれてしまったような気

がしました。短歌創作は、自分の気持が無意識に出て、すなおに自分の心を開くことができない、ということがはっきりわかりました。折りにふれて、すなおな気持になれるように短歌を作っていきたいと思います。

友人の指摘に心みがかれぬ友思ふ心に深くうたれて
山を降り下界へくだりもどるともこの感激を我はわすれじ

前途の不安

（日本経済短期大学　一年　佐藤洋子）

最後の日を迎えて大きな不安を感じたのです。学んだことこれを自分一人の心にしまっておくことは残念なことだからです。でもどう説明して納得させるか考えつかないからです。自分の学びの浅さをみせつけられ、十八年間何を考えて来たのか反省させられてしまうのです。

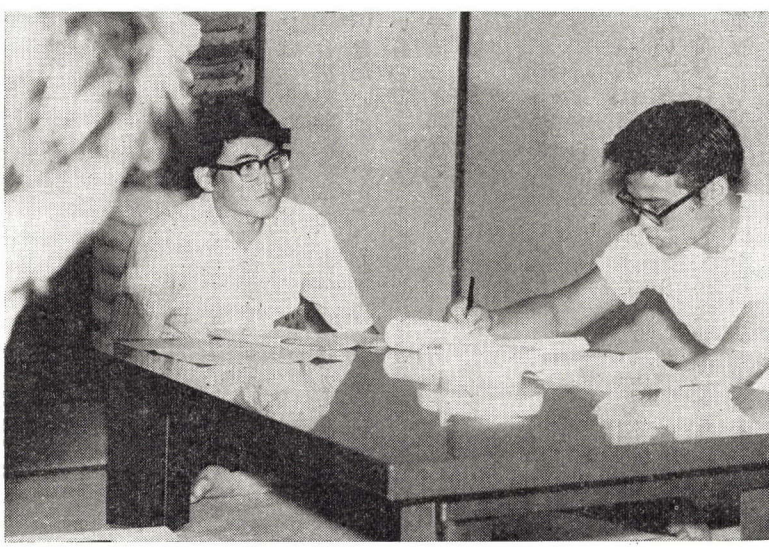
今の私には諸先生方ほど熱意をこめては話せません。でも日本の国がすばらしいということは、自信をもっていえるような気もします。

先生の強き御言葉聞くたびに我の学びの浅きに気づきぬ
我が胸をわかちあひたる友なれば心の違ひ打ち明けにけり
胸内をわかちあひたる友なればまた会ふ日まで我忘るまじ

心に残った講義

（駒沢大学　法　二年　榎園シゲ子）

心に残った講義など述べて見たいと思います。



小田村先生のご講義のあとの，これもまた最後の「班別討論」の時間は，一人一人の眼光にも鋭さが増していた。

小柳陽太郎先生の輪読導入講義はまさに私の心に残った一つです。

川井先生の講義を聞いて、一人一人が立ちあがっていかなければいけないなあと感じています。

「精神面の回復とは、先づ自ら内心を凝視しそこに湧き動きつつある自然の情緒をしっかりとつかむことである」この言葉がなぜか忘れる事が出来なかった。

五日間友とかたりし阿蘇の地をさりがたくしてなみだぐむなり

素直でなかった反省

（鹿児島大学　教　一年　川井治子）

感動するということ、それを素直に表現するということができなかったということが悔やまれてなりません。私は常に皆から一歩さがってながめている、といった状態が最後までつづいていました。全体意見発表の時でさえ、感動しているにもかかわらず、ことにさらに押し殺してしまっていたように思います。

真剣に語りかけくる友どちに心ひらかぬ我かなしきも

第三十三班―女子学生―

友達に伝えたい

（玉川大学　芸術　三年　佐原深雪）

真剣に一途に心尽くして生きている、又生きようとしている人々を身近に知り得た事で、こみあげてくるものを感じずにはおられません。

合宿で学んだこと、自分の信じるところを行動に生かしていきたいと思います。と同時に、身近な友達に伝えていきたいものです。もっと心尽くしてまわりの人々の気持ちを思いやることに心がけていきたいものです。

国民をただ一途にと思はるる天皇（すめらみこと）の御心をおもふ

暗中模索

（長崎大学　教　三年　山村和子）

「私はなんにもわかっていない」「私は何も身についていない」ということがわかりました。

自分には〝感じる心〟がないんじゃないかと思われます。実感としてわからないから、ひどく始末が悪い。和歌を作ったけれど、あとの心が晴れなかったのです。全く暗中模索の状態です。でも阿蘇に登って久しぶりにスケッチをしたこと

が小さな灯になりました。

私なりに努力

（鹿児島大学　法文　二年　上原美香）

今日の全体発表と小田村先生のお話で、私の心は感動でいっぱいになりました。真心のこもった言葉というものが、これほど人の心を打つものだということは、思いもよらぬことでした。自分の心をありのままに素直に語りかけない限り、心の結びつきはできないものだ、ということを深く教えられました。山田先生の「国というもの家族というものは、どうしようもないものなのだ」という御言葉に「ああ自分は日本人なのだ」という強い思いがこみあげてきました。それはたとえようもない感動でした。

学んだいろいろのことを、ただわかったとか共鳴したとかいうだけでなく、自分のものとなるように努力してゆかねばなりません。でもそれは考えただけでくじけてしまいそうです。でも、懸命に生きておられる先輩の方たちが現にたくさんおられます。そういう先輩の方たちに近づくよう私なりに努力していきたいと思います。

せつせつと語りたまへる師の君のその御心に我は打たれぬ

自分のことに気がついた

（桜美林大学　英文　一年　上野　薫）

第4日目の夕方近く，ここに参集した400名は，地域別に分れて，地域事情に応じての，今後の協力活動，サークル活動の打ち合せを行った。

八日までの私の感想について「自分なりに感じた何かを得てもらいたい」とアドバイスされました。自分なりに正直な感想を持ったつもりだったのに……。でも今それが何であるのかがわかったのです。

恥ずかしいのですが、今朝の全体意見発表があるまでは、私には強く感動したりする余裕がなかったのです。今朝の意見を聞いてひどく感動させられたのです。それぞれの感想がじーんと響いてきたし、皆が親しい懐しい人たちに思えてきたのです。この気持なのだと思います。今まで正直なつもりでいたけれども、自分に壁を作っていたようです。嬉しいのはそういう自分に気づいたこと。

そして、充実した生活であったという感想を今持てたということ。

ペンではうまく表現できないけれど「他に対する思いやり」というものを大切にしていきたいと思っています。

人を思う心を支えるもの

（明治大学　文　二年　鈴木典子）

これまで私は、私なりに人を愛してきました。しかし「私なりに」という言葉でしか人を愛せなかったのです。真実の「人を思う心」これこそ私に欠けていた最大のものであり、日本人ひとりひとりがもってしかるべきものでありましょう。そこでもう一つ痛切に感じたことは、我々が真実の「人を思う心」を支えているものは、まさに古来からの文化であることです。このようなことは一度も考えてもみませんでしたし、教えられもしませんでした。それだけにこの発見は、新鮮でありこれからの生き方に影響してくると思います。

友と別るる折に
夜ふけまで語りあかしし友どちの顔を心に刻みこめたり
いつの日に友と再び逢ひうるかと我の心は沈み入るかな

心をよぎるもの

（熊本大学　教　二年　新小田昭子）

今、五日間の合宿が終ろうとしている。心をよぎるものを並べることしかできない。○始めて多くの人間との共鳴の体験○諸認識のし方の方向変化と拡大○心に残った言葉「真実とは命のつきるまでぶつかっていくもの。本質の響き」

最後の感想文を書きし後に
ふと見れば小さきカエル草のまに保護色呈しうづくまりけり

まだこれから

（佐賀大学　教　一年　多久島幸世）

頭でなく心の底から言うこと、信念を持つということ、の真実の意味を感じました。しかしこれが今日の全体意見発表のムードに酔っているせいかもしれない。恐らくそのほんの一端をつかんだだけだと思います。まだまだこれからだと感じています。

この様な友達関係をつくりたい

（法政大学　社会　三年　忽那君枝）

学校の友達とは授業中毎回会っていても、なんとなく表面的なつきあいに終わってしまいさびしい気がしなくもない。

なぜだろう、まるで知らない者同士が集まって数日を経ずして、何かつながりのようなものを感じるのは。

ここに参加する人達が何かを求めてやってきているという事、少人数で話し合いのできる雰囲気だという事、その他に何か……。

自分のできる範囲から、この合宿のような友達関係をつくって行きたいと思う。

合宿の最後の夜に友達の噛むピーナツが心にひびけり

交換ノートの約束

（鹿児島大学　教　一年　栗原淳子）

五日間、漠然としていたものがますますわからなくなりました。しかしきよう全体意見発表を聞き、もやもやとしたものが少しだけ晴れて来たように思います。

ふりかえってみると参加する前の日まで、私も自分でものを考え判断するという事を怠っていた様に思います。国家の事についても、昔から伝わっている日本人の心というものを含んでいる事を忘れていました。

第4日目の晩には，お待ち兼ねの全体コンパが開かれた。アサヒ・ビールから全員に贈られた缶入りビールを手にして，わずか一缶ずつのアルコールは，4日間の緊張を一気にほぐした。

そしてもう一つ、口先では私も「心からの話し合いを」とか「真実の友を」とか言って来ました。でも四五日起居を共にしただけでありのままの自分をぶっつけられたのは初めてです。これからは心の中のもやもやを自分なりに晴らしていくように努力して行こうと思っています。ここで生まれた友情を交換ノートで育てていこうと約束しました。

とぎれがちに思ひを述ぶる壇上の友のことばに涙流しぬ

第三十四班—女子学生—

古典の読み方を学んだ

（上智大学　文　三年　重松智子）

御講義の中で最も感銘を受けたのは、古典に対する真の姿勢についてでした。

「書いた人の心を憶念しながら読まなければならない」

「書を読んでいる時、実際にその著者と対坐しているようにおもえなければならない。それは昔と今とが時代を越えて結ばれることだ」

「古典は荒いきびしい文化、時代の波を越えて今日に到ったものなのだ」

とおっしゃった小田村先生のお言葉に、自分はいままで真に本を読んだとはいえないと思いました。これらのことを実行してゆくのはむづかしいことですが少しずつでも努力してゆきたいと思います。

全国ゆつどひあひたる友らとの別れの時は近づきにけり
五日前は見知らぬ人でありけるを共に学びし友とはなれり
感想文書き上げんとする班員の一人一人の顔をながむる

厳しくも温い言葉が有難かった

（鹿児島大学　教　三年　田畑裕子）

「私は日本人であります。そしてそれを誇りに感じております」素直になるとはこういう気持ちを言うのでしょうか。この一言に何故ためらいを感じていたのでしょう、二十年もの長い年月の間。良き師良き友とのめぐりあいが私の態度を大きく変えました。

友への憎しみ、師への反感が私を襲い、その度に考え悩み苦しみました。「あなたの言葉は私には通じない」「心が狭い」との厳しくもまたあたたかく見守ってくれる友のこの言葉は、どれほどありがたいものだったことでしょう。「良き友になるには無私になることね」と友は申します。私もそのように思います。

我が友らと共に手をとりみずみずしく生きてまいります。憂うべき現状を建て直しますには〝相和すこと〟と〝みずみずしい精神生活を送ること〟以外に道はないことを知りました。

得た最大のものは「友」

（福岡女子大学　家政　一年　高井良泉美）

この合宿に来て友達が真剣になって話してくれるので、私もそうしなくてはと思い、でるきだけ素直に表現しようと思いました。でも言葉にだすと、何となく違うみたいな気がして、いかにむずかしいかを知りました。

合宿でいろんなものを得ましたが、最大のものは友達です、話しあえる友達です。

再会の約束すれど友達と別れるつらさ胸につのりぬ

去った友を思ふ

（日本経済短期大学　二年　中島美穂子）

意見発表のとき、まよっていましたがついに手を挙げてしまいました。友人が、と言うより仲間と言う方がピッタリなのですが、その友が私達が知らない間に帰ってしまったことがどうしても耐えられないものであったからだろうと思います。語り尽くすことなく去った友、もう少しいてくれたらと思ったりもします。

閉会式にのぞんで

君が代のしらべとともにわが心いつしか願ひ一（いつ）になりぬる

ある男子班のハダカ踊りは，オヘソの上に1文字ずつ，つづけてよんでみると「み・な・さ・ん・げ・ん・き・で」とあった。大爆笑の渦がまきおこった。

心が広がった

（長崎大学　医　二年　松本智子）

全国に、自分と同じ道を求めている友がいることを知ったことはよかったと思うしはげましにもなりました。また、すなおな心の人と接していくことがこんなにも気持ちよいことなのだなあと思いました。そして最後に小田村先生の話をお聞きして、心が大きく大きく広がっていくような気がしました。

すなほなる心もちたる友どちの言の葉きけばうれしかりけり
大らかの広き心もてこれよりは求めてゆかん敷島の道

聞いてくれたのが嬉しい

（玉川学園女子短期大学　二年　横山久美子）

はっきりした目的も持たずに参加した私ですが、つたない私の言葉を友は耳を傾けて聞いてくれました。本当にうれしいことです。

ここで学んだことは、班の人達の何かを追求しようとする姿勢でした。今の私にはその真剣さが欠けていました。

ぜんぜん知らなかった者同士が、昔からの友とかわらぬようになりました。この出会いを大事にしたい。

友だちが歌へる歌は様々にお国なまりの楽しく聞ゆ

第三十五班―女子学生―

素直になる迄の苦しみ

（鹿児島大学　教　二年　鈴木由美子）

合宿の半ば頃、気ばかりあせっていました。「今まで真剣に話したことがない。あと三日間でできるか」と思い、もう駄目かと思いました。しかしよーく自分の心に問うてみました。私は自分自身をなげだして、くたくたになるまでに心をくだいてはいませんでした。「ひとりに心を通じることができぬのに、どうして世の人々と心を通じていこうなど言えるのか」と、なまぬるい自分にぎくりとしました。

今合宿が終ろうとしています。今や、びっくりするほどすなおな心になりました。この心が次第々々にうすれていくのが恐ろしく思われます。遠く離れても努力し勉強していきたいと思います。

かの友と今やしっかり心通ひ別るることの口惜しかりけり

眠られなかった翌朝のこと

（延岡短期大学　一年　長畑秀代）

私は仕方なく参加した後に二三日は気が重く「早く過ぎればいいのに」とばかり考えていた。けれど三日目の夜、班で

二時近くまで話した。そこで手きびしくやられた。その時は涙がでそうな位であったし、目がさえて眠ることもできなかった。しかし次の朝、心はすごーく軽くなっていた。自分でも不思議な感じがした。今は班を共にした人々と別れてしまうのが寂しくて仕方がない。

感激させられたのは胡蘭成先生の講義でした。班別討論の時、それを言葉に表わせず皆によくわかってもらえませんでした。くやしくて悲しくて表現力の乏しさを思いしらされました。

合宿に参加する際持ってきた心の鎖は友がはづせり
見も知らぬ人と五日を共にして別るる時は寂しくつらかり

生きる真剣さを取り戻した

（玉川学園女子短期大学　二年　関野みさを）

ただ時の流れに流されて生活し、時おり「むなしいナ」ということばを発して、自分自身から逃げていた一年間。やっとわかりました、私には「生きる」という真剣さがなかったことが。

人間だれしも生を享ければ必ず死を持っているのです。このあたりまえの事がやっとわかった時、無気力に過ごした時間が悔やまれ、物事ひとつひとつに死んだ気になってぶつかろうと決心しました。本当に参加してよかった。

女子学生も大喜び（全体コンパ）

最後の最後まで勉強した

（法政大学　文　四年　矢野典子）

いくらお話をきいても、自分の内に秘めたるものとのめぐり会いがなければすぐに忘れられてしまう。めぐり会いなどという精神的緊張感から離れていた私の心に、班の一人一人の態度言葉が感じられるようになってきました。大きなことを忘れていた、相手に勝つことだけが生のエネルギーのはけ口であったような私は、何か太く大きなものを忘れていたと感じるようになったのでした。そして最後の時間まで勉強をさせていただきました。

人の為に尽くす、相手の心になって考えるということに対して、最後の全体反省会で痛烈に反省をせまられました。「ああまだこんなに自己本位だったのか」と恥ずかしく思いましたがこれは私の本当の姿なのです。痛烈な友の言葉の響きはいつまでも私を謙遜に反省させてくれることでしょう。

すっきりした気持で出発できる

（明治大学　文　二年　高橋左和子）

自分なりの見方を通して、一歩しりぞいて聞いていた私。先生が心からお話なさるのにとびこんでいこうとしなかった私。それが今日、全体発言と小田村先生の話でこだわりがとけた感じがした、身がまえていたものが消えていくように。

自分の心からの言葉を出すことは苦しい。しかしそうしなければ真の友も出来ず、自分も成長していかないだろう。この大切なことを教わった。真剣でなかった気持はすでになくなっていた。もやもやしたまま合宿をでていくのだろうかと思っていたが、それがふきとんですっきりとした気持ちで出発できるのがうれしい。

ほとばしる熱意をこめて友語り我が胸内はあつくなりたり
もやもやとわだかまりたる我が胸は友の言葉にしんと澄みたり

心からの言葉は心を打つ

（日本経済短期大学　一年　宮崎恵子）

私は何もよく知らないのに天皇のことに反発感をいだいていた自分を反省しました。今朝は、すがすがしい気持ちで国旗を見、君が代を耳にしました。知らず知らずにマスコミ的な話し方になってしまう私たちのことば。これではいけない。やっぱり、本当の心から出たことばは人の心を打つ。合宿に参加してそのことを知りました。そして本当の心から出されたお言葉を耳にしました。それがとてもうれしい。

心よりいでたる言葉うれしくて我はみつむる友どもの顔を

壁が除かれて

（福岡大学　医　一年　大原れい子）

合宿に来る前の気持ちが、うそのように思われることで

す。それは私の心に引っかかってはずれなかった壁がすーっと開いて、心が軽くふくらんだような気持ちがしているからです。天皇という一つの事を取りあげてみても、今の私には何の障害もなくお歌が心に入ってくる。こんな気持ちになったのは初めてです。家庭や学校に入ってもこの気持ちは変わらないと思います。

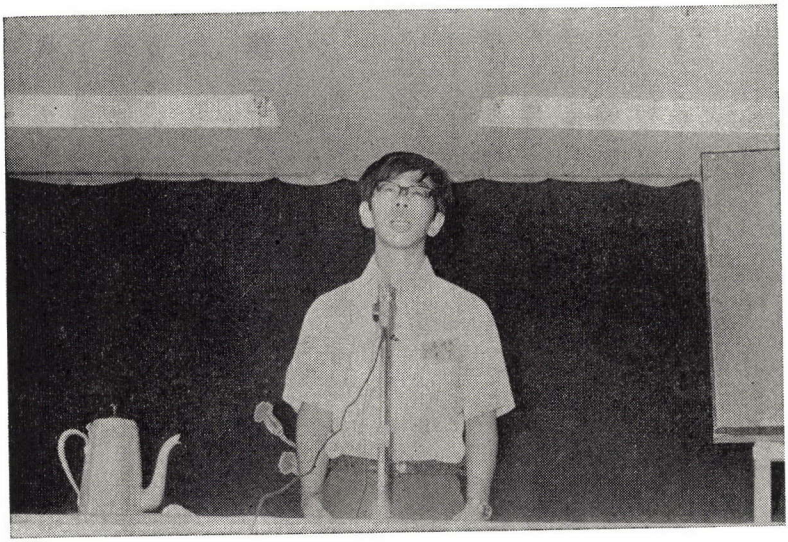
今の私にはお話を伺うだけで精一杯ですが、いつの日かおいつける時が来ると信じてがんばりたいと思います。

「反省せずには居られない」という真剣さ

（熊本大学　教　二年　有馬涼子）

心に一番残っているのは全体意見発表の時発表された人たちの言葉です。きのうの夜自分たちだけ又ビールを飲んだがおいしくなかったといって真剣なまなざしで私たちをみつめた友。小田村先生のお話で「そういう反省は毎日幾度となくでてくる。そういう事は心の中で反省すればよいのであって、口に出すと小乗仏教的なものになってしまう」とおっしゃいました。私もその通りだと感銘しましたが、でも又、そういう小さな事に対してまでも反省せずにはいられない友の真剣な態度にもあらためて感心しました。

得られたもう一つの事は「りっぱな社会になるのに必要なことは体制・主義などは二の次であって、まず一人一人の心である」ということです。



第5日最終日を迎え，全参加者の所感発表の時がきた。壇上にかけあがって3分間以内での発言は，あとをたたない。

やっと気持が通じて

（熊本大学　教　二年　吉永美子）

班別討論で「あなたは本当にそう思っているの」と何度も問い質され、又「心から思った言葉を話さなくては何にもならない」と言われて、「自分では心からそう思っている」と言っても通じなくて、泣いて話をしてやっと通じました。このことによって、人と話をするには全身全霊を込めなければならないかがわかります。そして感動するという言葉を体で感じたのは、小田村先生の御講義をきいてからでした。

学生生活にもどってもこの感動と涙を忘れないように努力して一歩々々歩んでいきたいと思います。

全体意見発表をききて

友達の語る言葉の一語一語我の心につきささるなり

「よい聞き方」を体得した

（鹿児島大学　教　二年　永吉尚子）

聞くということは「相手の言わんとすることを相手の立場に立って理解しようと努める」ことだと強く感じました。

初めの頃「なぜ自分は感じないんだろう」と思いつつ淋しい気持でした。よく自分の胸に問い返してみて〝ただ聞いてるだけで、真に人の言うことを深く考えず聞き流している〟ことに気付きました。「よい聞き方」というのは「体で聞く」ということだと思います。

次に、生き生きした同世代の若者が自分を精一杯いきようとする気迫に満ちているのに刺激されました。

合宿にきて私は「大儲けした」と喜んでおります。

夏の宵先生交へしみじみと明日の別れにわれはさみしき

第三十六班―社会人―

万事にあてはまる教訓を得た

（千葉三郎事務所　佐藤　哲章・二十四歳）

「人のいうことに耳を傾ける」という、あらゆることにあてはまる珠玉の教訓を得たように思う。

ぼくはこの期間に〝真心を持ってすれば成らぬことはない〟との確信を得たのであった。この日の本の国を、心も土も美しくあらしめる為に、友らと考え、悩み、喜びを分ち合いたい。特に郷土愛を育むことによって日本国を愛する一人になりたいと思う。

友どちの歌の中にも知られけり日の本思ふ熱き血しほは

これからの生活にかける

（久留米市西国分小学校・教諭　木下　啓作・二十四歳）

合宿の成果は、これからの生活の中にどう取り入れるかに

かかっている。

国家について考えてもいなかったわたしが、はずかしく思われる。日本人としての自覚を感じ、これからの子どもの教育に全精力を注いでいきたい。

どうしても現場の教育におわれがちになるが、これからはもっと広い目で教育を見なおし、日本人としてまた教育者として価値ある人生を過ごして行きたい。

合宿を終りてみれば思ひ出す友と語りし短き日々を
志を同じくせんと集りて友と語りて我世を見直す

祖先の言葉を聞く思い

（財勤労青年研修会・職員　下村　祐毅・三十歳）

先生方のお話は、ただその先生お一人の言葉でなく、わが民族の祖先のお言葉を聞く思いでございました。

日常聞き慣れた言葉でも、はじめて感動を覚えたという言葉が数多くございました。胡蘭成先生の次のお言葉もその一つでした。

これからの日本を誰がやっていくか。名誉も地位もないただ志ある青年がやるのみ。

これまでも日本人の一人として努力を積み重ねて参りましたが、いままで以上に修練を重ね実践を怠りなくして参ります。

師の君の烈々たる声胸をつき熱き涙のにじむを覚ゆ

女子学生も緊張した一言一句を吐いてくれる。（全体意見発表）

朝つゆを踏みしめつどふ若者が敬度に仰ぐまごころのうた

編者註、朝礼場には「歌」という御題の明治天皇御製が唯一つ掲げられてあった（カメラレポート3参照）

心が動かされた言葉

（㈱高田工業所・社員　田中　晢博（あきひろ）・二十五歳）

全体討議において一女学生が「私には日本とは教えることはできるかどうかわからない。しかしこの合宿にて知ったであろう日本的情緒、つまり親切な心、丁寧な心を、私は職場に入れば教えることができそうである」と、こういわれていました。彼女の一言々々をかみしめ、おもわず我を忘れずにはいられません。

日本人であるという事実、民族が今まで歩み歩いたこの年月を、私の心で考え歩いていかねばと思っております。

熊大教育学部の一女学生をみて

一言一言かみしめ話す眼の中に児童の姿まのあたり見ゆ

夜の集ひにて

目をつむり拍手する手に力こめ過ぎにし日々を思ひめぐらす

国家生活の基盤を考えた

（東急建設㈱・社員　苅谷　光也・二十歳）

いかに国家・経済を論じても、その礎となるべき各の心の準備がなければそれは砂上の楼閣に異ならず、またそれが現在の日本のそれの低迷する原因であると思われるのであります。

私は先生の御話を明日よりの社会生活の中にどの様に生かすか、本当に自分のものにするかは、自分の問題となって切実に感じてくるのです。吾身に感じられた事を明日からの友達との勉強あるいは実社会の中に、自分の心で積極的に行動したいと思います。

及ばざる吾が身なれども合宿に誘ひし友のありがたきかな

それぞれの仕事持ちつつ集ひ来し友等の顔のはつらつとあり

いつはれる吾が心根を示されし師の言の葉をありがたく聞く

慰霊祭にて

先つ世に御国の為にうつそみをすてにし人の御魂しづめん

はらからの切なる思ひを背に受けて行きにし人の御魂思はる

外国のつめたき土にねむりたる雄々しき御魂吾わすれめや

友と歌を作りて

苦しみつ共に作りし歌々にこめてこめえず心つまりて

講義の態度にうたれた

（福岡県・八女津女子高等学校・教諭　小川　信広・二十七歳）

各先生方の御講義は「そういう考え方もあるのか」という程度で、理論を知るに終ったように思えます。が、御気持は深く私の身の中にしみていると思います。一言々々にこもる力。終生忘れぬものとしたいと思います。

今まで日本人としての生き方なんて考えたこともなかったのですが、いかに大切なものであるかという事を初めてお教えいただき恥ずかしい思いでいっぱいです。又合宿に流れる

雰囲気も初めての体験です。語らずして相手の意をくもうとする心が作り出すのか、何か尊い雰囲気にふれたように思えてなりません。何か当地を去るのが残念です。

若き血のたぎるがごとき歌声に大和魂のひびき聞くなり

ヘソマガリが発揮できなかった

（熊本市藤園中学校・教諭　上原　正弘・二十四歳）

全体意見発表の雰囲気はとてもいやだった。あることに対して同一の感情を要求するようなおそろしさを感じたといってよい。

ところがそれらのことも、小田村理事長のお話を聞くことによりホッとした。更に今までのいろんな意味でのわだかまりがとれていったと思う。今は思い残すことはない。小田村理事長にあったことは記念すべきことだ。日頃のヘソマガリも発揮できず、すなおに心に入ってきた。実にめずらしいことだ。来年も参加させてもらおうと思っている。

最後の夜の集ひ
今はただ心一つにうちとけて笑ひのうちにも心通へり
何もかも忘れて歌ふ友を見て思はずたちて声はりあげぬ

実のあるものにしてみせる

（八代市第七中学校・教諭　中村　智・二十九歳）

全般を通じて緊張の連続であり、今までに経験し得なかっ

聴く側の緊張も見のがせなかった。壇上での発言は，そのまま自分自身の胸の思いの代弁にでも聴えたためであろうか（全体意見発表）

た精神の鍛錬を学び得たように思う。
まだ頭の中は、もうろうとしてよく整理できないでいるが、必らず自分なりに実のあるものにしてみせるという気持ちでいる。

朝霧に阿蘇の外輪かすみ見ゆるその山肌のすがしかりけり

第三十七班—社会人—

謙虚さを持ち続けたい

（熊本県立松橋養護学校・教諭　大久保　了・二十五歳）

非常に疲れた。私自身複雑な気持をもっておりまとまりがつかないが、ただ判ったことは、和歌に自分の気持をたくすときのような謙虚さを持ち続けなければならない、というふうに考えている。この気持を大切にしてゆきたい。

久方に武夫原の歌聞きいりて思ひをはする数学教室
編者註、武夫原の歌は旧制第五高等学校以来の寮歌

まちがってなかった

（八代市第三中学校・教諭　清田　宏二・二十八歳）

わずか五日間であったが、自分が仕事をやりながらものたりなさを感じていた事、それが何であったのか少しわかりかけて来たように思うし、それまでの自分の考えが正しかったのだということに自信を持つことができた。

現在の日本は「無国籍者」が多いように感じる。合宿で一番私の心に響いたことばそれは「日本人だと言えるか」ということである。合宿をかえり見て今思うことは、本当に自分が日本人の心に接した五日間であったようだということである。生まれて初めての和歌の創作、胡蘭成先生のさとし、友の心とのふれあいなど思いはつきない。

阿蘇の美しさに心ひかれて
数万の民育みし阿蘇谷の清きけしきに目を見はりたり

期待が満たされた

（久留米工業高等学校・教諭　今野　政紀・二十九歳）

参加する当初「教育現場に生かされるものをせめて一つ」と期待した。そして朧げながら手にすることができた。〃真心〃〃信ずること〃〃自らを育んだ祖国へのこよなき愛〃それである。ひたむきでありさえすれば何かが得られる。きっとその想いが伝えられると確信したい。故郷の山が海が父母が慕わしい。情が揺れる。自分が変わる。今変わっている。

ひたすらに真心をもて生き行かむ祖国の為に同胞の為に

出発点は自分の心にあった

（朝日瀝青㈱・社員　永沼　明彦・二十八歳）

参加の目的はある落ち着きを作る事、人間性を充実させる事にありました。それは当初自分として国家とか精神につい

て理屈として持っている様な考えをしていたからでした。しかしそれらの問題は、自分の心の問題〝日本人〟と云う心の位置づけから始まると云う事を肌で知らされた感が致します。〝自己の確立〟と云って来た事が、いかに未熟なものであったかを身をもって知らされました。

厳しくも熱き教へを明日よりの我の心の柱にぞせん
素直なる心をもちて歩まんと今日よりの我心新たにす

日本の命を忘れていた

（熊本県阿蘇中学校・教諭　森田　秀典・二十八歳）

現在日本が危機に直面しているとは気付かなかった。それは自分の心情、日本の命というものを忘れていたからである。

まだ、日本の命の存在は感じられても実感としてとらえることはできない。これはこれから自分で勉強していかなければならないと思っている。こういうことに気付いただけでも自分にとってすばらしいことであった。

慰霊祭に感銘した

（日本遺族会・職員　川俣　正憲・三十歳）

慰霊祭につきましては深く感銘を受けました。このように慰霊をたいせつにしてくれている人々がいると思うと心が引きしまる思いがします。

小田村先生によって，さいごのとりまとめがなされたとき，女子学生の顔にも，ほっとした安らぎが戻った，と評されている。
（全体意見発表）

四日目の小田村先生の講義を聞き、前三日のわだかまりがとれる思いがして、国家というもの、自分は何をなすべきかと言うこと、講義が終った時、緊張のあまり肩がはっていたことに気づきました。

慰霊祭にぞみて

慰霊のみたまをまつるかがり火のひときは明るくかがやきにけり

なかなか出来ない

（久留米市鳥飼小学校・事務主事　久保　東彦・二十四歳）

現在の日本には直さなければいけない所が多くあります。教育・公害問題・テレビ。でも、この日本が好きだ、だからどうにかしなければいけないと思う。でも、思うことと行動とのギャップが出て来ますね、何の場合にも。

阿蘇の野につどふ仲間の言の葉は激しきほどに我が胸をうつ

第三十八班―社会人―

誘われたことに感謝しつつ

（新日本製鉄㈱・社員　吉山　隆矩・三十歳）

合宿を終え充実した感を深くすると共に、紹介してくれた友人に感謝しています。講義も迫力のある講義で開眼の思いが致しました。国という問題等は日常話すことはありませんが、幸い社会人サークルを行なっている関係上、多くの人々に語りかける積りです。

厳格なる四泊五日の学び終へ離れがたきや同窓の友

良かった点

（山鹿市山鹿中学校・教諭　田中　宏・三十二歳）

一、偏見が改まったこと。一、日本の教師であるという自覚ができたこと。一、身体でものを言うことのむずかしさ大切さを知ったこと。一、古人の心に感動できる歴史を教える教師になる努力をしたいと考えたこと。

諸々の偏見抱き参加せし吾が心根がはづかしきかな

喜びをかみしめている

（八代市第二中学校・教諭　松村　研治・三十九歳）

合宿の五日間も無事終わらんとしています。初めの不安な気持ちもすっかり消えて、今は参加できた喜びを一人かみしめています。この体験をこれからの糧としてがんばっていきたいと思います。

朝もやにのぼりのぼれる日の丸を仰ぎて見れば心澄みゆく

大阿蘇の原野をよぎる朝風にひるがへりをる御国の象徴

ある学生の発表（全体意見発表）にショック

（久留米市荒木小学校・教諭　毛利　哲男・三十八歳）

教へ子にわが教育を批判されショック強くて何をかいはむ

この五日間マスコミの片よりについては多く指摘されたが、そのマスコミを通じて発表された横井庄一さんに対する子供の作文の記事を一方的に信用し、教育のひずみは教育界だけの責任でなく政治・社会情勢のおっている責任もあるはず、それを一方的に日教組だけを批判されたことから、この合宿教室に疑問を感じ、強い枠組みを感じた。これ以上何を言っても無駄のような感じがする。

私のおみやげ

（久留米商業高等学校・教諭　川浪　保守・三十一歳）

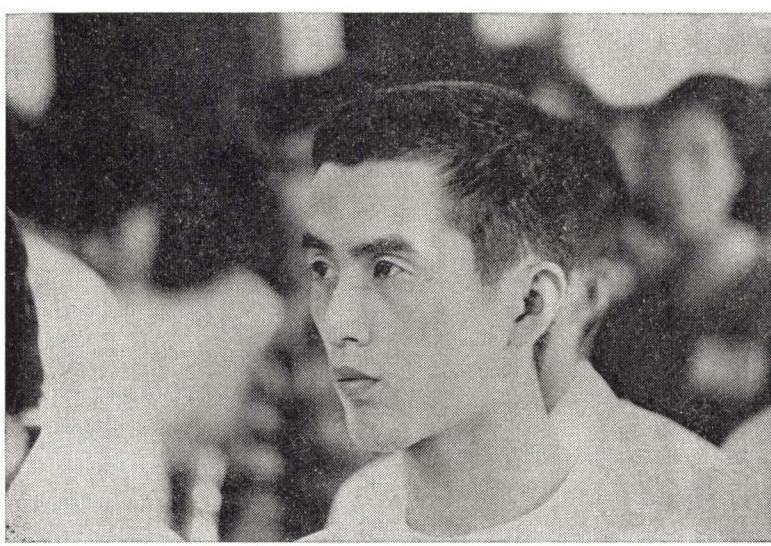
一、輪読で文の重みを感じたこと。二、和歌創作、気持がゆったりした時に作ってみようという気になったこと。三、国文研のような考え方もあるのだなあ、ということが少しばかり頭の中で理解できただけでも良かったと思う。

学生諸君に

（サン・アロー化学㈱・社員　佐藤　茂・三十六歳）

最終日に想ふ
我を想ひ友が話せる言の葉は心にしみてうれしかりけり

相手の事を考えず自己の発想のみを正と信じて押しつける様な話し方、その辺ゲバ学生と酷似している。妥協のない張りつめた様な主張は世間には通用しない。



閉会式にのぞむある男子学生の表情

おおまかな目安

（熊本県岱明中学校・教諭　中村　文雄・三十四歳）

平素は中々考えがたい面、思想、世界の動向、その中における日本はいかにとらえいかに進むべきか、というおおまかな目やすがキャッチできた事が何よりの収穫であった。

阿蘇山のみやまきりしまは噴煙や虫にをかされ花咲きにけり

生き甲斐を深め得た

（八代市第六中学校・教諭　宮川　麗子・三十八歳）

若い方々の心の中に日本を愛する血の脈動が波打っているのを知りうれしく思いました。又自分自身が歴史の流れの一滴であることも知り、生き甲斐を一そう深めることができました。今後多くの人々にも、日本に生まれ育ったことのよろこびを味わっていただけるように努力していきたいと思います。

大阿蘇の国文研に参加して生くるよろこび深く味はふ

霧が晴れた

（航空自衛隊第四術科学校・職員　平山沙代子・三十一歳）

御講義はみなよかった。特に木内先生のお話はよかった。自分が一まわり大きくなったような気持。私の前にかかっていた霧のようなものが晴れた感じである。

合宿最後の日に
途中にて山おりし人ありといふ力出しませとわれは祈りつ

第三十九班―社会人―

一人の力は小さくとも

（久留米市南筑高等学校・教諭　白木勇三郎・四十歳）

私は心をふるいたたせながら、下山した後のことに想いをはせている。「合宿は終ったのではない。今日から本当の合宿がはじまるのだ」と。一人でも多くの友に、合宿について語りかけ心を通じあって呼びかけていきたい。

一人の力は小さくとも、多くの友や国文研の方々を心の支えとして頑張っていきたい。

み教への心をとどめて日の本の若き世代と共に学ばん

心の結びつきが国家だ

（熊本市画図小学校・教諭　塚本　忠・三十七歳）

人間（日本人）一人一人がもっている心の結びつきによって左右するものが国家であり、それを守り続けるのは我々の信頼・心であるとつかめた。私は子ども達に対して素直な心と信頼をもって生きていくことをちかうことが出来た。

人間は心にかへれとさとされて己をみつめてはづかしきかな

信頼感・連帯感が大切だ

（八代市松高小学校・教諭　草野　実・三十五歳）

人間同士が信頼感・連帯感をもつことが大切だ。これが正しい国家意識につながると思う。

台湾のことを思うと心がいたむ。日本が台湾を見すてた場合の、そのゆくすえを思うとおそろしくすらなる。

チベット学生のうったへをききて
とつとつと語る言の葉その中に国思ふ心あふれたりけり
また
はろばろと集ひし人と語らひてここにも吾の同胞（とも）ありと思ふ

地道に、怠りなく励みたい

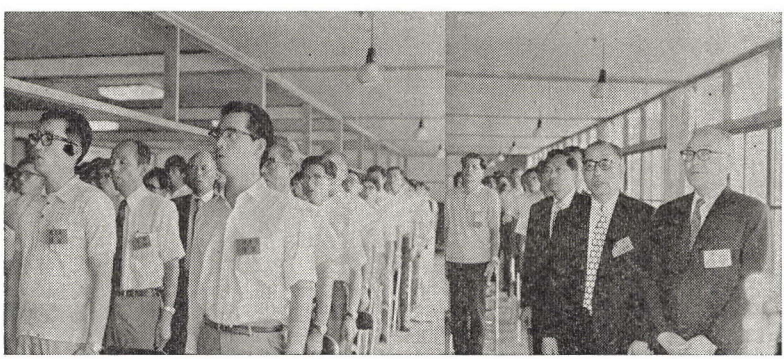
（熊本県玉名郡南関南中学校・教諭　松尾　元史・三十六歳）

われわれにとって最も大切なものは何か。それは国家であり家庭でありまた生命である。祖先の人々の心を受けつぎ、ますます繁栄させ暖かみのある日本を作る任務は、簡単なものではない。地道に怠る事なくはげまなければならない、と新たに決意した次第である。

合宿で学びし事を糧として生徒（こら）に伝ふは心楽しき
合宿で学びし事を胸に止め任務果さん朝な夕なに

教え子に会うのが待遠しい

（久留米市安武小学校・教諭　片岡　充好・三十六歳）



一切の日程行事が，苦しみと喜びと悩みと開放感のさまざまな交錯のうちに，見事に完遂されて，閉会式となる。全員が唱和する国歌「君が代」2回の斉唱は，5日前の開会式のときのそれに比べて，なんと肚の底からの声に変わっていたことか。

人間性が全く喪失されたといってよい世の中、この原因は何か。特に教育にたずさわる者にとりこの事は一大関心事であったが、大方の解明を与えていただき、今後の教育のあり方も真の教育のすがたも眼前に浮かんで来た様な気がする。

教へ子に学びし事を伝へんと思へば胸のはづむをおぼゆる

感謝する子ども達を育てたい

（久留米市御井小学校・教諭　弥永九州男・三十四歳）

意見発表ができなかったので二、三を書きとめます。

一、真剣に日本人としての立場から考えておられる方々がたくさんおられることに勇気づけられました。

二、ここで学んだことをつぎのようなことで生かしていきたいと思います。

1　親や先祖、郷土や国に、感謝の気持を、ことばや行いに表わせるような子どもたちを育てる

2　教え子を合宿に参加させるようにしたい

わが胸のうちにひめたる憂国を明日の子どもに託さむと思ふ

明日の日が明るい

（旗風社・鴻巣寮・職員　松本　効三・三十五歳）

天皇道を知りそれを人に説くには、歴代天皇の御製をよくよみ勉強する以外にない事をはっきりと悟った。その大御心を完全にマスターすれば、マルクス主義も、独善的な宗教論も、たちどころに吹っ飛ぶ事であろう。人間は一生が勉強だという。少し熱心に勉学に励んだだけでこれ程の充実感と、明日の日が明るくなってくる。この気持を大切にしたいと思う。

すめらぎの大御心を聞くたびにただただ頭さがるのみなり

読書法を反省させられた

（大阪商業大学学生部・職員　栂井　芳清・四十三歳）

読書するに当っては、一言一句ゆるがせにしないで、作者の心を憶念し乍ら読むと云ふこと。この読み方は、ともすれば多忙の故もあって、走り読みをして文章の概略だけを摑んで、自己流に解ったつもりでいた今迄の私の読書法を反省させられる大きな警鐘であった。

全国に別れ散れども国を思ふ心は一つ阿蘇の友垣

生涯の友

（萩市・建築業自営　水津　茂・五十五歳）

小田村先生の最後の御言葉、胡先生のお話、チベットの青年の訴えなど、すばらしい知識となった。今度はこの知識を自分の智恵として、大いに国を思い人生を意義あらしめたい。特に第三十九班の皆さんには、国思う友として生涯つきあいたいと思う。

国思ふ心通ひし友どちは尚いつまでもと三十九班

第四十班 ―社会人―

古典を学ぼう

（熊本市湖東中学校・教諭　野村竜之助・三十六歳）

じかに、祖国を思う友にふれて感動させられる面が多々あった。特に若き学生達が真けんに励んでいることを目のあたりにして、これで祖国はほろびないぞと、とてもたのもしく感じた。

古典の美しさ、すばらしさにふれ、今後万難を排して古典を学ぼうという決意が湧いている。

国思ふ友の心にふれしよりあらたなるかな祖国のことが

自分で短歌を作った感動

（八代市金剛小学校・教諭　谷川　成孝・二十九歳）

今日まで、国旗掲揚の際の日の丸の旗をあおいでも、すなおに喜びをもって見えなかったのが、本当に清らかな目で、心で、感じ得る、あおぎ得るようになったことだけでも、心がはれたような感じがする。

曲りなりにもあの短歌をつくった時のよろこび、他人に書いてもらった歌よりも自分で作った歌がどれほどよくできたかと思ったあの感動……。

解散――ほんとうに別れが惜しくなった。お互いに元気でやろうぜ！

大阿蘇のもゆるいのちをみにこめて教への道にさらに励まむ

すなおな気持になった喜び

（八代市八代小学校・教諭　市村　武元・二十八歳）

国家イコール政治権力という考えをわたしくはしていたが小田村先生の「国家とは」というお話を聞き、もやもやしていたものがすーっと消えてしまった。これからは、すなおな気持で取り組めます。この喜びは、たいへん大きなものです。

阿蘇にのぼりて
草原をわけてふきくる涼風にほほをつたひしあせもかはきぬ

世の中を正す唯一のもの

（福岡県・八女津女子高等学校・教諭　吉田　文紀・三十八歳）

教師としての私が現在までよけて通っていた最も重大な事柄である国家と古典の意味が、身にしみて理解出来ました。古典を日本人の心に取りもどすことが、世の中を正す唯一のものだと痛感致します。

この合宿で学んだ事を信念として、力強く一生を通じ、教育の現場に生かしていくつもりです。

わかれまでなごりをしみつつ語りけりわが国民のゆく末のこと

真剣に考えさせられた

（熊本市高平台小学校・教諭　積　芳孝・三十九歳）

胡蘭成先生・木内先生の講義を、今後の生活のかてとして、じっくり時間空間を考え、一生けんめいがんばって行きたいと思っている。本当に、真剣に考えさせられ、わたくしのためになったと思う。

来てよかった

（久留米市金丸小学校・教諭　古賀　重三・三十六歳）

平常は仕事に追われ、雑用に何かとかきまわされ、その日その日をなんとか過ごしていた自分がはずかしく感じられたのは、この五日間です。

全体意見発表で、よほど立って話そうかと思いましたが、とうとうその勇気がでず、何よりも残念でした。でも来てよかったと思います。

若人と阿蘇に集ひて語らひの中に我が身の洗はれにけり

長くて短かかった五日間

（萩工業学園専門学校・校長　藤井震太郎・三十九歳）

只々長い長い、たった、五日間であった。きっときっとこれからの我が人生のゆるぎない基となって、自分を支えてくれる大きなものを得た事を信じてやみません。

同室の友と共に
かたかりし部屋の空気も進む日に友和み来てむつみましゆく
来む年も又あひなんと友は言ふこのめぐりあひ忘るべしやは

第四十一班 —社会人—

大御心を子らに伝えたい

（熊本県玉名郡南関第三小学校・教諭　赤木　忠明・四十八歳）

うすれていた人間本来の心がよみがえって来た。教える子どもに歴代天皇の御歌を通して天皇の御心をおりにふれて教えていきたいと思います。真の日本人の教育をめざして、日々の生活に頑張っていきたいと思います。来年度は若き職場の先生を是非参加されるようにすすめたい。

歴代の大御歌をば拝誦し子らにつたへんその御心を

聖徳太子と吉田松陰

（山鹿市山鹿中学校・教諭　志水　公文・四十五歳）

聖徳太子と吉田松陰、このお二人はいずれも外国文化の攻勢という、そのために国内不安という時期に出現され、日本人の生きかたを洞察され、主体性を発揮され給うたのであった。

私の人生のデザイン、それは「おれは何のために死ぬか」

女子参加者のお別れもまた，和やかさがいっぱいの風景をくりひろげていた。（カメラ・レポート，以上で終ります。）

である。大乗的に生きていきたい。古人のこの心を究めていきたい。

まだ心にかかるものがある

（久留米市櫛原中学校・教諭　中園健次郎・四十三歳）

はげしい言動と強烈な印象とが脳裏に交さくするのであるが、何かしら今一つ物足りなさを感ずる。心の問題として今後胸の内に温めて行くべきものなのかもしれないが、何か心にかかるものを払拭することが出来ないでいる。

精一杯の努力を続けたい

（久留米市諏訪中学校・教諭　坂口　信男・四十二歳）

我々は右顧左眄することなく中道を歩まなくてはならない。その為の指針・背骨となり、我々を支えてくれるものが判りつつある。私は、謙虚な心、素直な心を育てつつ、信頼し合える人間関係を大事にして行き、精一杯の努力を続けて行かねばならないと決意している。

生き甲斐を見出しかねて友どちと語り合ひつつ去りかぬる思ひす
集ひ来て語り明かせるくさぐさを明日への糧となさんとぞ思ふ

めぐり合いを大切にしたい

（久留米工業高等学校・教諭　橋口　幸夫・五十一歳）

毎日が驚きととまどいの連続であった。しかし今迄の書物を読む心の姿勢について深く反省させられ、教えられる所が数多く有ります。

特に心を打った言葉に、梶村先生の「宗教はめぐり合いであると思う。これを大切にして行きたい、かりそめと思わずに」があり、私は今後この言葉を座右銘にして行きたい。

生きていく土台を作りたい

（熊本県玉名郡三加和中学校・教諭　橋本　雄二・四十三歳）

深い感銘を受けたのは、梶村先生の「東洋人の心を見失うな」ということばである。兎角忘れがちな東洋道徳のありかたに目を向けて、自分自身の生きていくための土台をつくりたいものである。

人みなが胸うちあけて語り合ふ姿の中にまことありけり

太平ムードの中で育てるべきものは

（熊本県玉名郡菊水西小学校・教諭　竹下　晨吾・四十二歳）

太平ムードの中で、利己中心的に昭和元禄の物質的満足のみを追求して止まない現代社会の中でも、同じ日本人であるという自覚と、この国の文化を守り伝えようとする気持だけは、お互いに守り育てていきたいと思っている。

真情を吐露して叫ぶ若人の姿に思はず我も涙す

松陰の偉大さに感動

（久留米市京町小学校・教諭　平野　正則・四十四歳）

吉田松陰先生の偉大さに感動した。実は終戦直後、師範入試の面接の時「わたしの尊敬する人物は吉田松陰です」と答えると試験官三人は「これはいけない、国家主義者だ」とつぶやきながらチェックされて落第した。それから二十数年、わたしは松陰の教育者としての真摯な態度にただならぬ感情を持ちつづけていた。

若き日に想ひし先哲（ひと）のみ文読み生くるうれしさこみあげてきぬ

若き学生諸君へ

（熊本市託麻中学校・教諭　山田　芳弘・四十一歳）

一つの主張を、流動する社会の中で永く維持するのは非常な努力のいることである。

社会人となり組合運動の洗礼をうける時こそ心の中に砦を築いて自分の心を守らねばならない。日本人として自分を見つめることがその支えになり得る力なのだ。そしてそれは友人同志を持ち、それへの働きかけによって永続のものとなることができるのだ。

第四十二班―社会人―

今後の生き方に生かす

（熊本市壺川小学校・教諭　右田　義臣・四十四歳）

戦後の教育界は昏迷を続けている。精神面の教育は行われていないといってもいいくらいである。天皇とか国家の問題が、現在もなおタブーのようになっていてほとんど語られないからである。このことについて堂々と語り、日本本来の姿をみつめなおし、それが子供のひとりひとりの心の中に根をおろすとき、本当の教育ができると考える。この意味から本合宿で得たものは大きく尊いものであった。

人本来の心を取りもどさんと導かるる講師のことば我が胸をうつ

貴重な体験だった

（玉名市玉名中学校・教諭　徳丸　隆昭・四十三歳）

合宿研は誠に貴重な体験であったということが、感想のすべてを言い尽くしているように思われる。

合宿研の体験は、心深く反省を強いられる事でもあった。その他にも、青年、学生の心の動き等々、貴重なものであった。

かねての方向が間違いでなかった

（久留米市篠山小学校・教諭　松尾　哲夫・四十二歳）

教育現場に於て、かねがね思い実践していた方向が間違いでなかったことをつくづく感じています。この合宿で先生にお教え頂いたこと、班員と語りあい確かめあったことをよりどころにして、子供達に、父兄に、同じように接していきたいと思っています。

慰霊祭にのぞみて

海ゆかばうたひつしのびぬもののふの雄々しき悲しきその戦さぶり

爆撃に身を砕かれし我が友もいまこのにはに下り給ひぬ

また

美しき祖国に生まれし幸せを心にとめていざわかれなむ

在り方がすっきりした

（八代市第二中学校・教諭　山田　照夫・四十二歳）

毎日の職場生活において、いつももやもやとした悩みや不安がつきまとい、進むべき道に迷いがあったものだった。しかしこの学習会で、日本人としての自覚が強く確かめられ、自分の在り方がすっきりした様に思う。生涯味わうことのできない雰囲気に浸ることが出来、有難く感謝の外ありません。これからもより以上に教育道に精進する決意をあらたにしながら……。

若ものとともに集ひし阿蘇の宿かたり足らぬ思ひにまだ去りがたし

四十台にして立上る気持になった

（久留米市櫛原中学校・教諭　大場　勲・四十五歳）

心の迷いもこの集りですっきりとしました。一番大切な子供達をしっかりした方向へ指向させるには、今日まで私なりに考えて来たものが有ります。今日迄の参加により、明確に指導して戴きました事には心よりお礼申し上げます。

今迄立上る機会を見ませんでしたが四十台にして立ち上る気持を

国おもふこころをただすきかいなりいまこそたたんよものやまやま

これからの生涯に有意義

（熊本県玉名郡木葉小学校・教頭　古田　清敏・四十八歳）

共産主義社会になっても、低サラリーマンにとってはたいした変りはないだろうと、深刻に考えていなかったが、諸先生方の心に流れる、国を想う人間性に打たれ、これからの生涯に意義があるように思われた。

小田村先生の講義に思う

先生のほとばしりいづる言の葉は心のおくを熱くするかな

亡き戦友にすまぬ

（熊本市若葉小学校・教諭　西村　忠之・四十七歳）

心の底にあったような思想が掘りおこされたようで、気持がすーっとしたような心境である。と同時に、尊い生命を国の為に捧げた戦友に深くお詫びしたい気持になった。尚シベ

リヤで骨を埋めし戦友の事が目に浮かび、戦友が今日程深く想出された事はなかった。生きながらえた自分は、現在教職にある。児童を生徒を、どのような気持で指導して来たか深く反省させられた。

慰霊祭に参加して

海ゆかば歌ひて我は亡き戦友にすまぬすまぬと深くひれ伏す

若人達に継承させたい

（久留米市宮ノ陣中学校・教諭　古賀　忠治・四十五歳）

今までは、自我にとらわれ、ややもするとエゴイズムな自己であったことを反省するとともに、貴重な体験を、これからの日本を背負って立つ若人達に是非継承させていきたい。その為にも、微力ながらみんなに呼びかけていきたいと思っています。

みづからをつとめて正す合宿の今の感動子らにつたへん

別れゆくとものことばに胸せまりをえつの乙女今も忘れず

短歌創作について

四泊五日に亘る本合宿教室に於いては、その第三日目に今年もまた、全員が短歌を創作いたしました。

班員の大多数は、短歌創作が始めてのようでしたが、僅か一時間の導入講義を聞いただけで直ぐバスに分乗して阿蘇に登山しその間に創作して夜七時には提出、という強行スケジュールでした。登山の最中に、用紙を手にして鉛筆を走らせる姿が多く見られたものです。

導入講義で夜久正雄先生は、短歌創作の基本について「自分の感情を詠むこと、それも、その感情が自分の心に生き生きと残っている間に記すこと」といわれました。

戦後教育を受けて来た者にとって、とかく、短歌は、自分とは無縁で、専門歌人の領域にしか無いもの、と思われているのですが、決してそうではなくて、元来、日常生活の中の様々の感情をそのまま素直に表現するものとして、古くから、例えば万葉集に見られるように、日本に生まれ育って来た特有の詩型であるといえましょう。万葉集の作者の中には、農村の一青年から遊女に至るまで所謂無名の人を含んでいて、而もそれぞれに身近なことを率直に素直にうたってをり、現代人である私共にも新鮮な感覚で愬へてくる力を持っています。

本合宿教室で短歌創作を毎年取り上げて来ている大きな理由の一つは、短歌の中には、人と人との心を通い合わし得る力があるから、ということです。私共は、能率化されたと云われている現代に於いて、いつの間にか、生活の一番根底に在るべき「心」が無視されつつあることを絶えず心配しております。

平素、理論で以て簡単に相手を打ちまかす自信のある人でも、一度短歌の前に立つと、その理論は何の役にも立たなくなってしまいます。このことは、人間にとって、何が根本的に大切なのかを教えているのではないでし

ようか。それ故にこそ私共は、短歌を作ることは、決して風流の遊びなのではなくして、ともすれば失い勝ちで而も大切なもの――心――を呼びさまし、元気づけてくれるものだと信じております。

情報化社会といわれて弥が上にもニュースが山積し、その処理は機械に頼まなければ間に合わないという現代です。然し、生きて行く上で、それ程の情報が果して本当に必要なのでしょうか。現代に対する私共の憂慮は、情報――それは通常、無感覚な概念として取扱われるのが殆どです――が重視される反動として、心が無視され、人と人とのつき合いがスレチガイのままに放任されているという点に在ります。

第二日目の講義で、川井修治先生は「瑞々(みずみず)しい情意を取り戻そう」といわれました。友人同胞に対する暖かな思いやり、自然に触れてこみあげて来る感動、それら「ものに感じる心」を呼びさまし、それを自分の言葉として記しつけておくことこそ、今生きているという証明であり、理論や概念の現代から脱却する唯一の途であり、人間不信の世相を打破して人間の尊厳性を回復する方途であります。我が国古来の短歌は、表現の巧拙よりも、自然で率直でその人だけの、掛値なしの感情を重視しています。

提出された短歌は、選別の上、夜半過ぎ迄かかって事務局の手で印刷され、翌日の全体批評に間に合わされて、夜久先生の批評が行なわれたのですが、その時には、或いは深刻な共感を呼び、時には爆笑をすら齎したものです。やがて引続いて班別の相互批評があり、お互いに直し合っているうちに「自分の心は自分にしか分らない」と思っていたのに、意外にも、友達に見出されて気持が通い合い、不思議な共感を味わいました。

どうかこの創作を、巧拙ではなく作者の心を汲みとりつつ、お読み頂きたいのであります。

尚ここには、本合宿教室の事務局員（少年も含む）のものも集録しましたが、導入講義を聞く時間すら無かったのに、自ら進んで、真似る（まねぶ・まなぶ）というその健気(けなげ)さをお汲み取り頂けば幸いです。

短歌詠草（しきしまのみち）

第一班

上智大　山口良男

ペマ・ギャルポ君の発言を聞きて

チベットも輝かしき過去ありと訴ふるごと語りてやまず

故国をも兄弟をも失ひしその悲しみはいかばかりかあらむ

国思ひ思ひやまざる一念は君の語気にも感ぜられけり

聞きゆけば聞きゆく程に吾が胸の熱くなり来を抑へえざるも

亜細亜大　栗田信彦

放された牛たち見れば忘れたる自然を思ふ阿蘇の高原

鹿児島大　田中　済

馬の背にこはごは乗りし幼子に手を振り励ます母親ありけり

中央大　佐野和利

先生の御言葉胸に響ききて吾れ忘れじと心に誓ふも

専修大　茂木克彦

短歌などできぬものとてつくらねば肩身狭しと努力するなり

東工大　瀬上　信

阿蘇山の天地に通ずる噴煙にたくす思ひは乱れし世のこと

熊本大　折田豊生

お互ひに名前呼び合ふその声もいつか知らずにうちとけて来つ

新しく巡り合ひたるともどちと睦び合ふ日のいとも楽しき

早稲田大　谷　良二

ペマ・ギャルポ君の話を聞きて

ひたすらに祖国を思ふ友どちの熱き言葉は胸に迫りく

あれほどに祖国を思ふ熱情に日本を思はぬ我ははづかし

聖徳太子の御本の輪読の折

太子様の民を思はるる御心に深く頭をさげたき気持す

第二班

東京大　藤野真三郎

坂道を登りつきたれば大火口黙して吾はしばしたたずむ

亜細亜大　佐藤光直

青々と生ひ茂りたる草の上に牛のふしたり阿蘇のすそ野の

熊本大　岡井政彦

敷きつめた緑のじゅうたん草千里はるかを駆けゆく黒点の馬

中央大　渡辺忠之

緑なす野辺にそよ風ここちよし牛馬のどかな夏のひととき

鹿児島経済大　成尾勇一

友どちの目輝かして思ひのままを語る言の葉胸に響きぬ

輪読は静かなれども我も友も心すまして言の葉味はふ

九州大　福山宏一

カルデラの底に広がる阿蘇谷は青々として豊

かなりけり

東京外語大　名越健郎

火の山の火口にのぞみてしのびをれば太古のさまの胸にせまり来

早稲田大　古川忠

班の友と一緒に阿蘇に登りて

友どちは何処に来るかと共どもに幾度となくふり返りをり

ふり返りつゝ登るみ友のあたゝかき姿に心のかよへるを覚ゆ

第三班

九州大　中村健一郎

ふみしめる岩膚にこそ中岳の噴火の跡を偲びつるかも

早稲田大　影島一吉

草色の一面に広がる草千里わが物顔に馬走り行く

太陽の照り輝く阿蘇の原馬の親子が遊びたはむる

九州大　大野英則

チベットよりベマ兄きたる

チベットの名しか知らない我もまた彼の言葉に耳傾くる

本国の歴史を語る友どちの強き言葉に心うたるる

中共にせめられた後むりやりに国の一部に含めらるとは

チベットの抑圧されし現状を初めて聞きて胸のつまりぬ

いろいろな貨幣や地図を手にかかげ一生懸命友は訴ふ

中共といふ国のこはさを身をもって体験せしと友は言ひけり

亜細亜大　ベマ・ギャルポ

風が吹けば風に母へのことづけを送りたいと思ふ心はばからしかなあ（「空しいことだ」の意、編者註）

中共の残虐さについて語るときビデオテープでもあったらなあとつくづく思った

人から母国のことをたづねてくれるとき嬉しくて目がおどる

玉川大　小谷太一郎

友の語る一語一句をかみしめて理解することなんと難きか

あふぎみる国旗に心もひきしまり今日への意欲うまれ出づるかな

一本の大木もなき岩山を中岳めざし一歩一歩進む

法政大　田倉茂樹

合宿に来る途中で

年ゆかぬ子を旅立たす親心不安のあまり我に頼みつ

第四班

早稲田大　藤井貢

聖徳太子の御本の輪読の折に

自らに縛ありてふ御言葉が心にとまりぬと友は語りぬ

自らの心を直に言の葉に照らし合はして語りし友は

言の葉は短けれども素直なる友の思ひは伝はりてきぬ

神戸大　丸山明

山川をめぐりめぐりて一筋の真白き道は火の山に続く

熊本大　田之上正明

学生意見発表の折

目をすゑて一語一語に自らの思ひをこめて語りをるなり

山本勝市先生のお話を聞いて

師の君のお話の中の信義てふ言葉の重みいまさらに感ず

九州大　永松真洋

常にあれば楽しかるべき草千里歌気にかかりて心はずまず

晴れたらばいかに雄々しく見ゆるらむ外輪山雲にかすみて見えず

日本経済短大　伊藤佳和

噴火口おもはずわれを引きつけて硫黄の匂ひ心をさわがす

亜細亜大　深井辰海

帰りつき風呂にひたりつつ眼を閉づればうかびくるのは雄々しき噴煙

第五班

東京大　等（ひとし）　健次

草中にくれなゐ色の朝顔の小さく三つ咲きてありけり

九州大　小柳左門

そそりたつ火口のふちゆ見下せば底は煙におほはれて見えず

大いなる火口こめたる白煙のなびきてはつかに底つ岩見ゆ

底知れぬ火口の深みゆ溶岩のたぎるがごとき音ひびくなり

鹿児島大　徳田善久

日も暮るる阿蘇の平野に虫の鳴き宿の窓辺に友と語らふ

早稲田大　甲斐和彦

ぼんやりとかすむはるかな外輪山姿かくして静かなりけり

熊本大　徳永晃

汗かきて迎ふる煙に向ひつつ登りてゆけば吹きあぐる風

明治大　青本則雄

中岳の火口にたちてながむればあまりの大きさにすひこまれんとす

関西学院大　増田善造

溶岩を踏みしめ登るみ友らと頭上に見上ぐる阿蘇の噴煙

亜細亜大　久世郁夫

外国の人さへ思ふ我国の行手を我は思はざりけり

成城大　布川嘉和

暑き中登りつきたる阿蘇の山友の顔にも微笑あふる

第六班

熊本大　船津竜一郎

裾野にて馬に乗りたる子供らのぎこちのなさがかはいげに見ゆ

亜細亜大　浅妻知久

牧草に牛のあそべる姿みてしばし心がなごやかになる

鹿児島大　甲斐敬之

風強き火口に立ちて見おろせばその巨大さに身のすくみけり

立正大　星野輝夫

阿蘇の山煙吐きたるその奥の音の響ぞ神秘と聞ゆ

九州大　牧角龍憲

真剣に国をうれふる先生のお言葉を聞き胸あつくなる

中央大　中村裕

草千里草の緑が目にしみてビルの谷間の虚しさ覚ゆ

玉川大　川尻博宣

山本先生の御講義を聞きて

先生の生命（いのち）かけたる御言葉に耳傾けて身じろぎもせず

第七班

東京工大　植田伸一

山本先生の御講義を聞きて

教へ子に己れの生命を捧げむと決意されにし熱意を学ばむ

亜細亜大　田　村　泰　宏

日の丸を掲ぐるポールゆらめきて立てし友らの労に感謝す

九　州　大　堀　田　真　澄

もくもくとふきあげやまぬ噴煙の奥よりたえず地鳴りきこゆる

鹿児島大　川　畑　良　幸

ごうごうと神の力ぞせまりくるああすばらしき阿蘇の山々

福　岡　大　薬王寺　百合雄

さやうならけふのこの日よ阿蘇の野よ友とつどひし喜びの日よ

阿蘇山に友とつどひしけふの日のおもひのこらむ年過ぐるとも

東京学芸大　田　島　正　行

山田先生の御講義を聞きて

ともすればたゆみがちなる心にも深き言葉は響き迫れる

ひとときの教への光絶やさじと心に誓ひて今日床につく

第八班

亜細亜大　山　口　博　英

サンサンと陽のあたりたる山道を歩く我の背中に汗がにじみでる

九　州　大　十　時　一　郎

立ち止り汗をふきつつ見上ぐれば目指す頂はるかに遠し

疲れたる足ひきずりて一歩一歩溶岩の道踏みしめ登る

頂に坐りて休めばふもとより涼しき風の吹き上げ来りぬ

立　正　大　湯　原　孝

草原で童になりてたはむるれば陽はさんさんと我にふりそそぐ

東京理科大　吉　村　圭四郎

恥しや国の鎮めの君が代を七年ぶりに我歌ふとは

西蔵人ギャルポ君の話を聞きて

君はまたいつか祖国に帰りゆき銃とる人か我より若きに

君あれば永き歴史のいつの日か自由チベット必ずや成らむ

鹿児島大　山　本　俊　一

まだ会はぬ友を思へばわが思ひ期待と不安混りあひけり

顔見知る友が到着せし時は緊張ほぐるるこちするなり

○

ゆつくりとくびをめぐらし我を見る牛のまなざしにやさしさ感ず

東京工業大　五江淵　仁

汗流し火口めざして急ぎ行くいつか心は空にとけゆく

早稲田大　折　原　卓　美

のうのうと牛馬の歩む草千里阿蘇の煙を遠く背にして

九　州　大　前　田　秀一郎

小柳先生の御略歴を御紹介し終へて

日ごろより師に御教へを友皆と賜はりをれると述べずに終へぬ

我ら皆師の御教へを仰ぎつつ共に学びを深めてこしを

つたなかる我らを御家族ともどもに目守り導き給へるものを

第九班

早稲田大　小清水　和　彦

火口よりわき立ち登る白けむり天にあがりて雲となれるか

熊　本　大　南　田　武　法

待ちわびし合宿の日のはじまりて新しき友ら集ひ来りき

何かしらつかみかけたる気はすれどあきらかならぬそのもどかしさ

亜細亜大　朱膳寺　辰　雄

師の語る一つ一つの言の葉の力強さに我が胸おどる

九州大　堤　正弘

雄大なこの大阿蘇でゆうゆうと自然の中を生きてゐる牛

専修大　鈴木　弘

火口にて

おくそこにひきこまれじと下をみて帽子おさふる新しき友

東京工業大　布瀬雅義

山田輝彦先生の御講義を聞きて

先生のお話ききて目の前が急にはれたるここちしにけり

鹿児島大　松山公士

詩を詠む人の心も知らざりし貧しきわれの心かなしき

第十班

九州大　天本和馬

ベマ・ギャルポ君のお話を聞きて

チベットより来りし君は壇上で祖国の危機を強く訴ふ

大国の力によりてチベットの祖国の生命まさに絶えむとす

兄上を他国に連れて行かれしてふ君が思ひはいかばかりなる

古ゆ受けつがれこし言の葉は使ふ能はずと我らに訴ふ

国土までか言の葉までも奪はれしチベットの人の心やいかに

解放をとなふる裏でかくのごと国の生命を奪ひとるとは

かくのごと国奪はれし話聞けば日の本の生命絶やさじと思ふ

熊本大　島田達也

恥づれども敢へて言ひける討論会一夜明けてぞ心さやけき

早稲田大　西沢和明

草原にはしゃぎてころぶ幼な子に幼き頃の我をみたりき

子供らよかけてころぶなと思ふ身の目はいつまでも追ひつづけたり

明治大　笠井勝彦

我が心次第に大きくなりゆきぬ広き海原に立ちむかひをれば

亜細亜大　村田隆和

川井先生の御講義を聞きて

師の君は一語一語に力こめ共産主義の脅威説かれつ

師の君は心をこめて暑き中我一人に語られしがごと

第十一班

熊本大　鍜(かなが)　信弘

求むるものに今触れゐると言ふ思ひしだいに満ちて胸をうつあり

吾が思ひと同じ思ひの若き等が多きを知りぬ阿蘇に集ひて

朝もやに静かに上る日の丸をこだはりとけてうち瞻(まも)りゐる

九州大　志賀建一郎

煙噴く火口の淵に近よりて底眺むれば吸ひ込まるるごとし

立ちこむる白煙風になびき去りかなたの頂ほのに浮び来

白煙の立ち登る方地の底ゆうなるが如き音の聞え来

高くなり低くなりしてうねるごと大地の音の響き聞えく

班別輪読にて

師の君の説きたまひたるみことばを一言にても逃さじと思ふ

聖徳の皇子(みこ)の心を今ここに友らと共に偲ぶも嬉し

読み終り頭を上げてみ友らの顔をし見れば輝

きて見ゆ

五年前この地の合宿で共に学びし後失せたまひし友を偲びて

もろ共に御魂をまつりしこの庭辺に今宵は君が御魂まつらむ

鹿児島大　冨　永　博　志

国人を思ふ情こそ尊けれなべての事のもとにしあれば

早稲田大　松　村　俊　明

夜更けて寝床に友と語りしあと胸の高まりしばし静まらず

火の山の煮えたぎる気に触れてより何やら胸に湧き出づるを覚ゆ

長崎大　松　尾　昭　彦

民族の心にふれし学徒らは日の国求め生命叫ばむ

九州大　桑　野　博　行

阿蘇の山煙吐きたる雄々しさに日本男児の心めざむる

富山大　石　原　昇　治

立ち登る阿蘇の煙は一歩々々近づくごとに雄々しさを増す

亜細亜大　桜　井　源　一

国思ふ同志の意見熱中しつい時間も忘れたりける

熊本大　中　園　幹　也

草青き自然につつまれ中岳ははげしく煙をふき上げにけり

第十二班

駒沢大　柏　木　　宏

都会はなれて阿蘇に来れば公害なき虫の音が清らかに心やすめる

立教大　岩　本　英　亨

高校より合宿のこと伝へ聞き幾年おもひて今日のこの日ぞ

はじめての人と交はり語らひつゝ永き昔の友と思はれぬ

専修大　丸　山　克　己

ひろごれる阿蘇の草原に人や馬遊ぶを見れば心なごみぬ

早稲田大　宮　本　俊　信

耳かたむけて聞きし講義に我は今見つけたるかな学ぶべき道を

慶応大　杉　田　　朗

歌思ひ飯も通らぬ友思ひ人の真心感じたりけり

鹿児島大　仁　多　永　夫

さやかなる風吹きわたる草原に友らとともにしばしくつろぐ

班内のみ友らみなと昔よりの友のごとくになごむうれしき

第十三班

早稲田大　坂　元　重　孝

たはむるる親子の姿見守りてのどかなりける草千里浜

早稲田大　古　宮　　勇

草千里丘かけおりる娘らの顔それぞれに輝きにけり

亜細亜大　沢　田　　健

阿蘇駅に向ふ電車を見し折はなぜか故郷思ひ出しけり

鹿児島大　宮　島　　基

苦労して作りし和歌の評を聞き我が喜びをどこに求むや

熊本大　福　永　好　紀

山本先生の御講義を聞きて

死ぬまでは続けてゆかむと語らるる師のみこころの胸に迫り来

亜細亜大　綿　引　芳　行

緑なる広き草地に馬や牛の放牧したる姿のどけし

鹿児島経済大　久保田　孝　夫

息荒れて登りし阿蘇の火口見ればおのれの心

負けじと燃ゆる

第十四班

九州大　久々宮　章

山本勝市先生の御講義をお聞きして

老ゆる身をかへりみもせず国の為と尽くし給へる御心忘れじ

かくばかり日の本の行末案じたまふ師のお心にむくひざらめや

我が力微力なれどもみ友らと師のお心につながりてゆかむ

鹿児島大　野間口　俊行

初日の国旗掲揚の折に

きのふまで軽き綱が何故かきしみきしみて揚らざりけり

はじめての掲揚なれば友どちにすまぬと思ひて力こめけり

友どちにすまぬと思ひてもう一度綱のよじれをなほさんと思ひぬ

明朝はうまくなさんと友どちと予行演習をくりかへしけり

熊本大　宮田　政徳

ゴオッゴオッと何かあるやと下見れば煙の中に大穴一つ見ゆ

慶応大　戸沢　昭紀

先輩のシャツ破るまで相撲するこの姿にも若さを感ず

東京電機大　杉田　勉

岩坂を登らんとして後もみず汗にまみれて勇み進むも

鹿児島大　福留　純孝

友どちと下りくる岩のすりへりに阿蘇の歴史の思はるるかな

第十五班

九州大　川井　泰彦

ギャルポ君の話をききて

君が国のきびしき様を訴ふる熱き思ひの伝はりくるなり

今まではつゆ知らざりし君が国のこと人ごとと思はれざりき

日の本のことを思ひて述べたまふやさしき言葉に胸のつまりぬ

早稲田大　鳴神　和之

阿蘇の山地の奥間より我が胸に呼びかくる如声の響きす

亜細亜大　佐藤　義典

ひとすぢに今日まで生きし喜びを共に語りてのびゆく吾等

熊本大　武田　博幸

大地より白き煙の吹き出だしかの大空に渦巻き消ゆる

香川大　玉井　健

若人の力と力がほとばしる相撲をとりたるすばらしきかな

東京電機大　山下　穂積

阿蘇山よお前は今も生きてゐる遠い昔の地球の姿か

第十六班

九州大　吉原　琢麿

ごうごうと音をたてつゝ煙はく大阿蘇の山は力強きかな

太陽を隠すは雲か噴煙かあまりのすごさに思はず見上ぐ

熊本大　宮崎　重人

阿蘇火口に登る折

当初にはうちとけざりし友どちを今笑みながら山道を登る

亜細亜大　渋谷　啓一

ペマ・ギャルポ君の発表を聞きて

友どちの身に迫る思ひの言の葉を聞けば胸うち熱くなりゆく

熊本大　高岡正人

ギャルポ君の発表を聞きて
語らるる君の言葉の激しきに胸の高なり覚えくるなり

福岡大　安恒正祥

立ち昇る噴煙見つゝ来てみれば外輪山は遙かなりけり

早稲田大　岩下彰夫

草千里ケ浜
大阿蘇のふところ深く抱かれて吾ひとりでにうれしくなりぬ

慶応大　田中敏博

丘に登り草原歩む人見れば思ひのほかに小さく見ゆる

馬に乗り走れる人を見おろして幼き頃の映画思ひ出す

中央大　首藤潤治

煙吐く火口をながめ思ひやる生きた自然のおそろしさかな

鹿児島大　居細工（いざく）　豊

合宿に集ひし友等と語らへば我が心根はすなほになりき

第十七班

亜細亜大　成田幸太郎

火の山の火口に立ちて下見ればあまりの深さに足すくみけり

福岡大　浅海順二

夜は長し君を想ひて旅の宿今日も一人寝明日も一人寝

明治大　石田弘彦

大阿蘇に登りてみれば白雲の彼方につづく青き山々

熊本工大　北島春嘉

合宿の真夏の日々に友と語り我をみつめてここに生きをり

亜細亜大　杉山勝久

もくもくと煙吐き出す中岳に我の気持ちは圧倒されぬ

慶応大　西高辻信美

輪読会にて
まごころを伝へむとする我が友の熱き言葉にわれもうたるる

九州大　吉田哲太郎

友どちとバスに乗り込み阿蘇山を登りてゆけば心たのしも

なだらかに広ごりわたる草原に牛はのどかに草を食（は）みけり

鹿児島大　松元忠久

昨日まで見知らぬ友と語り合ふこのひとときを大事にしたき

第十八班

福教大　金沢明夫

友どちに思ひのたけを語らんと思へどなどか言の葉出でこぬ

熊本大　藤田克彦

先生の講義聞く毎に我が思ひ音を立てつつ崩れゆくなり

ただつらき苦しき心も先輩と語らひをれば安まりにけり

早稲田大　椎名誠二

苦しさに耐へかねて友と語らへば僅かに心の安らぎを得たり

日本経済短大　北原実

阿蘇の山けむりたなびく美しさそれにも増して空の青さかな

駒沢大　池上輝樹

ブローチを首にかければ友心はだにつたはり快いかな

第十九班

九州大　坂口秀俊

浅かりし我が考への恥づかしさ先生のおことば胸にしみ入る

福岡大　石井真徳

群なして朝もやの中飛ぶトンボなつかしくありうれしくもあり

東京外語大　草場正博

事前合宿後、奥富先輩より電話のありて

受話器よりなつかしき声聞え来て君の御姿胸に浮びく

電話より流るる声にありありと常ならぬ気色あらはれてをり

熱こめて勧めし友が今となりこれぬと君は伝へたまひき

この地にて語らふことの得がたきをわれは知りたり彼に伝へむ

鹿児島大　徳丸雅信

こんもりと茂りし木々のをちこちゆ響きくるかなひぐらしの声

熊本大　溝上郁夫

雄大な阿蘇の自然を見てあればまだ見ぬ母に見せたしと思ふ

亜細亜大　山下一成

先生の国を思はるる言の葉の一つ一つにわれはうたれたり

長崎大　草野健一郎

中岳の火口のふちを巡り行き思はず足のすくむ気がする

福岡大　左藤正伸

はじめての阿蘇の山々窓に見て合宿で得た友とかたらふ

第二十班

早稲田大　福田俊英

和歌つくりやさしきものと思ひしが合宿に来て心改む

亜細亜大　白田正義

講演をものにしようとのぞめどもやがて遠のく先生の声

熊本大　高瀬徹哉

いくたびもたづねし阿蘇の山なれどはればれとする今日の登山は

亜細亜大　村上勤

合宿への車中にて

車中にて坐したる若者に声かくれば彼も同じき阿蘇への友なり

車中にて友の笑ひはたえまなく不安な思ひもいつしか消えゆく

早稲田大　副島辰英

わが心もてあそぶごと阿蘇の山白き煙の昇りたつみゆ

福岡大　山本哲史

火口より噴き来る阿蘇の白煙に見入る我が胸高まりゆきけり

駒沢大　畑中宗仁

虫の音の枕辺にきこえものがなし君一人ゆゑ眠れぬ夜に

熊本大　松田信一郎

班長連絡会の後、班に帰りて

班室にもどればすでに寝入りたる友みな静かに寝息たてをり

班友の寝息にまじりてさはやかに虫のなく音のきこえくるなり

なきやみてまたなきいだす虫の音に聞き入りをれば心やはらぐ

第二十一班

熊本商大　丸山震哉

草を食む牛の親子のむつまじさわが心にはそよ風の吹く

亜細亜大　山田睦彦

なだらかな山に囲まれ大空に煙上げつる阿蘇

の中岳

拓殖大　妹尾恭治

バスの中ガイドの声も聞えずに短歌の想ひにふけるばかりなり

大分大　野田清文

合宿の二日三日と進むにつれ心たがひになごみゆくなり

明星大　石川純男

思ひつく言の葉並べ話せども友の心をうつことできず

鹿児島経済大　森茂木

ゴウゴウと聞ゆる様はすさまじく足もすくみて後にさがりたり

早稲田大　星野幸夫

阿蘇にきて和歌作らんといきごめばことば不足を身にしみて感ず

第二十二班

福岡教育大　大槻身信

開会の時はきつれどすがたなき病みてやゐぬかと心さわぎぬ

先輩もまだ来ぬのかと聞かれたり思ひは同じ後輩のこと

後輩とこの合宿の感激を共に分たむと思ひしものを

國学院大　平田一郎

のび〳〵と夏の日浴びて友がきは牛に戯れ野を走るかな

東京工大　高木英雄

師にふれて何か恐し我が心国を念ぜず友を念ぜず

岡山大安寺高卒　横山光太郎

登り来て心の晴るる思ひする雄大なりし阿蘇の草原

福岡大　原信也

草千里夏の緑に包まれて馬かけめぐり友の顔笑む

鹿児島経済大　北島誠

心より詠まむと思ひし和歌なれど言葉一つに苦しみにけり

専修大　青砥誠一

友どもが「ここのところは分ります」といひし言葉に胸うたれけり

熊本大　坂本精児

友を迎へに阿蘇駅に行きし時

全国ゆ友等をのせし汽車つけばおのづとマイクをにぎりしめけり

マイク持ち呼びかけをればともどもは笑ひをうかべてヤアと手をあぐ

大ぜいの乗客の中より一人一人集り来るはうれしく思ほゆ

第二十三班

鹿児島大　有馬守一

班別討論にて

絶句してうなづける暗き思ひこそ我が国思ふ心なりしか

長崎大　藤富豊

赤茶けた溶岩台地のあちこちにわきでし草にいのちを感ず

山口大　鬼頭富之

親切な友におこされわれはまた筆をとりつつ講義に聞き入る

熊本大　落合隆文

ガイドさんの歌ふ「五木の子守歌」を聞いて

くもりたる阿蘇に登りてきく唄の悲しきしらべに涙さそはる

福岡大　松本道明

御講義に耳かたむくる我が友の美しき姿忘れ難かり

亜細亜大　阿部仁

父母に見せたき阿蘇の山なれど田舎で汗にまみれますらむ

島根大　近藤正史

言霊のさきはふ国に生れたる悦びをわれ輪読

で知る

第二十四班

西南大　小賦　正剛

名も知らぬ人達なれど整列し日の丸をあふげばむねあつくなる

長崎大　富元　典嗣

班別討論をやって

討論でたいした意見は出せねどもただ皆の顔を見ればうれしき

長崎大　吉田　綱一朗

祖母を見舞ひて

しわ多き細き手力こもり来て我も思はずにぎりかへしぬ

専修大　大庭　繁

大阿蘇の夕霧に浮ぶ落日はただおほらかに何をぞ告ぐる

熊本商科大　稲田　数保

火の山の白き噴煙たなびきて雲とまじはり雄雄しとおもふ

東京外語大　森田　秀二

感じたしああ感じたし寂しきや我れ阿蘇の野に思ふことなし

岡山商科大　稲葉　隆志

求むれど求むれどなほ求めえぬこのむなしさを誰か知るらむ

第二十五班

岡山商科大　興原　幸雅

講義中足をつねつて手をつねるが心に反しまぶたは重い

亜細亜大　下山　映二

方言が知らず知らずに口に出る友達とても親しく思ふ

早稲田大　太田　伝男

合宿に来る途中で

旅人の我をもてなす店員のやさしき思ひに心あたたまりぬ

西南大　占部　賢志

ペマ・ギャルポ君の話を聞きて

祖国なき身にはあれども切々と国への思ひを語られにけり

ただ国を思ひに思ふ真心のそのみ姿の胸に迫りく

阿蘇を詠む

のぼりきて煙ふきあぐる大阿蘇の火口の中を今我は見ぬ

ごうごうと響きをたてて燃えさかる地熱のあつさの伝はるごとし

九州大　宝辺　矢太郎

早朝の集ひに行きて目の丸を高く仰ぎて見るは清しき

この世界は正しきことがわからぬと怒りをこめて語り給ひぬ

亜細亜大　和原　邦夫

雄大な阿蘇の山々眺むればいつしか心いとすがすがし

熊本商科大　中園　俊郎

異国の友が言葉の激しさに身体ふるひて力こみあぐ

国思ひ語りたる君の胸内の悲しきまでに伝はりて来ぬ

心よりうつたふる友を前にして我が学びの足らざるを思ふ

中央鉄道学園大　緒方　英夫

熱つぽく語る仲間のまごころが我が心にも伝はりにけり

長崎大　前田　光一

目の前の阿蘇の自然の大きさにひれふすばかりおのれの心は

阿蘇山の自然にふれてなにかしらわが心にひびくものあり

第二十六班

亜稲亜大　菅野　光秋

合宿で友らとともに語り合ふこの体験を我は

忘れじ

岡山商大　山　本　吉　広

雄大な阿蘇の山並み見るにつけ己の力なんと小さき

国学院大　石　井　孝　一

師とともに噴火口をのぞきしとき

中岳の火口をのぞきし先生はすばらしいねと嘆じられけり

先生のくちになされし御言葉にこころをゆするものを感じぬ

亜細亜大　夏　山　相　秀

合宿で見知らぬ友と語りあへば皆生き生きと感じられけり

熊本商大　徳　光　礼　周

バスに乗り阿蘇連山をながむれば噴き上ぐるかな白き煙りを

熊本大　津　田　良　一

初めてのこの合宿へのためらひも友の顔みれば消え去りて行く

真心で我が心を開かしむる良き先輩の有難きかな

第二十七班

拓殖大　梶　原　孝　司

阿蘇山に皆と登りて一時を我童心に返りて楽し

福岡教育大　西　原　正　博

広がれる青草原に寝ころびて過ぎし二日をかへりみるなり

長崎大　小　林　　耐

友どちと草千里浜に集ひ来て語る言葉にこころ通ひぬ

熊本商科大　井　上　弘　次

山本勝市先生の御講義を聞きて

師の君はかくまで国を思はるるに己が心のなんと恥づかし

開会式にて

君が代をひびきわたれと友みなと心あはせて歌ひゆきけり

亜細亜大　桑　原　　務

山道を奥深く進みゆけば心に浮ぶ故郷の山々

熊本大　金　子　　豊

青々と広がり渡る草原に草食む牛は肥後の赤牛

のつそりと路上に入れる牛二匹車きたれど動かざりけり

第二十八班

慶応大　森　　博　重

山走る舗装道路の真中にのそりと歩く牛の親子あり

長崎大　木　下　文　雄

まごころと口にいだすは易けれど努むることのかくもむつかし

熊本商大　浜　崎　重　吉

共々に語りつくして疲れたり残りの二日いかに話さむ

中村学園大　三　角　浩　之

やはらかな雲の切れ間に陽は射してのどかなるかな高原の夏

岡山大　中　島　裕　樹

かみしめて言はれし言葉のその裡に我が身を震はす気迫のこもれり

西南大　田　所　保　雄

足すくみ恐る恐る下をみる阿蘇の火口は我をのみこむ

亜細亜大　本　多　一　也

大自然ここにありと赤牛の遊ぶ姿がうらやましきかな

亜細亜大　冨　沢　君　夫

「うらみに報ゆるに徳を以つてす」と言ひし総統の言葉はただに有難きかな

日の本をかく思ひてくれし人の居る国との仲は永くあるべし

師の口ゆ話出さるる言の葉に心うたれて涙あ

ふれぬ
日の本のつちかはれたる人の道我もこの道を
究めてしがな
一日経ち二日経ちたる班員の心は次第になご
みくるかも
初めは唯外をみつめし友達も今はみんなと話
交はせり

九州大　末次直人

きのふまで見知らぬ友よ今日からは椅子を並
べて共に学ばむ
初めての出会ひなれども日がたつと前にどこ
かで会つた気がする

第二十九班

大阪大　草地芳孝

山麓に草を食みつつ牛馬は唯悠然たりうらや
ましきかな

国際経大　根岸正幸

故郷を一度(ひとたび)離れて偲ばるる我が家に一人老い
し母親
日の本の濁乱の世を救はんと示し給ひし御心
を偲ぶ
偲びてもなほあまりある御心に頭さがりて言
葉いでこず

下関市大　幸尾兼次

阿蘇に来て
故郷に思ひ残して旅立てば阿蘇の裾にも霧が
かかりぬ

熊本大　荒木保光

箸わすれ手で食う味のおにぎりで疲れ休まる
草千里かな

立教大　青木修

中岳に初めて立ちしこの我は目をみはりたり
その雄大さに

長崎大　鈴木志郎

日の本の心を忘れし教への場いかに育たん日
の本の子等は
教師道いかに苦しくも先達(せんだつ)の思ひを胸に今日
も励まむ

中村学園大　武藤喜彦

耳に聞く大山(おほやま)阿蘇の姿見て聞くほどよりも我
が胸驚く

第三十班

慶応大　重松賢一

のどかなる阿蘇草千里に立ちをれば山のふも
とに牛の群れ見ゆ
横腹に文字書きこまれし牛たちはやさしく静
かな目(まなこ)してをり

熊本大　池田辰男

噴火口何をか言はん音たてて見る人々の心さ
わがす

駒沢大　村端圭二

来てみれば風が伝へる草の香に食事もはずむ
草千里の丘

福岡大　早野好典

夏の香を運んできたる風の中のどかにさまよ
ふ放牧の牛

亜細亜大　渡壁勇三

夏の阿蘇友どもと共に中食し草くふ牛に心や
すらぐ

亜細亜大　佐藤文彦

噴火口煙の影にけしき消えその壮大さに心う
ばはる

鹿児島大　梯(かけはし)祥郎

足下に地鳴りをたててひびきくるそのとどろ
きに身ぞひきしまる
見おろせば底のあたりは見えずしてにほふ煙
を吹き上ぐるなり
風変り煙の裂けて岩肌の黄色き石の目にとま
りけり

はじめて班長をして

熊本大　白浜裕

班長会義をおはりて部屋に帰りくれば友等は

すでに床につきをり
連日の討議に友等は疲れしか身じろぎもせず
寝息たてをり
我もまた寝ねんとすれば隣りより「ごくろうさん」てふ友の声ありき
その友は寝ねずに我を待ち居りしかその心尽しの嬉しく思はる
班長にはじめてなりし我なれば積りし不安の消ゆる心地す

熊本大　田中千鶴

第三十一班

二三本ゆふべの野辺にて摘みし花けふ山肌に乱れ咲きたり

長崎大　中野陽子

草千里馬の足なみかろやかに我も思はずかけだしてゆく

鹿児島大　小山さよ子

ゴーゴーとうづまきのぼる白けむり我小さきかな大阿蘇の山

鹿児島大　山下律子

討論の机の花に友達のやさしき心こめられてあり

明治大　野中正子

吹きわたり身に風涼し草千里車とめたる親子牛のゐて

熊本短大　長野直子

講堂に響きわたりたる君が代の尊きしらべの胸にしみゆく
朝空に招かるるごと上りゆくうつくしきかな日の本の旗

明星大　尾形真理子

丈夫の熱気を肌に感じつつ我が身に問ひし明日の日本を

日本経済短大　光本智恵子

ひぐらしの声をききつゝ秋の日の近づきくるを我は覚ゆる

鹿児島大　村山紀子

師の心はりつめし糸の響きのごと迫りくるなり何をか求む

東京女子美大　辻宙豊

阿蘇に来て夜汽車を聞きぬ山の宿なぜかしみじみ胸にしみけり

第三十二班

駒沢大　榎園シゲ子

はてしなくつづく山々ながめてはじつとうたれてなみだぐむなり

成蹊大　開由紀子

よろしくとあいさつかはすつかの間に心もなごむ名も知らぬ人と

熊本大　山本圭子

青々とした緑の芝生にぽつぽつとほほえみさそふ黄と桃の花

鹿児島大　内山なな子

山本先生の御講義をききて

遺言と心たくして語らるる師のおもひをばわれら果さむ

合宿への途中、加藤清正公の植ゑられしといふ杉並木をみて

いにしへのひとのいのちを継ぐがごと雄々しくのびる大杉並木

日本経済短大　佐藤洋子

新しき友の顔みて話す時なつかしささへ浮びけるなり

法政大　中村裕子

人影の小さく見ゆるその内に阿蘇の自然を感じられける

九州大　畦森雅子

草原のあちらこちらを牛や馬ののそりのそりと歩きをりたり

福岡女大　有馬節子

灰色のあらき岩はだ見上げつつわれら登りぬ阿蘇の山道

鹿児島大　川井治子

息せききつてのぼりきたりし我がほほに山頂

の風快く吹く

第三十三班

法政大　忽那君枝

雄大な阿蘇の牧場に寝る牛の濃い烙印がああ哀れなり

佐賀大　多久島幸世

我が知識のあまりの未熟に驚きつつ先生の御言葉に耳を傾く

鹿児島大　上原美香

ありのまま心のうちを師は語らるただひたすらにわれらをおもひて

明治大　鈴木典子

白煙を立ち登らせつつゴーゴーとうなる火口にわが身震へる

熊本大　新小田昭子

自然

このときも自然はただそこにありだまつて静かにそこにあり
われとてもその生命の一なれば坐してなんじとかたりつくさむ

桜美林大　上野薫

いま友と登れる山は七とせ前ケーブルカーで登りし山なり

鹿児島大　栗原淳子

待ちわびし友来らずと聞かされてひとりさみしくその身を案ず

長崎大　山村和子

起伏なす緑はるかにうち続き遠く噴煙薄雲の如し

玉川大　佐原深雪

集ひ来て共に語らふ友どちと時たつにつれ心なごみぬ
阿蘇の山その雄大さを友どちとクレパスもちて一心に描く

第三十四班

福岡女子大　高井良泉美

歌つくる友らの顔のきびしくて口かず少く考へなやむ

長崎大　松本智子

はろばろと道を求めてつどひこしあまたの友みてうれしさまされり

熊本大　小原ひとみ

涼風のふきわたる谷若人の高き雄たけびこだまとなれり

玉川学園女子短大　横山久美子

御講義を終へて一路阿蘇山へ登れば巨大な噴火口のあり

上智大　重松智子

はなたれて緑の原に草食ふ牛らの様ののどかなりけり
牛の背のその各々に持ち主の名をば大きく書きつけてあり
たちどまり歩みてゆくも子の牛は親牛の後についてゆくなり

鹿児島大　田畑裕子

ユリ一つ見つけたるかな一つにてもなどて心のかくもやすらぐ

日本経済短大　中島美穂子

噴煙にむせぶ中より見入りつつとけゆかむとするわが心かな

第三十五班

法政大　矢野典子

夕焼けに静かに染まる我が足をそつと見つれば何故かさみしき

玉川学園女子短大　関野みさを

合宿に集ひし友と語り合ふ見知らぬ人が今や心の友に

明治大　高橋左知子

牛遊ぶ草原に寝てみあぐれば強き光の雲よりさしぬ

延岡短大　長　畑　秀　代

もくもくと白煙をふく阿蘇の山自然の神秘を我は感じつ

鹿児島大　永　吉　尚　子

牛と馬誰が先生子供だろ広い野原で仲良しこよし

福岡大　大　原　れい子

輪読に発見をなす友をみる皆のまなざしまぶしくおそろし

熊本大　吉　永　美　子

連れ添ひて歩く牛の背に故郷(ふるさと)の父母の様子が思ひ出さるる

熊本大　有　馬　涼　子

中学で一度登りしあその山は今目の前にせまりつつあり

日本経済短大　宮　崎　恵　子

のろのろとあゆむ子牛をながむればわれの心はやすらぎにけり

鹿児島大　鈴　木　由美子

友どちの到着まだかといくたびも部屋をのぞきつつ心あせるなり

我の名を呼び来る友の目かがやきなにもいはずとも心安まりぬ

第三十六班

東急建設㈱東京支店・技師　苅　谷　光　也

阿蘇に登りて

合宿の友等と共に登りゆく阿蘇の岩路のかかる楽しさ

八代・第七中学校教諭　中　村　智

中岳の頂にて

ひややかな朝の冷気に目覚むれば阿蘇の外輪霧にかすめる

勤労青年研修会職員　下　村　祐　毅

草千里牛馬の糞のをちこちにいとめづらしくのどかなりけり

熊本・藤園中学校教諭　上　原　正　弘

力ある講義のたびにわが心開くを感じうれしかりけり

なににつけ声かけくれる友だちのその一声のありがたきかな

千葉三郎・秘書　佐　藤　哲　章

旅ゆきて緑のすその高原に赤き牛群れて草はむを見る

福岡・八女津女子高教諭　小　川　信　広

火の国の阿蘇のすそ野はどこまでも緑のはえて止ることなし

㈱高田工業所・社員　田　中　晢　博

夏の陽をあびて遊べる子供等の馬の背中にこはゞゝと乗る

久留米・西国分小学校教諭　木　下　啓　作

なつかしき我がふるさとを思ひだし父母をしたひて一人悲しむ

第三十七班

八代・第三中学校教諭　清　田　宏　二

観光バスの窓より見ゆる赤茶けしその岩肌に古きしのびぬ

太古より活動続けし大阿蘇の古き伝へに耳を傾く

朝日瀝青㈱・本社社員　永　沼　明　彦

我が心清むるごとき言の葉に思慮の浅きを痛く感ずる

熊本・松橋養護学校教諭　大久保　了

雄大な生命(いのち)湧き立つ火を見ればおのが心のせまさ覚ゆる

日本遺族会・企画部職員　川　俣　正　憲

草原で弁当食べつゝはるかなる古き昔を思ひだすなり

熊本・阿蘇中学校教諭　森　田　秀　典

ベマ・ギャルポ君の話を聴きて

奪はれし祖国の再興思ふ友の激しき熱に心う

たるる

久留米工業高校教諭　今　野　政　紀

もの言へぬ眼にも想ひは籠るらしとく育ちゆけ愛しき吾子ら

久留米・鳥飼小学校事務主事　久　保　東　彦

つたへきく阿蘇の火山の雄大さ我今立ちて胸せまりくる

第三十八班

航空自衛隊第四術科学校職員　平　山　沙代子

大阿蘇に我は来にけり眼細めて何語らふぞ親子の牛よ

八代・第六中学校教諭　宮　川　麗　子

いくたびの登山の折に思ふもの自然の力にまたもやおどろく

熊本・山鹿中学校教諭　田　中　　宏

果てしなき大草原で和歌をよむ青年の顔は美しきかな

熊本・岱明中学校教諭　中　村　文　雄

草千里広い牧場にたはむるる親牛子牛のどかなりけり

久留米・荒木小学校教諭　毛　利　哲　男

合宿の参加前より気にしたる和歌よみおはりあざみうつくし

サンアロー化学㈱徳山工場社員　佐　藤　　茂

国想ひ阿蘇に集ひし同胞が高原に憩ふ時ぞ楽しき

新日本製鉄㈱八幡製鉄所社員　吉　山　隆　矩

一言一言胸に迫りくる御教へを今日よりいかに生かさむかと思ふ

八代・第二中学校教諭　松　村　研　治

チベットの留学生のうつたふる光るまなこに我も応へむ

久留米商業高校教諭　川　浪　保　守

合宿で聞きし講義におどろきて手も足も出ず心苦しき

第三十九班

熊本・南関南中学校教諭　松　尾　元　史

悠久の噴煙は消えじ大阿蘇で国の行く末語るは楽し

祖先より守り継がれしわが任務如何に残さむ後の世までも

大阪商業大学・学生部職員　栂　井　芳　清

遠き日のラッパの響き胸に湧く国旗静かに昇り行く見れば

地の底の遠き唸りを伴ひてうづまき上る白き噴煙

熊本・画図小学校教諭　塚　本　　忠

朝霧に集ふ仲間の真の顔今日もやるぞとちかひあふかな

久留米・安武小学校教諭　片　岡　充　好

案内より聞きし古大阿蘇の自然の偉力あらためて知る

八代・松高小学校教諭　草　野　　実

大阿蘇のすずしき風のそよ吹きてなでしこの花ゆれてなびきぬ

火口に立つ吾が足もとに大いなる地底の響き伝はりにけり

久留米・御井小学校教諭　弥　永　九州男

やけ土をふみしめながら登るとき熱い講義を思ひ出してをり

旗風社・鴻巣寮　松　本　効　三

噴煙の如くそだてとわが子らに願ひをこめて文を送らむ

久留米・南築高校教諭　白　木　勇三郎

大阿蘇の噴煙は今そこにあり溶岩の道ふみしめ登る

萩・建築業自営　水　津　　茂

草原のみどり目にしむ大阿蘇に群がる楽し牛馬のむれ

噴煙のつくることなき渦巻きは天にのぼりて雲とまがふも

第四十班

熊本・八代小学校教諭　市　村　武　元

大阿蘇にのぼりゆくみちの両はしにきびしさにたへて草の生きをり

萩工業学園専門学校校長　藤　井　震太郎

チベットの友の祖国守らんと叫ぶ目が烈しく燃えて我が胸を刺す

先達の残せし書物ひもとけば我驚けり字義の重さに

福岡・八女津女子高校教諭　吉　田　文　紀

久方に聞きしいにしへの言の葉の美しきとぞすなほに思ふ

熊本・高平台小学校教諭　積　　芳　孝

汗ばみて友と登りし火の山に涼しき風のここちよきかな

熊本・湖東中学校教諭　野　村　竜之助

ひたすらに真の道を求めむと我は来にけりこの阿蘇の山

久留米・金丸小学校教諭　古　賀　重　三

雄大な阿蘇に登りし道の端にふと目にとめし笹竜胆の花

八代・金剛小学校教諭　谷　川　成　孝

合宿生の登り行く姿を下より見て

大阿蘇の雄々しき姿にくらぶれば登りし人の蟻のごと見ゆ

第四十一班

久留米・京町小学校教諭　平　野　正　則

るいるいと赤き岩肌打ち続くあその火口にわれは登りつ

ごうごうと音とどろかしふきあぐる阿蘇の火口にいまわれは立つ

久留米・櫛原中学校教諭　中　園　健次郎

えんぴつをなめなめ歌を作りをる友は停りて空を仰ぎぬ

久留米・諏訪中学校教諭　坂　口　信　男

なつかしき肥後のなまりをききをれば祖父母に抱かれし昔思はる

熊本・南関第三小学校教諭　赤　木　忠　明

大阿蘇で共に語りし我が友の若き力ぞたのもしきかな

今日もまた語りつくして灯はきえてしばし思ひは家路に走る

熊本・菊水西小学校教諭　竹　下　晨　吾

憂国の情傾けて語り給ふ老師の姿かがやきて見ゆ

熊本・山鹿中学校教諭　志　水　公　文

噴火口はまはり一粁ひだ深く黄煙巻いて地鳴りせるかも

火口底のかすかに見えてまたかくる地球の声か唸り声する

久留米工業高校教諭　橋　口　幸　夫

合宿二日目の朝

同室の人みな心なごみたる阿蘇の朝霧やはらかに見ゆ

熊本・三加和中学校教諭　橋　本　雄　二

合宿の夜重なりて思ふはただ遠くさかりしふるさとのこと

熊本・託麻中学校教諭　山　田　芳　弘

病める妻残してつどひにきてみればみなひたすらに学びつつあり

第四十二班

久留米・宮ノ陣中学校教諭　古　賀　忠　治

友ときてみたび眺むる草千里心やすらぎ時を忘れつ

熊本・八代第二中学校教諭　山　田　照　夫

大阿蘇の映ゆるみどりにのんびりと草はむ牛のうらやましかり

熊本・壺川小学校教諭　右　田　義　臣

大阿蘇のふもとの宿にうち集ひ祖国のゆくてを熱こめて語る

久留米・篠山小学校教諭　松　尾　哲　夫

友どちと集ひてうたふ君が代にただ我が心ひ

きしまるなり

熊本・若葉小学校教諭　西　村　忠　之

息づまるスケヂュールの合宿にいにし時代のファイトをぞ想ふ

久留米・櫛原中学校教諭　大　場　勲

奥深き阿蘇のみ山に来てみればはや告ぐるかな秋の虫の音

熊本・玉名・木葉小学校教頭　古　田　清　敏

国文研朝のつどひに霧はれて目の丸の旗風にはためく

熊本・玉名中学校教諭　徳　丸　隆　昭

友と来てたなびく煙を望みをれば遠き古のことぞ想はる

大学教官有志協議会

亜細細大学教授　夜　久　正　雄

朝ぞらにしづ／＼のぼる日の丸をともにあふげばいのちさわだつ

吹きわたる風にふかれて草千里みどりの広野を友らとながめつ

わきおこる噴煙そらにうづまきて地底にたぎるものおと聞ゆ

噴煙のうづまく底にたぎつらむもののひゞきのおそろしきかな

噴きあがり空にうづまきもりあがる白き煙の動きやまずも

○

もろともに心つくしてすぐしたる日々をかたみにあひ別れなむ

わかきらが泣きみ笑ひみ語りあふ意見発表涙ぐるまるゝ

亜細亜大学教授　梶　村　昇

山本博士のお話をうかがひて

たまきはるいのちの限りこのことをいはでおかじと君はのたまふ

信なくば国はたゝずと日の本の行くへ憂ひて君は説き給ふ

九州大学助教授　山　口　宗　久

最後の夜の集ひにて

ストームに寮歌に酔ひしそのかみの七高生われよみがへる思ひす

国民文化研究会

八代市助役　加　藤　敏　治

宝辺兄に

吹く風に夏草群はそよぎつつ阿蘇国原は夕まけにけり

夕鳥の鳴く声絶えて虫の音のしげくなりゆく日ぐるる原に

にぎはしく友らと語り笑ひつゝあれども淋し君しあらねば

なぐさめの言葉も知らにたゞ君のたへえぬ苦しみ偲びつつをり

君います方を思ひて眺めやる外輪山は夕がすむかな

福岡・修猷館高校教諭　小　柳　陽太郎

山本先生の御講義をききて

遺言を残すおもひに語らむとのたまふ聞けば心うたるゝ

老いの身の老いを忘れて憂へますみすがたみれば胸迫りくる

おぞましき報道管制のもとぬばたまの闇ゆくごとしわれら国民

外つ国のおもひのまゝに操られ生きゆくものかつかさびとらは

戦ひ敗れしゆ時すぎゆけど長き長き日の本の眠り未ださめずも

○

みなひとの心つくして営める合宿教室は今し終りつ

ひととせのおもひかさねし合宿の終ると思へば胸の迫りく

はてしなきいとなみなれど合宿の終るを思へば心やすらぐ

遠くさかりて来ざりし友も心こめてみ歌給びにきわれらを思ひて

合宿は今し終りぬ今は亡き友らみおやらの厚きまもりに

岡山・岡山東商業高校教頭　名越二荒之助

浜田副理事長に

ゆたかなる力を秘めて合宿の運営事務に捧げ給へり
合宿の講義にも出ず事務局で陰の力に甘んじ給へり
閉会のあいさつに立ち正成の一人生きてありとふ言葉もて結ばる

熊本県林業研究指導所研究部長　瀬上安正

火口より吹き上ぐるけむりうづまきつ風のまにまに雲につらなる
底深く地鳴りとよめば一きはに白煙高く空に上りぬ
永却の昔のまゝに地底より吹き上ぐる煙いつかしきかな

島根県・玉造・こんや旅館主　青砥宏一

山の上に広原開けさみどりの小草しげれる草千里はも
この原にすめる牛馬草原の沼のわき水のみて暮すか
太腹におのが名を書き大道をのしてゆくみゆ赤牛四匹

友らを送る

集ひこし友かへりゆく友どちと別れの言葉あひかはしつつ
まがりかど友は消えゆく地の塩となりて萌えんをひたにいのりつ
大空に雲たちこめて大阿蘇の嶺のとがり秀きびしかりけり

佐賀・佐賀工業高校教諭　末次祐司

班員一人一人に

をちこちに別れ住みても国思ふ一つ心にはげみゆかなむ
素直なる幼心を忘るなく学びの道につとめゆかなむ

福岡・宇美商業高校教諭　小林国男

ベマ・ギャルポ君

壇上に祖国をしのび語ります君が眼のすがしかりけり
今はなき祖国を憂ひ日の本の若き友らに語りかくるも
中共に侵されゆきしチベットの話を聞けばいきどほろしも
兄君もとらはれゆきしてふ君の身のかなしき思ひを胸に秘めけり
いつの日か祖国独立の夢をひめはげみゆく君志士の如しも
ゆたかなる日本語つかひ語りゆく君同胞の如くしたしき
チベットは大乗仏教の国なりと聞けばいよいよしたしみのわく
合宿につどひし若きみ友らにまじりて共に学びたしといふ

㈱小松電子金属・技師　小幡道男

班別最後の別れの折

拙かる身にしあれどもとこしへの国の生命を求めゆかなむ

兵庫・武庫高校教諭　寺川真知夫

今林賢郁君の発表を聞きて

吾がものと確かめしこと語りゆく友の言葉にひかれゆきけり
友の心深まりてあり吾が三年うかつに過ししその間にも
友の言葉にうたれしといふ人言におのづと心愉しくなりぬ

㈱東急建設・技師　奥富修一

小田村先生の御講義を聞きて

ふりしぼるごと師の君のひたすらなみ声ひびき来わが胸内に
思はずも涙こみあぐ師の君の熱き心のいよよ寄せきて
語らるるみ声ひときは高まりて熱き思ひのこ

みあぐるなり

福岡・嘉穂高校教諭　小野吉宣

ベマ・ギャルポ君の話をききて

チベットを独立させむと亡命し機会待ちゐる君が目きびし

○

声合はせ心を合はせ君が代を歌ひてゆけば心たかまる

大阪大学・文学部研究生　東中野　修

ベマ・ギャルポ君の話を聞きて

チベットてふ国はもともと独立の国なりと強く訴へ給ひぬ

○

友どちにささへられ生くるよろこびを語らむとすれば胸のつまりく

新日鉄八幡製鉄所・社員　今林賢郁

さかしらな心を去りてとこしへの御国のいのちにつながるかしこさ

熊本市企画広報部長　徳永正巳

熔岩に足すべらせてあへぎつゝ尾の上に来れば風さやかなり

頼もしき抱負を語る新しき若き友得たり道連れにして

鹿児島大学教授　川井修治

合原君に

自らの汲みにし湯茶をわがためにゆづりてくるる君が情はも

野間口君に

山登りに加はりもせで祭り場の仕度が君のならひとなれり

東京・㈱安信不動産・常務取締役　松吉基順

吾子への手紙に記して

吾子はいま和歌山あたりの海辺にて従兄らとも泳ぎてあるか

父はいま阿蘇のみ山のなかほどの草千里ヶ浜にたたずみてあり

緑なす草千里ヶ浜のをちこちに静かに歩む牛の群見ゆ

親子づれの牛の群ありよりそひて歩むを見れば吾子の思はる

親牛にほほずりをして離れざる子牛を見れば吾子の思はる

熊本・南関高校教諭　片岡　健

噴火口の底ゆ噴きあがる白煙のうづまく様をしばしながめつ

ときをりに白煙の去れば底ひにはたぎりとどろく噴火口見ゆ

鹿児島・㈱新川組・社員　湯通堂　義弘

慰霊祭にて

国の為命を捧げし人々の御心を継ぐと師はのべたまふ

魂祭る心に還り立ち還り日々の務めをつくさんと思ふ

熊本・砥用東中学校教頭　北島道治

合宿を終りて

胸の中にこもりておけぬ喜びをいまし綴りて山を下るも

声なき友の声

胸つまり黙して語らぬそのしゞまに涙し流る何としもなく

熊本・京陵中学校教諭　松浦良雄

奥富君の発表をきゝ慰霊祭にのぞみて

発表を聞きにし後の祭壇に己がつとめをはたすと誓ふ

佐世保市交通局・職員　朝永清之

班員の去りし後の班室にて

友等みな去りゆきしこと知りつゝも部屋なつかしく足をはこびぬ

五日間共にすごしゝ友去りて合宿の部屋さびしくなりぬ

友去りて空部屋となりし班室に夏虫の声しげく聞ゆる

空部屋にたたずみをればなつかしく友等のすがたよみがへりくる
おのおのが心をこめて語りたる昨夕のさまのよみがへりくる

横浜・平沼高校教諭　福田忠之

静かなる大阿蘇の中今まさに大合宿は終らむとする
静けさの中に小鳥の声聞ゆ密辺見やればほほじろ一羽

福岡・久留米大学付設高校教諭　合原俊光

山本勝市先生の御講義を聴きて

この話わが遺言と思ひ定め語らむとのたまふおもわきびしき
御言葉を聴きゆくうちに国運の危機ひしひしと胸に迫り来

担当した女子班の諸姉に

とつとつと思ひのたけを語りゆく友の言葉に皆聴き入りぬ
ますらをの中にまじりてひたすらに励む姿を頼もしと見つ
いましらを送りたまひしたらちねの思ひしのびつゝ我すごしきぬ
たらちねのもとに帰らば合宿の様子つぶさに語りたまへや
このえにしはぐくみゆかむまごころの歌よみ交はしふみ交はしつゝ
をみなごの心つくしてしきしまの国の生命を守り伝へよ

亜細亜大学・学生部職員　山田健一

閉会式を終へて思ふ

合宿に集ひし友らと今ははや別るる時の来しかぞと思ふ
素晴しきこの集ひをば日の本の津々浦々に皆と広めたし

大阪・清風高校教諭　白江恒夫

今日よりは古人の心をば己が心の支へにしたし
今日よりは古人の心をば大切にして生きたしと思ふ

(有)化光製作所・専務取締役　丹沢文夫

高原の緑の草におほはれし雄大な阿蘇あゝ雄大かな

富士学院・学務部長　加部隆三

草千里にて

草千里右に左に見はるかす丘にぞ立てる行幸記念碑

(株)講談社・社員　磯貝保博

若きらは手はずととのへ順序よく作業すすめぬ力あはせつつ
わが言をすなほにききて若きらの動くを見れば力わくなり

大阪地方検察庁・検察事務官　岸原重二

草千里にて

見はるかす大草原(おほくさはら)のあちこちにさも楽しげな牛のむれ見ゆ

鹿児島・鹿児島高校教諭　徳田浩士

阿蘇登山の折

こもごもに写真撮りあふ友達のおもはほころぶ阿蘇の中岳
われもまた友のおもわのなつかしくうまく写れとシャッターを押す

国民文化研究会・副理事長　浜田収一郎

やむなくかへる友を見送る

友らみな阿蘇山に向ふバスたちて静かになりぬ事務局内も
もの音のたえし宿ぬちひとりかへる友ありさぞや心残るらん

福岡・八幡西高校教諭　村田英雄

松本唯一先生にご挨拶して想ふ

軍国の母を助けてシドニーに行かせし人をまのあたり見る
老体をものともせずに異国まで行かれし意気は若人の如し
末永く健やかに生きて若人を導きたまへと念じまつりぬ

㈱竹中工務店・技師　稲　津　利比古

日の本の行く末あんじて語らるる講師のことばに胸あつくなりぬ
遺言と思ひさだめて語らるるその思ひをば受けつぎゆかなむ

神奈川県・舞岡八幡宮・宮司　関　正　臣

中岳第一火口壁に立ちて

大地の底のいのちのうそぶきを今聞くごとし凄きその音
たゆみなく噴き上げてくるその煙果てなく上り空につらなる

開会式理事長の教へを承りて

現身の耳を傾け聞くといふその教へはも身にしみにけり
昨日の日も地位も齢も打ち忘れ今の現にまことをこめむ

拓殖大学大学院　村　山　寿　彦

海行かば歌ふたびごとこみ上ぐる熱き思ひに胸はつまりぬ
大阿蘇のふもとにつどふわれらみな国のいのちを守らんと誓ふ
国のいのち守りゆかんと誓ひをれば祖先のみたま鎮りてあれ

亜細亜大学・広報室係長　山　本　忠　士

日の本の道を説く師の言の葉にひらかれてゆく心おぼゆる
若きらに祖国の行く末憂ふる師の生命かけたる言の葉しみる
うつせみのこのうつせみのまよひより生くべき道を求めてぞゆかむ

富山県・高岡ろう学校教諭　岸　本　　弘

ベマ・ギャルポ君の発言を聞きて

祖国思ふ悲しき思ひ訴ふる君が言葉は高まりてゆく
いきどほる胸の思ひのあふるるか体をゆすり訴ふる君
ひとすぢに祖国を思ふ君が思ひわれらが胸にもひたにせまれり
われらまた君に負けずにこの国を憂ふる民となりて生きなむ

○

友ら今如何なる思ひつづりゆくや別るる間際に感想文書きをり
長きとも短きとも思ふ五日過ぎいつしか六人の心通へり

神奈川・新城高校教諭　山　内　健　生

山本先生の御心に心うたる

わがいのちいくばくもなからんといひたまふ師のみ言葉の心に残りぬ
いまはただ日中問題に全力を傾けをると三度ものたまふ
ものを書き話すときには遺言になるかも知れぬと思はるるとふ

○

合宿の始りゆけば班長のおもきつとめに身のひきしまる
班室に帰りくれども御講義のレジメを離さず見つむる友あり
ひたむきにレジメを読みゆく友達の眼鏡の横顔心に残りぬ
口数の少けれどもその友の言葉に偲ばる友の胸内
全体の意見発表にその友が立ちて話すを見るはうれしも

㈱宇部興産・技師　内　田　厳　彦

小田村先生の御講義を聞きつつ

己が身をかへりみずして危かるみ国守るてふ聞くも悲しき
胸内の高鳴り覚え聞き入れり祈らるるごとき御想ひなれば
危かるみ国の末を思はずて過すべきやは力の限り

㈱戸田建設・技師　青　山　直　幸

己が国を侵略されしかなしみを目にたたへつつ君は語れり

脈々と守りきたりしチベットの言の葉さへもうばはれしとは
中共の真の姿を知らさむと声をふるはせ君は述べたり
しづやかに合掌をして壇を降りし君の姿の尊く覚ゆ

神奈川・愛川東中学校教諭　原　川　猛　雄

絶え間なく低き地鳴りして白煙の地のさけ目よりふき出せる見ゆ

草千里にて

をちこちに赤牛や駒のむれをりて草はむ姿のどけき心地す

神奈川・小田原郵便局・職員　松　本　洋　治

あわただしひとひひとひを今日をはり今まさに山おりなむとする
山おりなむこの大阿蘇の合宿のことばの緊張胸にひめつつ

アサヒビール九州支店・業務課主任　坂東一男

六月四日O・B諸君に檄文をしたたむ

大阿蘇の合宿めざして総力をつくしたまへと友等に文書く
友達の顔思ひ浮かべつつ檄文の一語一句に思ひをこめぬ

横浜翠嵐高校教諭　国　武　忠　彦

今林、奥富両兄の発表をききて

友どちの語る言の葉せつせつとまことこもりてこころ躍動す
ひとりでも多くの友をと誘ひたる君の一念いま聴かれけり

熊本・藤園中学校教諭　北　島　照　明

山田先生、弟君危篤の為に合宿中途で帰らる

弟が危篤になりたるとのたまへる御言葉はつかにふるへたまひぬ
靴をはき今しも宿を発ちたまふ師の御心はさぞやと思はる
かかること御心のうちにおさへつつ御国の末をひたに語られしとは

㈱千代田コンサルタント・営業部次長　上村和男

次々と草千里にバス着きたるもまだ来ぬバスの心にかゝりぬ
バス降りて千里が浜の草原に友どちはひるげのにぎにぎしくて

東京工大・大学院学生　大岡　弘

ベマ・ギャルポ君の発表をききて

悲痛なる思ひ述べつつみするゑたるそのまなざしのするどかりけり
子供らは五才をこえると中共に連れさらるてふ話悲しも
中共の人とちぎりを結ばねばならぬ民らは悲しくあるらむ（編者注、チベット人相互の結婚はゆるされない）
自らの言葉も貨幣もうばはれて異国のもとに祖国のあるとは
自らの心を托す言の葉の使へずなりてさぞつらからむ

㈱大成建設・社員　山　口　秀　範

避りあへぬなりはひゆゑに遅れゐてホームに立てば胸の高鳴る
わづかでも疲れ取りたしと思へども心たかぶり眠られもせず
次々と友らの顔も浮かび来て心はるかに飛び行く心地す

㈱安田火災海上保険・社員　開　克　史

身をけづる思ひで世をば正さんとつくされし御心つたはりくるも
つたなかる身にはあれども古ゆ先人の道うけつぎゆかん

新技術開発事業団・職員　野間口　行　正

山本先生の御講義を聞きて齊総統を偲ぶ

敗戦に打ちしほれたる国民にいつくしみの手をさしのばされたり
慈しみの心によりてわが国の分断統治を避け得てうれし

国柄は国民の意に従ふべしと説かれし御言葉
忘らえめやも

事務局

国民文化研究所・職員　永　沢　弘　子

うつむきて筆走らせる人々の前に積まれし紙
の高さよ

絶え間なき筆の動きに何もかも忘れてたゞに
急ぎけるかな

共立女子大・学生　松　尾　新　子

忙しき日程のあひ間に顔見にとたづねてくる
る友のうれしき

岡山工業高校　三年　福　田　忠　光

合宿で多くのことを学びたりガリ切ることの
むづかしきことも

熊本県・南関高校　三年　池　上　洋　二

故郷をはなれ来ぬれば我が心阿蘇の煙に家路
思ほゆ

熊本県・南関高校　二年　栗　山　洋

大阿蘇の頂まだかとたづねたる友の額にいく
すぢもの汗

熊本県・南関高校　二年　江　藤　恵　子

夏草のしげりたりける草千里大峰阿蘇によろ
こびつのる

南関高校　一年　江　藤　章　子

たちこめるけむりの前にたたずんで真近に噴
火しばし見入りぬ

白鷗高校　一年　三　沢　沢（たく）　三（み）

阿蘇の風暑き我が身にしみわたりふだんのつ
かれ忘れさせたり

修猷館高校　二年　小　柳　志乃夫

高原を下り行くバスの窓辺には向ひ吹きくる
風の涼しき

広ごれる阿蘇谷のかなた大観の峯の姿はもや
にかくるる

ふりかへれば烏帽子の山の頂は薄暗き雲にお
ほはれてあり

久留米高校　一年　山　口　尚　志

事務局の仕事忙し疲るれどお役に立てばと嬉
しかりけり

久留米市城南中　三年　山　口　道　生

できるかなこはごはきりしガリ板のできあが
りみて胸なでおろす

（記録班）最高裁判所秘書課・職員

西　川　伍　朔

木内先生

自らを少数意見と誇らしげに語る老師のまな
ざし清し

（写真班）福岡大学・学生　鶴　信　彦

やまなみをはるかに越えて友の集ふ阿蘇の火
の山われは忘れず

見学参加者

福岡県・会社社長　伊　佐　五　平

国思ひ阿蘇につどひし若人のあつきことばに
心うたるる

中共に国奪はれしチベットのこの青年に力貸
したし

あとがき

秋も日ごとに深み、阿蘇で相会した皆さんが、いまどうしてをられるか、なつかしく思はれて来ます。この「文集」の編集を単独でお引き受けしたときには、有難い仕事と喜び勇んだものでしたが、やはり生業を持つ身の悲しさ、約一ヵ月半を費してしまひました。その上、カメラ・レポートの選および文と、巻頭の〝第17回合宿教室のあらまし〟とでは理事長に多大の統括作業を煩はさざるを得なかったことを、申訳け無く思ってをります。

参加者全員の感想文は、すべて走り書きのものでありましたが、四泊五日間の精神的緊張のままでのものだけに、それぞれに〝偽らざる述懐〟であり、また〝深い価値を持つもの〟でありました。その文を短くつめる作業は、こちらの心身がくたくたになるほどの至難事で、どうやらまとめましたものの、必ずや、参加者皆さんのご不満はきっと沢山に出ることと存じます。お許し下さい。ただ一言申せば「私は生の感想文を拝見しながら、いくたびも感歎し、そして痛く疲れ、而も一方では、何とも表現し得ぬ〝活力〟を、私自身に与えていただいたことに、心から感謝申し上げてをります」といふことであります。それは、この合宿教室を率直に受けとめた方、さうでない方、いづれを問はず、でありました。

かうした作業を了へて、まとめ上げたとき私にはフト脳裡をかすめたことがあります。といふのは、「この冊子はもしかすると、わが国の精神文化史上の、得難い記録なのかも知れないなあ。とにかく四百名もの人々が心身の全エネルギーを傾倒して生み出した珠玉の言葉の文集なのだから」と感じたのであります。

思へば、巻頭の「〝はしがき〟に代へて」の理事長の一文にもありますやうに、この秋以降の日本は、ますます激動の時を迎へるやうです。それを、まともに受けとめ、なんとしても祖国日本の悠久の生命を、正しく、雄々しく、豊けく相承してまゐらねばなりません。その祈念の中に、この〝あとがき〟を擱筆させていただき、あはせて、陰に陽にこの冊子の出版までにご協力を惜しまれなかった同人各位に、心からの御礼を申し上げます。

そして最後に、この合宿教室の開催について一方ならぬお力添へを下さった方々にお礼を申し上げ、さらに参加者各位の御健康を祈ります。

（関正臣記）

資料
第十七回〝合宿教室（阿蘇）〟感想文集
非売品
昭和四十七年十月三十日発行
編集兼発行者
東京都中央区銀座七―一〇―一八　柳瀬ビル
電話（五七二）一五二六～七番
社団法人　国民文化研究会
理事長　小田村寅二郎
編集担当　関　正臣